

# O'ZBEK HIKOYALARI ANTOLOGIYASI

(o'zbek tilidan yapon tiliga tarjimalar)

## ウズベク短編小説集

(ウズベク語から日本語への翻訳)

**Toshkent - 2014**

**タシケント - 2014**

O‘ZBEKISTON RESPUBLIKASI OLIY VA O‘RTA  
MAXSUS TA’LIM VAZIRLIGI

ウズベキスタン共和国高等・中等専門教育省

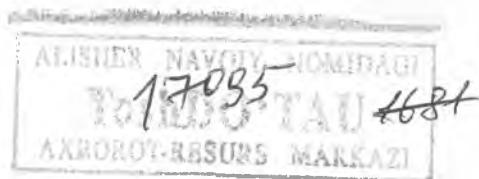
TOSHKENT DAVLAT SHARQSHUNOSLIK INSTITUTI  
タシケント国立東洋学大学

# O‘ZBEK HIKOYALARI ANTOLOGIYASI

(o‘zbek tilidan yapon tiliga tarjimalar)

## ウズベク短編小説集

(ウズベク語から日本語への翻訳)



Toshkent – 2014  
タシケント – 2014

Ushbu to'plam ITD-1-144 "O'zbek adabiyoti namunalari  
sharq tillariga tarjima qilishning nazariy va amaliy masalalari"  
ilmiy-tadqiqot loyihasi doirasida tayyorlangan. Tarjimalarni tayyor-  
lashda Toshkent davlat sharqshunoslik institutining yapon filologiyasi  
yo'nalishida tahsil olayotgan magistr, talaba, ilmiy-tadqiqot ishlari va  
badiiy tarjima bilan shug'ullanib kelayotgan mustaqil tadqiqotchilar  
ishtirok etdilar. To'plamdan yapon tili darolarida xristomatiya sifatida  
foydalanish mumkin. Shu bilan birga o'zbek adabiyoti bilan qiziqqan  
yapon tilida so'zlashuvchilar ham endilikda o'zbek hikoyalarini o'z  
ona tillarida o'qish imkoniyatiga ega bo'ladilar.

***To'plovchi va nashrga tayyorlovchi:***

*Gulyamov Izzatilla*

***Muharrirlar:***

*Tursunova Nilufar*

*Ishimura Ikumi*

***Taqrizchilar:***

*Xalmurzaeva Nodira*

*Xayrulla Xamidov*

To'plam Toshkent davlat sharqshunoslik instituti Kengashining  
2014-yil 6-noyabr 3-sonli qarori bilan nashrga tavsiya etilgan

本短編小説集は、ITD-1-144「ウズベク文学優秀作品の東洋アジア諸国語への翻訳プロジェクト」の指針に沿って作られたものである。今回のこの翻訳短編小説集を作成するにあたり、タシケント国立東洋学大学 日本語学科所属の大学院生、学部生、研究生にご協力していただいた。このウズベク語短編小説集は、日本語の授業において特別参考文献になると思われる。それだけではなく、ウズベク語文学に深い興味をお持ちの日本語母語話者は、日本語でウズベク文学作品の精読が可能となった。

**発行責任者**

グルヤモフ・イザット

**編集者**

トルスノヴァ・ニルファル

石村 育美

**評論家:**

ハルムルザエヴァ・ノディラ

ハイルツラ・ハミドフ

本編小説集は、2014年9月29日にタシケント国立東洋学大学教育団からの指導提案を受け、発行が行われました。

## SO‘Z BOSHI

O‘zbekiston va Yaponiyani bog‘lovchi sabablar talaygina. Birgina bunga misol Buyuk Ipak Yo‘li ikki buyuk mamlakatni birlashtirdi. O‘zbekiston mustaqillikka erishgach aloqalarning yangi bosqichiga o‘tildi. Bunday do‘stlik rishtalariga qurilgan aloqalar hozirgi kunga kelib adabiy-ma‘naviy aloqalarning rivojlanishi uchun turtki bo‘ldi desak adashmaymiz. Shuni ta‘kidlash lozimki, Respublikamizning bir necha oliy o‘quv yurtlarida, akademik litseylarida va umumta‘lim maktablarida yapon tilini o‘rganayotgan talabalar soni ham ushbu qisqa davr ichida keskin ortdi. Endilikda yosh avlod yapon tilidagi maqolalar va xattoki badiiy asarlarni bemalol o‘qiy oladilar. Shu bilan birgalikda yaponshunoslikni o‘rganishga va yapon tilida ilmiy tadqiqotlarni amalga oshirishga keng imkoniyatlar ochildi. Ushbu jabhada qilinayotgan ishlar ichida Toshkent davlat sharqshunoslik instituti yapon filologiyasi kafedrası o‘qituvchilari, talaba va magistrleri, tadqiqotchilarining ishlari ko‘zga tashlanadi. Avvallari yapon tilidan vositachi til orqali o‘zbek tiliga tajimalar qilingan bo‘lsa, endilikda asl nusxa bilan ishlay boshlandi. Mazkur yo‘nalishning o‘qituvchi va talabalari tomonidan hozirgacha Yaponiyaning bir nechta buyuk shoir va yozuvchilari qalamiga mansub roman, hikoya, novellalar va she‘rlar ham o‘zbek tiliga tarjima qilindi. Ulardan ko‘plari nashrdan chiqib keng kitobxonlar e‘tiboriga havola etilganligi gapimizning isboti bo‘la oladi. Xalqaro va Respublika miqiyosida o‘tkazib kelinayotgan ilmiy-amaliy anjumanlarda o‘zbek yaponshunoslari yapon adabiyoti bo‘yicha ma‘ruzalar qilib ilmiy jamoatchilikni yapon adabiyoti durdonalari bilan tanishtirib kelmoqdalar. Yuqoridan ko‘rinib turibdiki o‘zbek yaponshunosligining bugungi kunda yapon adabiyotiga qiziqishi juda katta. Bu qiziqishni nafaqat tor doiradagi ilmiy jamoa o‘rtasida, balki adabiyotga qiziqqan keng omma orasida ham sezish qiyin emas. Yapon adabiyoti butun jahonda adabiyot muxlislarining mo‘jizaviyligi bilan, janrlar xilmaxilligi bilan, falsafiy va tarbiyaviy g‘oyalari bilan o‘ziga etib kelgan.

Shu bilan bir qatorda yaponiyalik do‘stlarimiz ham bizning ona tilimiz bo‘lmish o‘zbek tilini o‘rganishga juda katta qiziqish bilan qarashmoqda. Buni yorqin misoli sifatida Yaponiyaning ayrim oliy o‘quv yurtlarida o‘zbek tilining o‘qitilishi, hamda mamlakatimizga ilmiy tadqiqot ishlarini olib borish uchun kelayotgan ayrim yaponiyalik yosh tadqiqotchilarning o‘zbek tilini o‘rganib, unda bemalol so‘zlasha olayotganliklarini ko‘rishimiz mumkin.

Shularni inobatga olib, bir guruh yaponshunoslar o‘zbek hikoyalardan bir nechta namunalarni tarjima qilishni niyat qilib qo‘ygan edik. Bu boradagi ilk ishlardan 1997-yilda nashrdan chiqqan “O‘zbek hikoyalari antologiyasi” kitobiga kiritilgan hikoyalardan tarjima qilindi. ITD-1-144 **“O‘zbek adabiyoti namunalari sharq tillariga tarjima qilishning nazariy va amaliy masalalari”** ilmiy-tadqiqot loyihasi doirasida Toshkent davlat sharqshunoslik institutining yapon filologiyasi yo‘nalishida tahsil olayotgan talaba, magistr, ilmiy-tadqiqot ishlari va badiiy tarjima bilan shug‘ullanib kelayotgan mustaqil tadqiqotchilar tomonidan ushbu tarjimalar to‘plami tayyor holga keltirildi.

Ushbu tarjimalarni amalga oshirishda yaqindan yordam bergan Toshkent davlat sharqshunoslik instituti yapon filologiyasi yo‘nalishida tahsil olayotgan talabar va bitiruvchilariga samimiy tashakkurimizni izhor etamiz.

Aminmizki, adabiy-madaniy aloqalarni abadiy do‘stlik rishtalari bilan mustahkam bog‘layotgan yapon kitobxonlari uchun ham ardoqli bir sovga bo‘lib qoladi.

Umid qilamizki, mazkur tarjimalar to‘plami O‘zbekiston va Yaponiya o‘rtasidagi adabiy-madaniy aloqalarni va do‘stlik rishtalarini mustahkam bog‘lashda ko‘prik o‘rnini o‘tardi.

*Gulyamov Izzatilla*

ウズベキスタンおよび日本の相互関係が結ぶ理由が多数ある。一つの例として、両国の人と人、町と町、文化と文化を結んでいたシルクロードが挙げられる。ウズベキスタンは共和国としてが独立し、日本との協力関係がさらに行き詰まっている。

現在に至って、この友好関係はウズベキスタンと日本の文学・文化関係の確立にも十分影響を与えていると言える。特に、ウズベキスタンにある幾つかの教育機関や高等学校において、日本語学習者の人数がだんだん増えつつある。

最近、日本語の習得に打ち込んでいる若い子たちは、日本語で書かれているエッセイや記事、文学作品などの購読をしている。また、日本学研究が活発的に行われ、そのきっかけ日本語で研究できる研究員の質が徐々に向上している。

したがって、タシケント国立東洋学大学日本語学科の教員や学部生、大学院生、研究生の実力があがり、恵まれた研究環境ができた。

現在、本学科の教員や学生により、日本の偉大な詩人・作家の小説、詩などのウズベク語への翻などが進められてきている。翻訳された小説などは発行され、読者に購読されていることはその証拠となる。国内と国際学術会議などではウズベク日本学習者は日本文学について様々な発表などを行い、ウズベク読者に日本文学優秀作品などを紹介している。それは、日本文学に深い興味を持っているウズベク日本学習者が増えてきており、研究者だけでなく、広い範囲の読者にも購読されているのが明瞭である。

日本文学は独自のジャンルで書かれた豊かな小説があり、道徳・哲学的な思想をもっていることで知られている。これと同様に日本の方々も我々の母語であるウズベク語に興味をもって、学んでいる。

一つの例として、日本のある教育機関などにおいてもウズベク語が教えられ、研究が目的で母国に来る若手研究者はウズベク語を学び、自由にコミュニケーションを取るようになってきた。

日本語母語話者のウズベク学習のため、何人かの日本語学習者でウズベク短編小説の翻訳を行う計画を立てていた。1997年に発行された「ウズベク語短編小説集」という編集に掲載されている短編小説を翻訳した。本短編小説集は、ITD-1-144「ウズベク文学優秀作品の東洋アジア諸国語への翻訳プロジェクト」の指針の沿って、タシケント国立東洋学大学日本語学科所属の大学院生、学部生、研究生からのご協力で本短編小説の翻訳版が出来上がった。

今回の翻訳短編小説集を作成するにあたり、大変多くの方からご指導・ご協力をいただいた。特に、タシケント国立東洋学大学日本語学科所属の大学院生、学部生、研究生にご協力・ご助言をいただき、心よりお礼申し上げる。

この短編小説集は、日本人母語話者のウズベク語学習者にとってよいプレゼントになり、ウズベキスタンと日本の文学・文化関係の確立の架け橋になると期待される。

グルヤモフ・イザットより



## 晩冬のチューリップ

### I

いち、に、さん、し…ご、ご、ろく！しち、はち、きゅう、じゅう…

小さくて、赤い糸で飾りがなされてたボールが転がって行って牛小屋のそば植えてあるとてもおいしそうな若い杏の木にはねて小さな池に「ポチャン」と音をたてて落ちてしまいました。

遊んでいた少女達はみな、

—わあ～水に落ちちゃった～

と叫びました。ボールを捕まえようとしていたシャロファットホンが小池の前で立ち止まりました。

ボールは沈んでから池の真ん中から浮かび上がってきて少女達が見つめる目の前で誇らしげにのんびりと流れはじめました。

少女達は水の上でゆったりと流れているボールを少し眺めていて、お互いに目と目を合わせて微笑みました。

肉屋の主人トージの末っ子トルグンプシュが牛小屋の屋根に上って木の枝を一本折って来ました。そしてそれを使って水を自分のほうに掻き寄せはじめました。少女達はトルグンプシュのそばでボールが近づいてくるのを待っていました。

水は少女たちのほうへ流れ始めて、ボールは浮いたり、沈んだりしながら近づいて来ました。少女達は大変騒ぎながらボールを捕まえました。

ぬれたボールをシャロファットホンは手にとってこういいました。

—逃げないで、もう捕まえたからね。

そう言ってボールを地面につきました。それを見てトティホンはボールを手にして怒って言いました。

—ボールに罪はないよ、ボールは生き物じゃないわよ。あんたがたが落とすのになんでこのボールをいじめるの？

そう言いながらボールをきれいにしようと力を入れて絞りはじめました。

シャロファットホンは少女たちにいいました。

-どんなに絞って乾かしてもぬれたボールでゲームはできないよ。誰か別のボール持ってる？

と聞きました。

みんなはだまりこくって・・・

-わあ～誰もいないの？サルタナットが持っていたでしょ？

-私昨日まで持っていたけどグルノラがなくしちゃったの。

-それじゃゲームはおわりね？

-じゃ他のゲームをしよう。

-え～ボールゲームが一番いいゲームでしょ。

-シャロファットホン、あんたのロシアのボールを持って来たらどう？

-あれは破れてだめになったんだよ。

-えっ、それはいつのこと？

-ずっと前よ。

そのとき庭の小さなドアからあわてて小さな女の子が駆け寄ってきました。

トルグンブシュは突然：

-あっ、妹が来た。家にボールを取りに行かせるわ。

-はい、はい、ファジラットちゃんを行かせよう。

とみんなが賛成しました。

小さな女の子ファジラットちゃんは駆け寄ってきてお姉さんに抱きつきました。そしてお姉さんに：

-こっちにきて、面白い話があるわよ。

少女達はとっさに：

-えっ、面白い話なら私たちにも教えて！

-いいえ、お姉さんだけよ。

-じゃお姉さんから聞いちゃうもんね。

お姉さんと妹は池のそばまで行きました。警備員であるエシマットの娘でおしゃべりで、面白い話なんでも知っているティッラホンが立ち上がって：

-面白い話って教えなくても知ってるわ。

と言いました。

-知ってるなら教えてよ。

-いつものようにトルグンブシュに娘むこが来たらしいよ。  
みんなが笑いました。そのときトルグンブシュが戻ってきて：  
-私じゃないわ。シャロファットホンに来たみたい。

少女達はお互いに目と目を合わせました。シャロファット  
ホンは真っ赤になって立ち止まりました。

## II

シャロファットホンの父親は昔から有名な商人でした。苦  
しい時はお父さんは儲かっていましたが、去年の春の初めに破  
産してしまいました。持っていた財産を売り払って借金をすべ  
て返済しました。そしてイスラムのソフィになって一番偉いエ  
シヤンのうちにいくようになりました。

朝早くエシヤンの家に行ってイスラムのお祭りがあるう  
なかるうがそこで仕事をしていました。夜は家に帰って来まし  
た。家に帰って食事を少しとってから、黄色いジャイナマズ<sup>1</sup>  
の上に座って、じゅずを何回も回して「義務」を読んでから、  
朝までおいおい泣いていました。

ある日エシヤンの家でとても大きなお祭りがありました。  
とても楽しいお祭りでした。そこにほかの町からも有名な人  
たちがやって来ました。朝のお祈りのバムダット<sup>2</sup>の後始まり、  
夕方まで続きました。何人かがそこでぐでんぐでんになってし  
まいました。酔っ払った人のうちの何人かはプールに飛び込ん  
だりもしました。この日はこの世の最後の日のようでした。

翌日の朝エシヤンは左右に三人ずつのホフィズの間座っ  
ていました。エシヤンは下を向いて黙りこくっていました。部  
屋の外で大騒動が起きて、一人は羊を連れてきて、一人はパン  
を持ってきて、一人は豪華な衣服を持ってきました…

サマンダルはそのプレゼントを見ていました。

あるソフィは：

---

<sup>1</sup>「ジャイナマズ」一布から作られて、イスラム教でお祈りするとき使  
います。

<sup>2</sup>「バムダット」一朝早くまだ太陽が出ていないうちにするお祈りのこと  
です。

— とてもよい善行ですね。スルトン・オリフ（エシアン）  
にお会いになってください

— いいながらエシヤンのたくさんのお祈りをみんなに伝えて  
いました。そして笑いながら

— バイアカ<sup>3</sup>、あなたのプレゼントはいつ持って来るのですか。  
と聞きました。

— 門から出るときにサマンダルはこう言いました。

— そのうちに持ってきますよ。

— いいながら頭を下げました。

サマンダルは家に帰るまでの間いらいらしていました。自  
分の先生のエシアンに大きな、できればみんなよりもいい物を  
あげたかったのです。しかし家にはいいプレゼントはありません  
でした。借金の返済で価値のあるものは全部なくなっていま  
した。どんなに考えても、いい考えが浮かびませんでした。

— 昔だったら、額に斑点がある馬をあげたのに……

心が痛みました。お金持ちだった時を思い出していました。  
手怪なものはあげたくなかったのです。ほかの人よりももっとも  
っといいものをあげるについて考えていました。突然お金持  
ちのヨルダシュを思い出しました。ヨルダシュはエシアンにたく  
さんのお米と、一頭が一番いい馬と衣服をプレゼントしました。

そんなことを考えながら家の庭に着きました。内側の部屋  
に入ろうとしたら奥さんに止められました。

— この部屋の中に女たちがいるよ。外側の家に行って。そ  
こに私がプロフを持って行くわ。

サマンダルは小さなお皿で一人でプロフを食べ始めました。  
プロフを半分くらい食べた頃に奥さんが来て隣に座りました。

— 早く帰ってきてくれて良かった。娘むこが娘の結婚話で  
来た。どう答えたらいいか迷っていたところなの。

— 相手は誰だい？誰が話に来てるかい？

— アジジャとルスタムの奥さんが来てるわ。お相手はあの  
エシアンだ。エシアンは年をとって、奥さんが二人もいるのに  
もう一人奥さんを欲しがってるそう。

<sup>3</sup>「バイアカ」— 直接訳すればお金持ちのお兄さんで、お金持ちの人を  
呼ぶ言葉です。

それを聞いてサマンダルの目がきらきらして：

－本当？あのエシヤンかい？どうして俺に言わなかったんたろうなあ？

－エシヤンは年寄りでしょう？でも娘はまだ若い、17歳と返事してもいい？

誰かが声をかけました。

－クムルブーシュ娘むこさんたちが帰っちゃうよ。

クムルブーシュは立ち上がって何か言おうと主人のほうを向きました。

サマンダルは若い娘のこと、エシヤンのこと、プレゼントのことを考えていました。あのえらいエシヤンが自分のおむこさんになると考えるとうれしくなりました。

－たった一人の娘をエシヤンにプレゼントしても悪くないと言いました。

クムルブーシュは急な返事を聞いて真っ青になって、石のように固まってしまいました。

### III

シャロファットホンはサマンダルのたった一人の娘でした。この子は地元の美人で、お裁縫が上手ずで、ほがらかで、そのような女の子はほかにはいませんでした。マハツラ4の若い男が二・三人が集まると彼女このとをを話題にしていました。「この子のおむこさんは神様が選んでくれるだろう？誰の家を幸せにするかなあ」とみんなが話していました。シャロファットホンをエシヤンに結婚の話が広がったらマハツラで何日かその話題で持ちきりでした。

道で馬車が列を作って草競馬をしていました。馬車が十五台行列を作りました。花嫁が乗せた行列は女たちがヨルヨル5を唄っていました。ヨルヨルはみんなに聞こえていました。

サンディク6、布団、絨毯、風呂敷などがつまっていました。その荷物の上にも何人かの女が座って普通に進んで行きました。

<sup>4</sup>「マハツラ」――戸建ての家がたくさんあるところ

<sup>5</sup>「ヨルヨル」――花嫁行列の唄

みんなは大声で騒ぐ、にぎやかな馬車はエシヤンの家に近づきました。道の真ん中に燃えされた火の炎が天まで届くようでした。火の周りに集まった男たちも大声でヨルヨルを唄っていました。パランジ<sup>7</sup>をたらし、チャパンをかぶって、ロマルを結んでいた女たち、奥さんたち、女の子たちがその集団にヨルヨルを唄いながら加えました。

火の周りに集まった夫婦たちは突然「花嫁が来た、花嫁がきた！」と叫び出しました。何人かの男性が薪を抱きかかえて持ってきて火にくべました。焚き火が大きくなりました。みんながあわてていました。子供たちはお嫁さんの行列に走って行きました。

大騒ぎのところに馬車もつきました。人ごみの中から声が上がりました。

—花嫁が到着したよ。あれが彼女が乗った馬車だ。

御者はみんなに花嫁を見せながら火の周りをぐるりと回って玄関の前にとまりました。

—花むこさん、花むこさんどこにいらっしゃいますか。通してくれ、通してくれ

という声が聞こえました。

その時に真っ白のひげをはやした老人の「花むこ」が特別な服を着て、絹のベルトをして弟子たちに手伝ってもらいながら足をひずって馬車に近づきました。

また人ごみの中から：

—抱き上げて！抱き上げた！

—がんばれ！がんばれ！

—抱き上げて！

と声が上がりました。

老人の花むこさんはふるえる手を花嫁に差し出しました。彼女を抱き上げて一・二歩進んで地面に降ろしました。

また大騒ぎが始まりました。

—良かったですね。良かったですね。

---

<sup>7</sup>「サンディク」一箱の形で、飾ったあります。中に布や服を入れます。

<sup>8</sup>「パランジ」一女の人は顔を隠すために使います。

—まだ力がだいぶありますね。

大騒ぎが夜中まで続きました。結婚式があつた所では人がだんだん少なくなりました。そして真っ暗になって、静かになりました。

#### IV

その後してからエシヤンの家から二人の若い男が出て来ました。

—道は真っ暗だ。

—空に一つも星がないんだ。

—行くぞ。今晚はエシヤンの希望通りの日だった。

—それもそうけれども、あの子に同情せざるを得ない。かわいそう、相手があんなやつだったから。

—それはそうさ。彼女の親父、まったくひどいやつだ。

—ひげを真っ白にしたじじいが孫のような花嫁さんを馬車から抱き上げて降ろしたのを見ただろう？とてもくやしいね。何に例えればいいのかなあ、わからないね。

そのとき道角にいた警備員のママットが悲しげに口笛を吹きながらいました。

—そうだね。ほら、世の中は思い通りにならない。それをチューリップの上に雪が降るといふんだよ。

若い男たちはこれには答えないとぼとぼ歩いて消えました…

アブドゥラヒモヴァ・ディヨラ訳  
*Abdurahimova Diyora tarjimasi*

## QOR QO'YNIDA LOLA

Bir, ikki, uch to'rt...besh; besh...olti! Yetti, sakkiz, to'qqiz, o'n...

Kichkina, qizil ipdan bezalgan to'p (kaptov) aljib qochib ketib, yerto'la og'ilning devoriga yondoshib o'skan yosh qantako'rikka borib tegdi-da, sakrab hovuzga «sho'p» etib tushib ham ketdi...

Qizlar barchasi birdan:

Voy, o'laqolay, hovuzga tushib ketdi! – deb qichqirishib yubordilar. To'pni tutish uchun quvalab borayotg'on Sharofatxon ham hovuz yonida qotib qoldi...

To'p suvga shung'ib ketib hovuzning o'rtasidan chiqdi va qizlarning xavasli, o'ynoqi ko'zlari oldida gerdayib, sekingina suza boshladi.

Barcha qizlar suv yuzida erkalanib suzib yurgan to'pga biroz qarashib turdilar-da, bu orada bir-birlariga boqishib yumshoqqina kullishib ham oldilar.

Toji qassobning kichik qizi Turg'unbush yugurib borib og'ilning tomig'a chiqdi-da, bir chekkaga bosib qo'yilg'on tut o'tinidan bitta uzun butoqni sindirib olib, hovuz bo'yiga keldi va haligi butoq bilan suvni o'z tomoniga torta boshladi; qizlar uning tegrasiga duv yig'ilib, to'pning suvdan chiqishini kuta boshladilar.

Suv yasama oqish bilan qizlar tomong'a oqa boshlog'ondan so'ng, yarim belidan suvga ko'milgan to'p dam botib, dam chiqib sekingina qirg'oqqa keldi. Qizlar qiy-chuv bilan ushlab ham oldilar.

Suv bilan shalabbo bo'lg'on to'pni Sharofatxon oldi-da, «xu, qochmay o'lgin, tutilding-ku!» deb yerga urdi. Uning bu ishiga Abdulla jallobning qizi To'tixonning achchig'i keldi, darrov borib yerdan to'pni oldi va:

– Hoy, bunda nima yoziq? Buning joni bo'lmasa... O'zingiz tushirib, bu boyaqishni tag'in qarg'aysizmi? – deb to'pni suvda chaynab olg'ondan so'ng, labini tishlab, bor kuchi bilan siqmoqqa boshladi.

Sharofatxon qizlarga qarab:

– Baribir, qancha siqib quritmoqchi bo'lsakda, ho'l to'p chiqmaydur, endi boshqa kimning to'pi bor?

– Voy, o'la qolay, xech qaysinglarniki yo'qmi? Saltanat, seniki bor edi-yu?



– Menki bor edi-yu, tunov kun Gulnor o‘lgur, yo‘qotib kelibdir...  
– Ito‘lmasa, o‘yin tugabdir-da?  
– Yo‘q, boshqa o‘yin qilamiz!  
– Hu, o‘laqolsun, to‘p o‘yidan ham yaxshisi bormi?  
– Hay, Sharofatxon, siz o‘zingiz kira qolingiz, o‘rus to‘pingizni olib chiqasiz!

– O‘rus to‘pim yorilib edi-ku...

– Voy, essizgina, qachon?

– Qachonlari-yu...

Shu vaqtda bog‘ning kichkina eshikchasidan hovruqqancha yugurib bir kichkina qiz kela boshladi.

Turg‘unbush birdan:

– Ha, ana mening singlim chiqib qoldi, uyga to‘pga yuboraman! – dedi. Barcha qizlar:

– Ha, ha, Fazilatni yuboramiz! – dedilar.

Kichkina qiz – Fazilat yugurib kelib opasining bo‘ynig‘a osildi.

– Bir chekkaga chiqing, opa, sizga qiziq gapim bor.

Barcha qizlar birdan:

– Qizig‘i o‘lsin, qizig‘i, aytaber barchamizg‘a!

– Yo‘q, opamning o‘ziga aytaman.

– Bo‘lmasa, opang bizga aytib beradir...

Egachi-singil hovuz bo‘yig‘a ketdilar... Eshmat qorovulning maxmadana, qiziq gaplarni bilaturg‘on qizi Tillaxon turib:

– Qiziq gapi nima bo‘lar edi, aytmasa ham bilaman.

– Ayt-chi, bilsang?

– Nima bo‘lar edi, Turg‘unbushga kuyov kelgandir! – Barchalari kulishdilar. Turg‘unbush qaytib keldi-da:

– O‘la qolsun, Tilla, menga kuyov emas, Sharofatxonga sovchi kelibdir! – dedi. Qizlar bir-birlariga qarashib oldilar. Sharofatxon qip-qizil qizarib, turg‘on yerida qotib qolg‘on edi.

## II

Sharofatxonning otasi Samandar aka ilgaridan ot chiqarg‘on bir savdogar edi. Shuncha og‘irchilik yillarda, qiymat, kasod vaqtlarida ishini taraqlatib kelib, oxiri o‘zg‘on yili erta bahorda sing‘on. Bor-yo‘g‘ini qarzg‘a sotib berganidan so‘ng, juda so‘fi bo‘lib eshonlarni-kida chuvalashib qolg‘on edi.

Erta bilan saharlab eshonnikiga ketar, zikr bo'lsa-bo'lmasa eshonning ishini qilib, kechqurun shomlatib uyga kelar edi. Uyga kelgandan so'ng ham bir qoshiq quyuq-suyug'i bo'lsa totinib, malla joynamozning ustiga chiqib o'tlurib, qahrabo tasbehni necha davr aylantirib «vazifa»larini o'qur, so'ngra to yarim kecha-sahargacha ho'ngur-ho'ngur yig'lar edi...

Bir kun eshonnikida katta va qizg'in bir zikr bo'ldi. Zikrga boshqa shaharlardan ham o'tli-nafas bilan o'qiyturg'on hofizlar keldilar. Xonaqohning ichi zich to'ldi. Erta bilan bamdoddan so'ng boshlag'on «zikr» xuftonga yaqin zo'rg'a tugadi. Bir necha kishi o'zidan ketib u yer-bu yerda yumalanib qoldilar. Yong'oq so'filardan bir-ikkitasi «jazava»ning ortig'lig'idan borib o'zlarini hovuzg'a tashladilar. Qisqasi, bu kun qiyomat bo'ldi.

Ertasi kuni erta bilan xonaqohning mehrobi oldida hazrat eshon o'lturganlar, ikki yonlarida uchtdan olti hofiz, bir o'n chamasi muridlar...

Eshon qutlug' boshlarini quyi solib «sukut»ga ketkanlar.

Tashqarida to'polon, shovqin, biri qo'y yetaklagan, biri non ko'targan, biri kiyim sarpo...

Samandar aka xonaqohdan chiqdi, haligi nazrlarning barchasini ko'rdi, ko'zdan o'tkazdi.

– Ha balli, barakalla, Sulton Orifning jamollarini ko'ring! – deb javrab, hazrat eshonning quchog'-quchog' duolarini xonaqohdan chiqarib berib turg'on so'fi kulib, o'ynab Samandar akaga qaradi-da:

– Ha, boy aka, nazrdan darak bormi? – dedi. Samandar aka darvozadan chiqar ekan:

– Bo'lib qolar, so'fi! – dedi.

Samandar aka uyga kelguncha ko'nglidagi tuyg'ular bilan tortishib keldi. O'zining piri va ustoziga tuzukkina, kattagina, iloji bo'lsa boshqa muridlar bera olmagan bir narsa bermakchi edi. Biroq, uyda arzigudek bir narsa yo'q. Arziyturg'on narsalari bo'lsa, barchasi qarzga ketkan... Ko'p o'yladi, biroq hech bir narsaga ko'ngli qaror topmadi.

– Agar ilgariqi vaqtim bo'lsa, olaqashqani tutar edim...

Ko'ngli og'ridi, bir zamong'i boyliqlari, davlatlar esiga tushdi: ola qashqasi, turuq yo'rg'asi, bo'yi tevadek Maskov zovud oti... uch faytun, yer-suvi...

Uncha-munchani berishni o'ziga ep bilmadi. Boshqa nazrlarni bosib ketgundek bir narsa berishni o'ylar edi.



Ujdan Yo'ldosh boyvachcha esiga tushib ketdi.

– Yo'ldosh boyvachcha o'n botmon guruch, bitta yaxshi uloqchi ot, bosh-oyoq kiyim berdi...

Shunday xayollar bilan hovlisiga yetib, ichkari uyga kirmakchi bo'lg'on edi, xotini to'xtatdi:

– Ichkarida xotinlar bor, siz tashqari uyga kirib turing, qo'noqlarga osh-suv qilg'on edim, men sizga osh olib chiqay!

Samandar aka kichkina tovoqdagi oshni yolg'iz o'ltirib yemakka tutindi. Oshni yarimlatg'on ham edi, oldiga xotini chiqib qarshisiga o'ltirdi:

– Yaxshi ham kelib qoldingiz, otasi, qizingizga sovchilar kelib, men nima deyishni bilmay turib edim!

– Kim ekan ular, qaerdan ekan?

– Anovi Aziza otin bilan Rustam akaning xotini... o'zingizning eshoningizdan sovchi bo'lib kelishibdirlar... Endi eshonning o'zlari dam «qarib quyilmag'on, achib suyilmag'on»lar, deya ikkita xotinlari ustig'ga tag'in bu...

Bu so'zni eshitishi bilanoq Samandar akaning ko'zlari chaqchayib ketdi:

– To'g'rimi, eshonnikidanmi, to'g'rimi? Eshon nega o'zimga mazmun qilmadilar ekan?

– Endi katta odam, men sovchilarga hali qizim yosh, endi 17 ga chiqdi, dedim. Shunday deb javob bera qolaymi?

Bu vaqt kimdir, tashqaridan bir xotin tovushi eshitildi: – Qumribush, qo'noqlar turishdilar! – Qumribush o'rnidan turdi, eriga bir nima degandek qaradi.

Samandarboy bir yosh qizini, bir eshonni, boyagi nazr-niyoz masalasini, eng so'ng kimsan hazrat eshonning kuyovliklarini o'ylab turdi-da:

– «Bitta qizimiz bo'lsa, hazrat eshonimizg'a tutdik, sadag'alari ketsun!» degil! – dedi.

Qumribush kutilmagan bu gapdan oqardi, ko'kardi, suvratdek qotib devorga suyalib qoldi...

### III

Sharofatxon Samandar akaning bitta-yu bitta qizi edi. Bu qiz shu tegraning ko'rklilikda, chevarlikda, sho'xlik va o'ynoqlilikda bitta-yu bit-tasi edi. Mahalla-ko'yning o'spurunlaridan ikkita-uchtasi bir yerga yig'il-

sular, topg'on-tutg'onlari shul Sharofatxon masalasi bo'lur. «Bu qiz qaysi xudo yarlaqog'onniki bo'lur ekan? Kimning uyini obod qilar ekan?» deb bosh og'ritarlar edi. Sharofatxonning eshonga berilish xabari chiqqondan so'ng, butun mahalla-ko'y yana bir necha kun shuning dovrig'ini qilishdilar.

Ko'chada qator-qator aravalar chopishib, bir-birlaridan o'zishadirlar.

O'n-o'n besh aravaga bo'lg'on xotinlarning tartibsiz «yor-yor»lari dunyoni buzib, ko'kni ko'tarib borar edi.

Sandiq, ko'rpa, gilam, tugun va boshqa narsalar yuklagan va yuklar ustiga yana bitta-ikkita kampir o'tqizgan aravakashlar ilgarigilardek bir-birlari bilan basma-baslashib chopishar edilar.

Shu guldird-sholdir, shovqin-suron, qiy-chuv bilan ketayotqon ko'ch eng so'ng eshonning eshigiga yaqinlashdi. Ko'chaning o'rtasig'a gurullatib yoqilg'on, alangasi osmong'a chiqqon o'tning tegrasiga to'plang'on bir to'p erkaklar tovushlarining boricha «yor-yor»ni cho'zg'on; ularning berigi biqinida boshiga paranji yoping'on, chopon tashlag'on, ro'mol tutg'on xotinlar, kelinlar, qizchalar... o'z oldilariga katta to'p bo'lib, ular ham «yor-yor»ni qo'yib yuborg'on edilar.

*Taxta-taxta ko'puruk taxting bo'lsing, yor-yor,  
Paygambarning qizidek baxting bo'lsin, yor-yor!  
Uzun-uzun arg'amchi halunchakka yor-yor,  
Chakan ko'nglak yarashar kelinchakka yor-yor.*

Uning tegrasiga to'plang'on er-xotin barchasi birdan: «Kelin keldi, kelin keldi!» deb yuborishdilar. Bir necha yigit quchoq-quchoq g'o'zapoya olib chiqib, o'tning o'rtasig'a tashladilar, o't yana kuchaydi, yana alanga berdi.

Har kim pitirlab qimirlab qoldi. Bolalar qiz kelayotg'on tomong'a qarab chopishib ketdilar.

Shovqin, to'polon orasida aravalar yetdilar. Xalq orasida:

– Ana kelin, ana qiz tushgan arava! – degan gaplar boshlandi.

Aravakash kelinli aravani «namoyishkorona» bir suratda o'tning o'rtasidan otni qamchilag'oncha olib o'tib, eshikka yaqin bir yerda to'xtadi.

– Kuyov pochcha, kuyov pochcha! Taqsim qanilar? Qoch, qoch, – degan tovushlar ko'tarildi.

Bir vaqt oppoq soqolli, qari, bo'shahg'on bir chol (kuyov to'ra) ustiga zarbob to'n kiyib, katta o'rama belboq bog'lag'oni holda bir muncha oqsoqol muridlari o'rtasida sekingina sudralib aravaga yaqinlashdi.

Yana xalq o'rtasida:

– Ko'taring-a, kuyov pochcha, ko'taring-a!

– O'zingizni tetik tuting, taqsir!

– Ha, taqsir ko'taring!

Chol titrak qo'llarini aravaga uzatib, qizni ko'tardi va bir-ikki odum bosg'ondan so'ng yerga qo'ydi.

Yana xalq chuvirlashib ketdi:

– Barakalla, taqsir, barakalla!

– Bo'sh kelmadilar, taqsirim!

– Hali bellari baquvvat ekan taqsirimning!

Bu shovqing qiy-chuv, to'polon yarim kechaga borib to'xtadi. Haligi tomosha o'rni bo'lg'on ko'chada kishilar arib, qop-qorong'i, jimjit bir gulistonga aylandi.

#### IV

Bir vaqt eshonning eshigidan ikki yosh yigit chiqdilar.

– Ho'x-ho', ko'cha juda qorong'i-ku!

– Shuni aytgil-a, osmonda dorig'a ham bitta yulduz topilmaydur!

– Yuraber. Bu kecha xuddi eshon bobongni ko'nglidek bo'libdir.

– To'g'ri-ya, men qizg'a achinaman, boyaqish kelib-kelib kimniki bo'ldi-ya!

– Nimasini aytasan, otasining uyi kuysun, odam emas ekan!

– Soqolini oppoq tutadek qilib, nevarasidek bir qizni aravadan olishini qara, kishi chidamas ekan. Shuni bir narsaga o'xshatg'um keldi-yu, o'xshata olmadim-da!

Shu choq bir burchakda ko'cha poylab yotg'on Mamat qorovul yiglog'unday qilib hushtagini chalib oldi-da:

– Nimasini aytasiz, yigitlar, dunyo o'zi shunday teskari dunyo ekan... Lolaning ustiga qor yog'di!.. – dedi.

Yigitlar javob bermadilar va qorong'ilik quchog'iga kirib yo'q bo'ldilar...

## 私の泥棒ちゃん (事実に基づいた話)

父が死んでからもう数年間経った。今年、1917年の春に私の母も死んで、私たち4人の子供達は孤児になってしまった。その時、私はものすごく困っていた。その頃、祖母のロキヤは私達のことをいだわってくれた。私はいつも祖母を甘やかして「ロキヤばーちゃん」と呼んでいた。夜中、祖母と一生に私達は皆で外のテラスにとても古くて破れた布団をしいてねていた。布団の下にはウラテパ製の汚れた絨毯がしいてあった。

9月の終わりの夜だった。私達、孤児はお互いをたぎしめて暖めるようにして眠っていた。列の一番最後にはお母さんのスズメみたいになって祖母が眠っていた。祖母は今、80歳を越えた人で、いつも紙タバコを吸っていた。この夜も鶏が3回鳴いた後、私は祖母と誰かの話し声のせいで起きてしまった。本当に祖母は大きい声で誰かと話していた。中庭は私の祖先からのものでとても広くて、四角形だった。中庭は近所の家に囲まれていた。北の側にはいとこの家があった。ところが、彼らは夏になるや否や畑へ働きに行くから今、その家には誰もいない。

アー！すごい！信じられない！私たちの家にも泥棒が入った。私たち、孤児の家に寄る人もいるとは考えられなかった。明日、必ず皆、友人達に「私達の家にも泥棒が入った」と自慢しよう。しかし、友人達は信じてくれるかな？

泥棒はそのいとこの家の方からゆっくり歩いてきて、祖母のそばに来た時、うっかりクシャミをしてしまった。その夜、祖母はぜんぜん眠れなくてマクラを胸に抱えたまま色々な事を考えていた。ばーちゃんは言いました「私の泥棒ちゃん、オーイ！私の泥棒ちゃん！私の考えではあなたが生きていく為に屋根に登ったみたいだけど。あなたの今やっている仕事はとても危ないのに、何でかぜが治ってからしなかったの？」と言った。

-ワー！！！！おばーちゃん、あなたも、特に今日はよく寝ていればよかったのに、私のことを邪魔しないでください。

私は話が聞こえて目を覚ました。そして後で、話を全てこのように覚えている限り書きました。

- えーえー！泥棒ちゃん、私の頭の中にはいっぱいの問題があるのに、どうやって眠られるんですか。もう今、六ヶ月経ちました。一日も自由で、落ち着いて眠ったことはない。昼は眠くて家をグルグル回ったり、あちこちで鳥のようにちよっただけ眠ります。夜は、考えに夢中になって全然眠られない。

- おばーちゃん、何があなたを悩ませているの？と言ってその泥棒は着ている上着を脱いで枕のごとく頭の下に置いて横になりながら話しを続けた。

- 私はこの 4 人の孤児の将来を考えて悩んでいるのよ。最近、あなたも分かっているでしょう。生きることは石よりも固くて難しいのよ。砂のような小さい形のパンでさえもすごく高い。今、この孤児には何の仕事もない。荷馬車を引く独身の伯父ちゃんのもうけたお金は自分たちの家族の為だけでせいっぱいです。生活するのは難しいから家にあるものを少しずつ売り払っている。そのようにしたら、家に何も残らないでしょう。エッハー！いつ子供たちが成長して自分で生活出来るようになるのだろうか。その上に、孤児達の一人だけが男で、三人が女の子だ。男の子は今、14 歳になったばかりだ。女の子達は早く結婚してほしい。生きていくことは困難、パンを見つけることも困難。

- なるほど。私には二人の子供と妻と年を老いた母がいる。「一匹の鳥には穀物も必要なら水も必要だ」という諺のように家族を養わなければなりません。一枚のパンを見付ける為に朝から夜まで何でもするしかない。僕は、自分が最近やっていることが好きでしょうか。実は、いつか僕も田舎でとても尊敬される靴直し屋の子供でした。父はいつもカリニスヶという政治家が皇帝になったら、必ず戦争が終わると言っていた。でも、私はそう思いません。

- 泥棒ちゃん、他の職業をしたらどう？

- どんな仕事をするんですか。どんな仕事に就いても今、お金をもうけるのは大変です。

父の仕事をしたらどうだろうかと思いました。でも一足の靴を作る為には皮も膠も釘もワニスも何もない。材料は作った靴よりも三倍高いものだ。運び屋になっても、今は昔のように沢山の買い物をするお金持ちの人達はもういません。ある日、フェルガナの有名な靴直しさんは全部の道具を一包みの小麦に取り替えた。それがいいんですよ。今、彼の作った靴をはくウズベクやキリギスやカザフのお金持ちの農家はもういません。最近、どの町角やどのマハラなどを見ても、あちこちで 10-15 人の孤児が汚れた手を伸ばして「おじちゃん、パンを下さい、お願い」と言う。自分の為にもパンが見つけれないのに、どうしてあげることが出来るのでしょうか。このような状態は私だけじゃない。マハラの皆、靴直しさんの状態は同じです。かじ屋達も布を織る人も製靴工達も学校の先生達も小さいパンのことで困っている。彼らは食べ物を見つけようとして国中をグルグル回っている。

- その戦争はいつ終わるかな？世界が終わるとはまさにこのことだろうか。ところで、あなたは家族を養う為にこのような悪いことをしているなら、どうしてお金持ちの家から盗まないですか。このマハラではカリムという商人とマトヨキブという金商売をする人がいる。とてもお金持ちだ。幼い子供も金で作られたお皿で食事をする。そのような人達の物を盗んだらどう？

- えー！！！！おばーちゃん、浅い考えをするんですよね。お金持ちの家に入るのは無理ですよ。彼らの家の壁は八階のビルのように高いし、門も鉄で作られている。

庭には必ず 2,3 頭のロバよりも大きい犬がいて、家を守っている。その犬は庭にチョウが飛んできただけで一週間鳴き続けますよ。それに、もしそのお金持ちの家に入ったら、必ず殺されてしまいますよ。

- なるほど。しかし泥棒ちゃん、いつも気を付けてください。逮捕されてしまわないように、気を付けて下さい。

- そうですね。ある日オリフという人の家に入って 4 羽の鶏を盗みました。

- しかし鶏を盗もうとした時、音はしなかったの？

—それもそうですが。でも世界では鶏よりも馬鹿なものないはずですよ。なぜなら私はいつも鳥を盗みに行く時、必ず一本の水をもっていくんです。そして鶏小屋に行った時、水を口に入れて、鶏に向かって吹き掛けます。そうしたら鶏が雨が降っていると思って、頭を下げて黙って寝てしまう。そして私は全部の鶏をカバンに入れてすぐ逃げ出す。

—すごい！あなたは鶏盗みがうまいね。

—でも、私の秘密も知られてしまいました。後で、私が逮捕されないように村長にその鶏のうちの数羽を渡したので逮捕されずに済みました。去年家にある全部の物を売って、村長に持っていきました。そうして私は戦争に参加しないで済みました。

—泥棒ちゃん、もうすぐ太陽が出ます。だから朝になるまえに、お帰りなさい。

何か持って帰りなさい。台所に行ったら大きな鍋があります。それを売って子供達にパンを買ってあげなさい。私たちの家では昔、人数がとても多かったのよ。その大きな鍋で皆に料理を作っていたのです。もうこれから大きな家族にはならないかもしれないですから、それを持っていきなさい。

—いいえ、おばーちゃん、そんなことを言わないで下さい。またいつか、あなたの家族は前よりも大きくなるでしょう。沢山の孫たちがこの庭で遊ぶでしょう。この困難な時期もいつか過ぎ去るでしょう。では、おばーちゃんそろそろ帰ります。もう朝になってきました。

—では、さよなら、私の泥棒ちゃん。

私はその泥棒が誰なのか知っていた。でも一度も誰かに言ったことはない。

メフモノフ・ファルフジョン訳  
*Mexmonov Farrux tarjimasi*



## MENING O'G'RIGINA BOLAM

Otamizning o'lganiga anchagina yil o'tib ketdi. Bu yil o'n yettinchi yilning ko'klamida onamizdan ham ajralib, shum yetim bo'lib qoldik. Biz to'rt yetimdan habar olib turishga katta onam – onamning onalari Rokiya bibi kelib turibdilar. Bu kishini biz erkalab Qora buvi deb ataymiz.

Oqshomlari buvim boshliq hammamiz oldi ochiq ayvonda uvin-to'da ko'rpa-yostiqlarga o'ralib, bittagina O'ratepaning kir ip shol-chasi ustida uxlaymiz.

Sentabr oylarining oxiri, ilk kuz oqshomlaridan biri edi. Havo anchagina salqin. Biz yetimlar bir-birimizning pinjimizga tiqilib, bir-birimizni isitib uyquga ketamiz. Qatorda eng so'nggi bo'lib, ona chumchuqday Qora buvim yotardilar, u kishi saksondan oshib ketgan, noskash kampir edilar.

Bu oqshom uch xo'roz o'tgandan keyin, Yetti qaroqchi yulduzi tik kelganda g'o'ng'ir-cho'ng'ir ovozdin uyg'onib ketdim. Buvim kim bilandir anchagina baland ovoz bilan suhbatlashmoqda edilar. Hovlimiz, ota-buvadan qolgan, anchagina katta bo'lib, to'rt burchak tanobi hovlilardan edi. Gir atrofi imorat, shimol tomonda amakivachchalarimiz turishardi. Lekin ular yozda boqqa ko'chib ketadilar. Hozir ular tomon bo'sh.

Buni qarang-a, bizning uyimizga o'g'ri kepti. Bizni ham odam deb yo'qlaydigan kishilar bor ekan-da dunyoda? Ertaga o'rtoqlarimga toza maqtanadigan bo'ldim-da: «Bizning uyga o'g'ri keldi». G'urur bilan aytilsa bo'ladi. Lekin ishonisharmikan?

O'g'ri o'sha amakivachchalarning tomidan sekin yura kelib, buvimning to'g'rilariga kelganda aksa urib yuboribdi. Buvim esa yostiqni ko'kraklariga qo'yib, til tagidagi nos bilan o'ylab yotar ekanlar. Buvim puf deb nosni tuflab, tomga qarab:

– O'g'rigina bolam, hoy, o'g'rigina bolam, hoynahoy biror tiriklikning ko'yida tomga chiqqan ko'rinasan, axir kasbing nozik, tumov-pumovingni yozib chiqsang bo'lmaydimi? – debdilar.

– Axir, buvijon, siz ham birorgina kecha tinchingizni olib uxlasangiz bo'lmaydimi, bizning tirikchiligimizning yo'lini to'saverasizmi? – debdi.

Men gap shu yerlarga kelganda uyg'onib ketgan bo'lsam kerak. Qolgan gaplarni eshitganimcha qilib yozaman.

– Hoy, aylanay, o'g'rigina bolam, boshimda shunday musibat turganida ko'zingga uyqu keladimi? Mana, olti oy bo'ldi, biror soat mijja qoqib uxlaganim yo'q. Kunduz kunlari garangday dovdirab yuraman. Biror yerga o'tib mizg'iganday qush uyqusi qilaman. Kechalari xayol olib qochib ketadi.

– Nimalarni xayol surasiz, buvijon? – Bu gapdan keyin ustidagi to'nini turmuchlab bo'g'otning ustiga yotiq qilib qo'yib, o'g'ri ham yonboshlab oldi.

– Nimalarning xayolini surardim. Shu to'rtta yetimning ertasini o'ylayman-da, bolam. Zamoni o'zing ko'rib turibsan, tiriklik toshdan qattiq, tuyaning ko'ziday non anqog'a shapig'. Hali bularning qo'lidan ish kelmaydi. So'qqaboshgina aravakash tog'alarining topgani o'zining ro'zg'oridan ortib, bularga qutloyamat bo'lishi qiyin. Ro'zg'orda bo'lsa: ko'z ko'rib, qo'l tutguday arzigulik buyum qolgani yo'q. Bir chekkadan sotib yeb turibmiz. «Turib yeganga turumtog' chidamas» deganlar. Eh-ha, bu bolalar qachon ulg'ayadi-yu qachon o'zining nonini topib yeydigan bo'ladi. Chor-nochor xayol surasan kishi. Tag'in bu yetimlarning bittaginasi o'g'il, uchtasi qiz. Endi o'n to'rttdan o'n beshga o'tdi. Qizlari qurg'ur qachon bir yerga elashib ketadi-yu. O'zi o'rab, o'zi chirmab oladigan joy chiqmasa bularga kimning ham ko'zi uchib turibdi deysan? Zamon qattiq, o'g'rigina bolam, zamon qattiq!

– To'g'ri aytasiz, buvijon, – dedi o'g'ri, – mening ham ikki bolam, xotinim, bitta kampir onam bor, bir tovuqqa ham don kerak, dam suv kerak, deganlaridek, shularni boqishim kerak. To'rtta chavati non topish uchun o'zimni o'tga, cho'qqa, Alining tig'iga uraman. Bo'lmasa ishlay desam bilagimda quvvat bor, aqlu xushim joyida. Menga hozir shu qilib turgan o'g'irlik kasbi yoqadi deysizmi? Tuppa-tuzuk ayolmand kosibning bolasi edim. Zamon chappasiga ketdi. Kerinska poshsho bo'lgandan keyin urush to'xtaydi, degan edilar. Hali-beri to'xtaydigan ko'rinmaydi. Hali dam zamon-zamon o'sha iligi to'qlarniki.

– Biror boshqa kasb qilsang bo'lmaydimi, bolam? – dedi kampir.

– Nima kasb qilay? Hamma kasblarning ham bozori kasod. Ota kasbim kavushdo'zlikni qilaymi? Avvalo shuki, kavush tikishga na charm bor, na sirach, na mih na lok. Masallig'ining o'zi bitib chiqqan

kavushdan uch baravar qimmat. Hommollik qilay desam, avvalgidek qoplab g'alla, qoplab sabzi-sholg'om oladigan badavlatlarning tuxumi qurigan. Tunov kuni shu mahallaning devkor etikdo'zlaridan Buvamat ota butun qolipu shonu so'zan, bigizlarini ulgurjisiga ikki pud jo'xori unga movaza qildi. Yaxshi qildi. Uning etigini kiyadigan o'zbek, qozoq, qirg'iz dehqonlari qayodda deysiz, qolgan emas. Faqat ularning yetimlarigina shahrimizni to'ldirib yuribdi. Qaysi burchakka, qaysi chordevorga bosh suqmang, o'n beshta yetim yuvuqsiz qo'lini cho'zib: «Amaki, non bering», deydi. Non-a, o'zimmnikiga topolmayman-u! Bitta man emas, buvi, mahalladagi hamma kosiblarning ahvoli shunaqa. Pichoqchilar ham, bo'zchilar ham, qo'nchilar ham, boringki, maktab domlari ham, mullavachchalarning ham rangi pano. Bir qoshiq obi yovg'onga zor. Sanqib yuribdi.

– Xuv, xudoyo urushi boshiga yetsin. Qiyomat qoyim degani shudir-da, a, o'g'rigina bolam-a. Ha, mayli, shu yetimlarning ham peshonasiga yozgani bordir. Xo'sh, endi o'zingdan so'ray. Axir noilojlikdan-ku shu harom yo'lga qadam bosibsang, o'ziga to'qroq, badavlatroq odamlarnikiga borsang bo'lmaydimi? Mana shu mahallada Karim qori degan chitfurush bor. Odilxo'jaboy degan pudratchi bor. Matyoqubboy degan konchi bor. Bularning davlatiku mil-mil. Beshikdagi bolasi ham chetiga bayt yozilgan chinni kosada osh ichadi. Shularning tomini teshsang bo'lmaydimi?

– Ey, buvim tushmagur, sodadsiz, soda, – dedi o'g'ri.

– Boylarning uyiga tushib bo'ladimi, ularning paxsasi sakkiz gavat, eshiklari temirdan, har bittasining qo'rasida eshakday-eshakday ikkita, uchadan itlari bor. Bu itlar hovli sahnidan bitta kapalak o'tsa bir hafta vovillaydi. Odilxo'jaboyning g'ulomgardishida-chi, miltiq ushlagan gorodovoy turadi. Jonimdan kechibmanmi, o'ldirmaganda dam, sibir qilib yuboradi.

– Bu gaping ham to'g'ri, o'g'rigina bolam. Ammo-lekin ehtiyot bo'l. El-yurtning oldida tag'in badnom bo'lib qolmagin, – dedi bizning kampir.

– Gapingiz to'g'ri, buvi, tunov kuni Orif sassiqning otxonasidan to'rtta tovuq, bitta xo'roz o'margan edim.

Tovuq-xo'roz dedingmi? Ha, bu mahluqlari qurg'ur qaqalab seni sharmanda qilmadimi?

– Hamma ishning ham o‘z maromi bo‘lar ekan, buvi, tovuq olgani borganda cho‘ntagimga bir shishaga suv solib olaman. Keyin qo‘ndoqning tagiga borib, og‘zimni suvga to‘ldirib tovuqlarga purkayman. Tovuqday ahmoq jonivor olamda yo‘q. Yomg‘ir yog‘yapti shekilli, deb o‘ylab, boshini ichiga tiqib, hap yotaveradi, keyin bitta-bitta hiqildog‘idan tutib haltaga solaman.

– Shunaqa degin, voy tayba-yey. Hamma hunarning ham o‘zining murti gardoni bo‘lar ekan-da.

– Shunday qilib desangiz, buvijon, sirimning hashagi ochilishiga oz qoldi. Yo‘q, ellikboshimiz Rahmonxo‘jaga xo‘rozni olib borib bergan edim, ishni bosdi-bosdi qilib yubordi. Rahmonxo‘ja men bilan tuzuk, yaxshi odam. Bultur uni-buni sotib, sakson uch so‘m pul jamg‘arib: «Topganimiz shu, ellikboshi ota», deb pora bergan edim, rabochiyga ketishdan asrab qoldi.

– Ha, ishqilib, bola-chaqasining egaligini ko‘rsin. Endi bu yoqqa qara, o‘g‘ri bolam, hademay, tong ham yorishib qolar. Ana yorug‘ yulduz ham tikkaga kelib qoldi. Oshxonaning yonidagi tutdan sirg‘ilib pastga tush, o‘tinimiz yo‘q. Oshxonada bir zamonlar bog‘dan kelgan bir-ikkita yong‘oq, to‘nka bor, boltani olib, shuning bir chekkasidan ozgina uchirib ber, qumg‘on qo‘yaman. Kecha tog‘ang berib ketgan zog‘oradan ikkitasini olib qo‘yganman birgalashib choy ichamiz.

– Yo‘g‘-e, buvi, – dedi o‘g‘ri, – to‘nka yorib-ku berarman, ammo choy icholmayman, chunki kun yorishib qolsa, meni tanib qolasiz. Juda ham yuzimni sidirib tashlaganim yo‘q, andisham bor, uyalaman.

– Voy o‘lay, qutlug‘ uydan quruq ketasanmi, bolam? Bir nima olib ket. To‘xta, nima olib ketsang, ha, darvoqe oshxonada bitta yarim pudlik qozon bor. Allazamonlar uyimizda odamlar ko‘p edi, katta qozonda osh ichardik. Xudoning g‘ashiga tegdik shekilli, shundoq, katta, gurkiragan xonadondan mana shu to‘rttagina yetim qolib turibdi. Eh - ha, bular qachon katta qozonni qaynatar edi-yu... Shuni olib keta qol. Sotib bir kuningga yaratarsan, o‘g‘rigina bolam.

– Yo‘q, yo‘g‘-e, buvi, yomon niyat qilmang. Ha-huv deguncha bu kunlar ham unut bo‘lib ketadi. Yana katta oilalar jam bo‘ladi. Xatto bu qozon ham kichiklik qilib qoladi. O‘sha yetimlarning o‘ziga buyursin. To‘ylarida o‘ynab-kulib xizmat qilaylik. Hayr endi, buvi, men ketaman, tog‘ tomon ham yorishib qoldi.

– Hayr, o‘g‘rigina bolam, kelib tur.

- Xo'p, ona, xo'p...

Men o'sha o'g'ri kishini tanir edim. Haligacha hech kimga kimligini aytgan emasman.

## 真っ白な雪

曇っていて、雪が降っている。真っ白な、柔らかい雪です。老婆はカラワットにを優しく撫でながら、掛布団を合せ縫いしています。おじいさんは窓のそばで、腰が曲がって、老人の疲れた顔のように座っていて、彼の腕の中でちぢれけの、人形のような女の子がいます。彼女は手のひらをあてて外に出ようと頑張っています。おじいさんは女の子を揺り動かして、何か音を出しています。

老婆はちらちらと彼らを見ている。おじいさんは くすくす笑っているのか、咳をしているのかわかりません。

おじいさんは笑っている。けれど、息を切らして咳をしはじめました。彼は雪の雪片をじっと見て思い込んでいる。あのときも空が曇っていて、じめじめした天気だった。あのときもそのような、真っ白で柔らかい雪が降っていた。

チュルックの縫い糸にも、口ひげにも、眉にも粉炭がついている。老いてますます盛んなおじいさん ヌモンホンに駅から歩いてうちに帰った。門を開けて薄暗い小道から入って、肩に積もった雪を払って、テルパックも脱いで、雪を払った。

部屋には誰もいない。妻は工場に行った。コンロのうえに銅のやかんをおいて火をつけた。しばらくしてことこと音を出して、お湯が沸いた。机の上に湯飲み茶わん、茶わん、テーブルクロスがあった。おじいさんはお茶を用意してテーブルクロスを敷いた。テーブルクロスの中にあつたパンの碎片を手ひらにのせて、口にいれて、お茶を飲んだ。

おじいさんの二人の息子がいたが、一人は子供のころになくなって、もう一人はひげが生えはじめのとき戦争に行った。何ヶ月が過ぎても手紙が届かず、行方不明になっていた。

ヌモンホンは今息子のことを思い出してため息をついた。門がノックされた音を聞いて、窓から外を見かけた。雪の上を

小股で歩きながら隣人の女性マルヤムさんが来ている。マルヤムさんはドアをあけてウールのスカーフがかかった頭から部屋のなかに入った。

「ただいま…」彼女の目はくぼんで、真っ青な唇がふるえているようだ。

「おかえりなさい」とおじいさんは言った。この女性は息子から来た手紙をよみあげたり、一緒にあの勇敢な息子のことを思い出したりしていた。うちに来た彼女を見てからおじいさんの心がどきどきしはじめた。「どんなことなのか。」女性の顔色をみて何か悪いことを感じたようだ…でもそのような状態を知っているのは自分だけである。

「マルヤムさん病気なの。顔色は…」と尋ねた。おじいさんは何かつれないことを悟ったようだ。

「はい、ちょっと調子が悪くて。。。」

「信じられない。嘘を言っている。」とおじいさんは考えた。

「どうぞ、これ召し上がってください」とおじいさんは彼女に言った。マルヤムさんは一個のパンを手にとって食べ始めた。

「おじいさん、駅でのお仕事はどうですか。」と彼女は平気な顔をして言った。

「はい、大丈夫です。」とおじいさんは答えた。「彼女は何かを隠している」と考えた。

「おじいさんは大人のように、まだ元気だそうだと父はいつも言っています。そんなことを聞くとうれしいです。」彼女はちょっとほほえもうと唇をうごかした。彼女は頭を一回上げたり、下げたりしたので、まつげに涙の一個がひかりました。

「どうしたの。」おじいさんは小さい声で言った。

「なんでもない。大丈夫です。」

「言ってください」とおじいさんは子供がおねだりするように言った。彼のあつい眉をひそめて、目は火照っていた。

「手紙をもらった」マルヤムさんはおじいさんの目に答えなければならぬことがわかっていて言い始めた。

「もしかして嘘かも知れない。信じられなかった。。。」

「本当だ」とおじいさんは心の中で叫んだ。マルヤムさんは涙で裾を湿らせて、頭において、おじいさんと手をつないで横になっていた。おじいさんは暖炉の前で、何かをひそひそ話している。

「じゃ、私はそろそろ…」とマルヤムさんは小さい声で言った。彼女は呆然となっていて、うつろな眼差しを投げた。「うそ。信じられない。これは手紙だけ…うそ。」とマルヤムさんは自分に言った。

おじいさんは黙っている。マルヤムさんはドアの方に向かい玄関で立ち止まっていた。おじいさんは見かけて、すぐに大声で泣いた。

「嘘」とマルヤムさんは頭を上げた。おじいさんはこの間に何も起こらなかつたかのように平気な顔している。おじいさんはわざと笑っていることをマルヤムさんは気がつかなかつた。

「マルヤムちゃん、これは嘘だ…私も調子が悪いので…すぐ家に帰るんだ。このような悲しい日も忘れるんだ。」

マルヤムさんは頭を上げてスカーフで涙を拭いて雪を踏みしめるようにゆっくり歩きながら、家を出た。又モンホンもチュルックをきて、靴を履いて家を出た。

「誰のことを思い出したらいいか。誰を待ったらいいか。だめ。だめ。だめ。」

道に雪が積もっていた。足跡がいろんな方向に向いている。これは悲しいことを忘れようと頑張っている人の足跡だ…

おじいさんはバザルをふらふら歩いていた。パン屋の前に行列げできている。錫杖をつかっている怪我人も、女性も、子供もいる。ここはときどき静かになって、またすぐにうるさくなる。店員の白っぽい、玉のあせを流している顔は板のように見える。

チュルックが破けていて、顔の形は荒っぽい一人の男の子はときどき店員に見かけている。この男の子が何を欲しがっているのか。

おじいさんは頭を下げて、店をでた。街は混んでいて、売春婦を見て、不快に思った。

途中であの店で見た男の子をもう一回見た。男の子は丘の下に眠らずに寒気がして座っている。おじいさんはこの男の子のそばまで行き

「どうしたの」と言った。

「父は異父だから、家から追い出した。パン買って来ないで、お母さんとけんかばかりしている。おじいさん、寒いよう」

おじいさんの心のなかにある重い石の上に更に重い石が積まれたような気がした。でもこんなに悲しんでいても、この重い石を取り払おうとした。

「じゃ、私の家に行きましょう」

おじいさんはこの子供がもう大きいのに抱いて、家に連れて帰った。暖炉の隣に座らせて、テーブルに料理を用意した。

「さあ、お食べなさい」

子供は寒さでふるえている手をすぐにパンに伸ばした。急ぐように食べ始めた。おじいさんは玄関に行って、息子のテルパックを持ってきて子供の頭に被せた。テルパックが子供の耳を隠して暖かくなってきたところで、子供がおじいさんに顔をじっと見つめていた。子供は嬉しがっていた。おじいさんは子供の表情をみてすぐに彼を抱いた。

何年か経った。この子供が成長して、結婚して、子供も産んだ。その間も人々が何度も、悲しい思いをしたり、幸せになったりもした。

またこれから何度も真っ白で、やわらかい雪が降ることだろう…

ウゾコヴァ・ディラフルズ訳  
*Uzoqova Dilafuz tarjimasi*

## OPPOQ QOR

Osmonni bulut qoplagan. Qor yog'yapti, oppoq mayin qor...

Kampir karavotga suyanib ko'rpa qaviyapti. Chol deraza oldida, bukchaygan, yuzida keksalik horg'inligi, bag'rida sochlari jingalak,

qo'g'irchoqdaygina qizaloq. Qizcha kaftini yaxlagan oynaga bosib tashqariga talpinadi. Chol uni bir oldinga, bir orqaga tebratib, xi-xillagan tovush chiqaradi. Kampir axyon-axyonda ularga qarab qo'yadi. Choli xi-xillab kulyaptimi, yo'talyaptimi bilmaydi.

Chol kuladi. Lekin kular ekan, nafasi tiqilib, yo'tal tutadi. Qor uchqunlariga tikilgancha, yiroq xayollar band etadi uni.

Osmon shunday bulutli va rutubatli edi o'shanda ham. Xuddi shunday oppoq, mayin qor yog'ardi...

Choponlarining choki, mo'ylovi va qoshlariga ko'mir changi urgan, yoshi qaytgan, ammo o'zi anchayin bardam chol No'monxon ota vokzaldan poyi-piyoda yurib, uyga keldi. Darvozani ochib, nim qorong'i yo'lakka kirgach, yelkalaridagi qorni silkitib, telpagini qo'liga olib qoqdi.

Xonada hech kim yo'q. Ayoli fabrikada.

No'monxon ota tunuka pech ustiga mis choynakni qo'ydi-da, pechga o't qaladi. Bir damdan so'ng biqirlab choy qaynadi. Stol ustida piyola, choynak, o'rog'lik dasturxon. Chol choy damlab dasturxonni ochdi. Dasturxonda non ushoqlari, yarim buhanka qora non. U ushoqlarni kaftiga to'plagancha, og'ziga tashlab, choydan xo'play boshladi.

Cholning ikki o'g'li bor edi! Biri o'lgan, bolaligidayoq. Ikkinchisi mo'ylovi sabza urganda jangga jo'nadi. Mana necha oydirki, na xat bor, na habar-xullas: dom-daraksiz.

No'mon ota hozir o'g'lini eslab, xo'rsinib qo'ydi. Darvozaning taraqlab ochilganini eshitdi-yu, derazadan hovliga ko'z tashladi. Qor ustida mayda qadam tashlab qo'shni qiz Mayram kelardi. Eshik ochilib, Mayram jun ro'mol bilan tang'ilgan boshini ichkariga suqdi:

– Amaki, men keldim... – uning ko'zlari cho'kkan, rangi o'chgan va nima uchundir lablari sezilar-sezilmas titrardi.

– Kel, qizim, – dedi chol. Bu qiz o'nta o'g'lidan har gal xat kelganda o'qib berar, birgalashib mard o'g'lonni eslashardi. Anchadan beri ostonaga oyoq qo'ymagan qiz ko'ringandayoq cholning yuragi dukillay boshladi: «Qanaqa gap topib keldi ekan?!» Qizning rangi-ro'yini ko'rdi-yu, yuragi orqaga tortdi... Biroq cholning holatini o'zidan bo'lak kim bilibdi?!

– Nima, kasalmisan, qizim, ranging.. so'radi u va go'yo yuragini beshafqat panja g'ijimlay boshladi.

– Ha, mazam yo'qroq, – dedi Mayram.



«Yolgʻon gapiryapti», oʻyladi chol – Ol, nondan ol, – dedi qizga. Mayram bir boʻlak nonni qoʻliga olib kovshana boshladi.

Vokzalda ishingiz tuzukmi, amaki? soʻradi qiz oʻzini zoʻr bilan beparvolikka solib.

– Ha, ha... durust, – dedi chol. «Nimanidir yashiryapti bu qiz», – degan fikr kechdi xayolidan.

– Dadam, amaking yigitchaday, hali baquvvat, – deydilar. Quvonaman shunday desalar... Qiz jilmayib qoʻymoqchi edi, beixtiyor labi iyshaydi. U boshini bir siltadi-da, kiprigida yosh tomchisi yiltiradi.

– Ayt, nima boʻldi? – pichirladi chol nafasi ichiga tushib.

– Xech nima, amakijon, xech nima. Oʻzim...

– Ayt! – dedi chol bolalarday yalingan ohangda. Uning quyuq qarashlari koʻzlarini toʻsib turar, koʻzlari oʻt boʻlib yonardi...

– Shunday... xat oldim, – soʻz boshladi qiz, bu koʻzlarga javob bermaslik mumkin emasligini sezib. – Balki yolgʻondir? Ishonmadim...

– Rost! – Noʻmonxon ota ichki dard bilan qichqirdi. Uning ogʻir, muysafid boshi quyi egildi. Mayram doka hoʻllab cholning peshonasiga qoʻydi, qoʻltigʻidan ushlab oʻringa yotqizdi. Chol pechka biqinidagi koʻrpada, koʻzlari yarim yumuq holda choʻzilib yotar, nimalar-nidir pichirlar edi.

– Xoʻp, men ketay, – dedi Mayram sekin. Uning xayoli parishon, oʻzi nihoyatda garang edi. – Balki yolgʻondir, ishonmadim. Xat yozilgan-da... yolgʻondir, – oʻziga-oʻzi soʻzlardi goʻyo u.

Chol indamasdi. Mayram eshikka yoʻnaldi. Ostonada soʻrrayib turib qoldi. Cholga qayrilib qaradi-da, birdan kesakiga suyangancha xoʻngrab yigʻlab yubordi. Noʻmonxon ota ogʻir qoʻzgʻalib oʻtirdi.

– Yolgʻon! – dedi sekin. Mayram boshini koʻtarib hayronlik bilan qaradi. Xuddi oradan hech gap oʻtmaganday, jilmayib oʻtiribdi chol. Atayin, soxta jilmayganini sezmedi Mayram. – Qizim, bilaman, yolgʻon... Meniyam, tobim yoʻqroq edi, hammasi shundan. Qarabmizki, erta-indin keladi. Bu kunlar esdan ham chiqib ketadi, qizim...

Mayram boshini tik koʻtardi. Jun roʻmolining uchi bilan koʻzini artib qor ustida mayda qadamlar tashlagancha, hovlidan chiqib ketdi. Noʻmonxon ota oʻrnidan turib chopon va etigini kiydi-da, koʻchaga yoʻnaldi. Endi nima qilish kerak?! Kimni oʻylash kerak, kimni kutish kerak?! Yoʻq, yoʻq, yoʻq!

Yo'llarni qalin qor bosgan. Katta-kichik, turli-tuman izlar, o'ngga, so'lga, to'g'riga ketgan izlar... Bir bo'lakchasi yuragini timdalayotgan ulkan alamni yelkasidan uloqtiray deb yugurib-yelib yurgan odamlar izi...

Chol bozorni bir kur aylandi. Non magazini oldida odam ko'p. Qo'ltiqtaoqi yaradorlar, xotin-halaj, bola-chaqa, bu yerda bir dam og'ir sukunat cho'kadi, bir dam esa chuvvos ko'tariladi. Sotuvchining terlagan, ozg'in, rangsiz yuzi uzoqdan bir parcha taxtaga o'xshab ko'rinadi. Uning qo'li qo'liga tegmaydi.

Choponi yirtiq yuz suyaklari dag'algina bir bola u yonga, bu yonga o'tib goh odamlarga, goh magazinichiga termiladi. Bola nima istar ekan?!

Chol boshini quyi solib, magazindan uzoqlashdi. Yo'l boshida bir to'pga birikkan va ariday guvillab latta-putta sotayotgan ayollarga qarab turdi-da, jig'inib uyi tomon yo'l oldi.

Yo'lda, boya magazin oldida uymalashib yurgan choponi yirtiq bolani ko'rди chol. Bola tepalik tagida ko'zlarini yumib, junjikib o'tiribdi. No'monxon ota unga yaqinlashdi:

– Nega bu yerda o'tiribsan, bolam?

– Otam o'gay. Haydadi... Non bermaydi, onamni uradi. Xaydadi... Sovuq yedim, amakijon.

No'monxon otaning qalbiga bosilgan og'ir tosh ustiga yanada og'irroq bir tosh bosildi. Ammo bu alam toshlari qanchalik vazmin bo'lmasin, ularni bir siltanib, uloqtirib tashladi chol.

– Yur, bolam, menikiga yur.

No'monxon ota, bola kattagina ekanligiga qaramay, uni ko'tarida, keksa yelkasiga mindirib uyiga olib keldi. Pechka biqinidagi ko'rpachaga o'tirg'izdi, dasturxon yozdi:

– Ol, bolam, ol.

Bola sovuqda muzga aylangan, titrayotgan qip-qizil qo'lchalarini shoshilib nonga cho'zdi, qitirlatib apil-tapil chaynay boshladi. No'monxon ota dahlizga chiqib o'g'lining telpagini olib kirdi. Bolaning boshidagi eski do'ppini bir tomonga uloqtirdi, telpakni kiygizdi. Telpak boshini quloqlarigacha yashirgan bola unga mehribonlik va hayronlik bilan boqar, sodda va beg'ubor ko'zlarida baxt, quvonch porlar edi. Chol bolada ro'y bergan baxtiyor holat qarshisida o'zini ortiq tutib turolmadi. Uni bag'riga tortdi-yu, ko'zlaridan yosh quyuldi...

Yillar o'tdi. O'g'il ulg'aydi. Chol kelinli, nevarali bo'ldi... Yillar o'tdi!!! Bundan so'ng yana ko'p marta odamlar alamlarni yengib, shodlik va saodat topdilar...

Bundan so'ng yana ko'p marta haroratli yer ko'ksiga oppoq, mayin qor yog'di...

### 微妙な課題

数年前に有名なコメディアンが演壇劇場の劇長の所に来た。挨拶してから彼がそこに来た理由を言い始めた：

－ 私はここにある提案のことで参りました。劇長の演壇劇場に、ある小さなグループを作って、そこで日常生活ではよく出てくる喜劇などを演じたり、ある人々の短所を批判したりして、ユーモアのある演劇を増やして欲しい。

劇長は「こいつはバカじゃないか、言ったことが現実になるはずもないのに」と思いながらじっと見ていた。彼も彼で見つめられていることを気にせず、彼の返事を楽しみに待っていた。しばらくして、劇長が話し始めた：

－ えっと、この提案が悪いとは思わない。でもよく考えてみればこの課題には微妙な点もあるよ。実は、私たちの話のなかに時々出てくる人々の様な欠点は嘘じゃない。でもいろんな欠点を探して言ったところで、人々の気持ちを悪くするのは正しいことではないと思うよ。だって、私たちの目的は彼らをもっと応援することだ。軽くした笑いも必要だけど、笑いを作るために批判して、欠点などを見せる必要はないはずだ。笑わせる別の方法はないの？必ず、欠点を見せて笑わせなければならぬの？

－ それなら、何をもとにして笑えばいいの？－と笑いながら芸能人が聞いた。

－ 何でもいいよ。ただ欠点を見せて笑ってはいけないよ。－ 劇長が提案した：例えば舞台上立って何も言わないで大笑いしてみれば？止めないで笑い続ければ他の人々もつい笑ってしまうよ。なぜなら笑いが伝染病だから。

－ 意味がない笑いになってしまうのか？

－ 意味と関係ないだろ、私たちに意味より笑いが必要だから

- そうですか、劇長が言った通りやってもいいけど、よく考えてみればこれにはいくつか微妙なところがあるよ。

- ああ？- 劇長がびっくりした

- いいえ、びっくりするほどではないけど、それでも微妙なところがある。あなたが言った通り舞台に出て、何も言わないでただ笑えば、ある人は笑ってしまうかもしれない、なぜなら笑いが劇長が言った通り伝染病だから。でもそこに来た大勢のお客さんがこの人バカじゃないかと思ったらどうなる？こいつを舞台に立たせるのを許可したのは誰だ、劇長は無責任だ、というような意見が彼らの間で生じてしまいかねない。それでまた非難に繋がってしまう。

- そうですね。また非難になってしまう。それならこうしたらどう？例えば舞台に出るときに、何かにつまづいて転んだら、皆笑ってしまうよ。私はある日クラウンがこんなことをやったことを見たことがある、その時すごく笑ったんだ。

- それも良いんだけど、劇長が言った通りやってみてもいいかもしれない。しかしこれにも微妙なところがある。

- ああ？- 劇長がまたびっくりした。

- いいえ、びっくりするほどではないけど、それでも微妙なところがある。例えば、私が舞台に出て転んでしまった。一人、二人が笑ったとしても、他のお客たちが彼がどうして転んだのか、舞台にはくぎが出っぱなしになっているらしい、公演までに修理されなかった。すなわちこの劇場の劇長が無責任だというような意見になるとあなたが困るよ。それでまた非難を受けてしまいかねない。

- そうですね。また非難に繋がってしまうかもしれないね  
- と部長が言った。- それならこうすればどうかな。例えば、演者が舞台に出て観客に向かって、変顔を試してみればどう？

- これもサーカスで見たことがあるの？

- そうだ。

- すごく笑ったの？

- もちろん、本当によく笑った

— 劇長が言ったことをできないこともないけど、よく考えてみればこれにも微妙なところがある。

— ああ？— 劇長がまたびっくりした。

— いいえ、いいえ、これもびっくりするほどではないけど、それでも微妙なところがある。例えば、私が舞台に出て観客に向かって変顔をしたら、一部の観客は笑うかもしれないけど、他の観客は：どうして彼が変な顔をしているのか、会話に時々出てくる悪口を言うのが怖いのでこのような顔をしていると思うかもしれない。それがまた非難になってしまわないかと心配している。

— それもそうだね、それならどうやって笑わせればいいかな。これも微妙なものだね。

急に劇長がコメディアンにささやいた：

— 私自身は悪口を悪く思っていないよ。君が知っているように、劇場には様々な人がやって来る、皆が悪口を好きと言えないでしょう。

コメディアンも部長にささやいた。

— 悪口を好きじゃない人には何か心当たりがあると思う。だから、それ明らかになるのが怖くて、悪口が好きじゃない。

— 良く分かっているね、— 部長が嬉しくなって言った。  
— それなら、今のような幸せな生活に出てくる細やかな欠点を細かく探して、人々を不快にさせる必要があるのか？

— じゃ、そう言えば、時々出て来る悪口をどうする？  
— と芸能人が聞いた。

— 心配しないでね、欠点がある人々はその心当たりが明確になってから悪口を言おう。

そう、その時怖がらずに悪口を言いましょう。

芸能人が部長の顔を見て、笑いながら、部屋から出ていた。部長がすごく心配そうにコメディアンを追いかけて：

— ちょっと待って下さい、どうして笑っているの— と聞いた。芸能人が今度はもっと大笑いをした。

部長がもっと心配して：

— どうしてこんな変な笑いをしているの?!— と聞いた。芸能人があざ笑った。

— どうして私のことをバカにして笑っているの？ — と部長が震えながら聞いた。

— 人は笑いたくなったら、笑うよ。笑いは我慢できないからね。 — と彼は答えた。

クルバノヴァ・グルチェフラ訳  
*Kurbanova Gulchexra tarjimasi*

## NOZIK MASALA

Bundan ancha yillar burun mashhur qiziqchi artistlardan biri estrada teatri direktorining huzuriga boribdi. Salom-alik, hol-ahvol so‘rashlardan keyin qiziqchi artist muddaoga o‘tibdi:

— Men bir taklif bilan kelgan edim, — deb gap boshlabdi u, — mana shu, siz rahbarlik qilib turgan estrada teatri qoshida kichkina truppa tashkil qilsak. Shu truppa bilan mayda-mayda hajviy asarlar qo‘ysakda, hali hayotimizda ba‘zi-ba‘zida uchrab turadigani ba‘zi kishilarimizning ba‘zi kamchiliklarini sal-pal tanqid qilsak, kulgi ostiga olsak.

Direktor artistga: «Voy, tentag-yey, shuniyam gap deb topib keldingmi?» degandek, uzoq, tikilibdi. Artist ham bu ko‘z qarashga bardosh berib o‘tiraveribdi. Nihoyat, direktor tilga kiribdi:

— Xo‘sh, taklifingiz yomon taklif emas. Biroq, bunday o‘ylab qaralsa, masalaning boshqa nozik tomoni ham bor ekan. To‘g‘ri, hali hayotimiz ba‘zi-ba‘zida uchrab turadigan ba‘zi kishilarimizning ba‘zi kamchiliklaridan holi emas. Ammo, mayda-chuyda kamchiliklarni titkilab, kishilarimizning ta‘bini xira qilishlik durust bo‘larmikin?! Axir bizning vazifamiz kishilarimizni katta ishlarga rag‘batlantirish. Xo‘sh, kulgi, yengil, beozor kulgi ham kerak narsa, albatta, lekin kulgi tug‘dirish... e, uzr, ya‘ni kulgi hosil qilish uchun tanqid qilish, kamchiliklarni ko‘rsatish shartmikin. Kulaman desangiz, boshqa sabab yo‘qmi? Albatta kamchiliklardan kulish kerakmi?

— Nimadan kulish kerak bo‘lmasa? — so‘rabdi iljayib qiziqchi artist.

— Nimadan bo‘lsa ham kulavering, ishqilib, kamchiliklardan kulish kerak emas. — Direktor maslahatga o‘tibdi: — Mana, masalan, deyyalik, sahnaga chiqdingizda, o‘zingizdan-o‘zingiz haxo-haxo kula-

verdingiz. To'xtamasdan kulaversangiz, boshqalar ham kulib yuboradi. Chunki kulgi yuqumli narsa.

– Bema'ni kulgi bo'lib qolmasmikini?

– Ma'nisi bilan ishingiz bo'lmasin. Bizga ma'ni emas, kulgi kerak.

– Shundaqami? Siz aytganingizni ham qilish mumkinu, lekin mundoq o'ylab qaralsa, masalaning boshqa nozik tomoni ham bor ekan.

– A?! – direktor cho'chib tushibdi.

– Yo'q. Cho'chiydigan darajada emas-ku, har holda, nozikligi bor. Deyaylik, men sahnaga chiqib siz aytgandek o'zimdanda o'zim kulaverdim. Ba'zilar kulib yuborishi ham mumkin, chunki kulgi o'zingiz aytganingizdek yuqumli narsa. Ko'pchilik tomoshabinlar, bu jinni bo'lib qolibdi, deb o'ylashsa-chi? Ularda, buni kim sahnaga chiqardi, teatr rahbarlari mas'uliyatsiz odamlar ekanda, degan fikr tug'ilib qolmasmikini. Unda gap yana kelib tanqidga taqalmasmikini, deymanda.

– Bu tomonini olib qaralsa, darhaqiqat, buyam kelib tanqidga taqalishi mumkin ekan. Bo'lmasa bunday qilsak-chi? Deyaylik, sahnaga savlat to'kib chiqib kelyapsiz, shu payt bir narsaga qoqilib gup etib ag'darilib tushdingiz, hamma gur etib kulib yuboradi. Men o'zim bir marta sirkda masharabozning shunday qilganini ko'rganman. Qotib-qotib kulganman.

– Mayli-yu, sizning aytganingizni ham qilib ko'rish mumkinu, lekin mundoq o'ylab qaralsa, masalaning boshqa nozik tomoni ham bor ekan.

– A?! – direktor yana cho'chib tushibdi.

– Yo'q. Cho'chiydigan darajada emas-u, har holda nozikligi bor. Deyaylik, men sahnaga chiqib yiqilib tushdim, bir-ikkita tentak kulib yubordi. Ammo, ba'zi tomoshabinlarda, bu nimaga yiqilib tushdi, sahnada mix-pix bor ekan, vaqtida remont qilinmagan ekan, demak, teatr rahbarlari mas'uliyatsiz odamlar ekanda, degan fikr tug'ilib qolmasmikini? Unda gap yana kelib tanqidga taqalmasmikini, deymanda.

– Bu tomonini olib qaralsa, darhaqiqat, buyam kelib tanqidga taqalishi mumkin ekan, – debdi direktor. – Bo'lmasa bunday qilsak: deyaylik, sahnaga chiqdingiz-da, tomoshabinlarga qarab o'zingizdan o'zingiz basharangizni burishtiraverdingiz.

– Buniyam sirkda ko'rgansiz?

– Ha, sirkda ko'rganman.

– Qotib-qotib kulgansiz?

– Ha, qotib-qotib kulganman.

– Mayli-yu, sizning aytganingizni ham qilish mumkinu, lekin bunday o‘ylab qaralsa, masalaning boshqa nozik tomoni ham bor ekan.

– A?! – direktor yana cho‘chib tushibdi.

– Yo‘q, cho‘chiydigan darajada emasu, har holda nozikligi bor. Deyaylik, sahnaga chiqib o‘zimdandan o‘zim basharamni burishtiraverdim. To‘g‘ri, ba‘zilar kulishiyam mumkin, lekin ba‘zilarda: bu nimaga basharasini bujmaytiryapti, hali hayotimizda ba‘zi-ba‘zida uchrab turadigan kishilarimizning ba‘zi kamchiliklarini ochiq aytishdan qo‘rqipti, shuning uchun basharasini burishtiryapti, degan fikr tug‘ilib qolmasmikin? Unda gap yana kelib tanqidga taqalmasmikin, deyman-da?

– Bu tomonini olib qaralsa, darhaqiqat, buyam kelib tanqidga taqalishi mumkin ekan, – debdi direktor. – Xo‘sh bo‘lmasa, qanday qilib kulgi tug‘dirish... e, uzr, kulgi hosil qilish kerak ekan-a?! Juda nozik masala-da bu!

Birdan direktor oldinga engashib qiziqchi artistning qulog‘iga shivirlabdi:

– Menga qarang, bu odam tanqidni juda yomon ko‘rarkan, deb o‘ylamang, men o‘zimni o‘ylayotganim yo‘q. O‘zingiz bilasiz, teatrga har xil odamlar tushadi, hammasi ham tanqidni yoqtiravermaydi.

Qiziqchi artist ham engashib direktorning qulog‘iga pichirlabdi:

– O‘sha tanqidni bitirmaydigan odamlarning biror aybi bo‘ladi. Shuning uchun, aybining fosh etilishidan qo‘rqqani uchun tanqidni yomon ko‘radi ular.

– Ha, barakalla, – suyunib ketibdi direktor. – Shunday ekan, porloq va farovon hayotimizdagi mayda-chuyda kamchiliklarni titkilab, kishilarimizning ta‘bini xira qilish shartmi?

– Unda hali hayotimizda ba‘zi-ba‘zida uchrab turadigan ba‘zi kamchiliklari bor ba‘zi shaxslarni nima qilamiz? – so‘rabdi qiziqchi artist.

– G‘am yemang, oshna hali hayotimizda ba‘zi-ba‘zida uchrab turadigan ba‘zi kamchiliklari bor, o‘shanaqa ba‘zi shaxslarning siri fosh bo‘lib, qo‘lga tushgandan keyin boplab tanqid qilamiz. Ana o‘shanda yuz-xotir qilmasdan, ko‘rmasdan tanqid qilamiz.

Qiziqchi artist direktorning basharasiga qarab iljayibdi-da, chiqib ketibdi. Direktorning yuragiga shubha tushibdi. U sanchib o‘rnidan turibdi-da, artistning ketidan chiqib:

– To‘xtang, nega iljayasiz? – deb so‘rabdi.



Qiziqchi artist bu gal og‘zi qulog‘iga yetgudek iljayibdi.

Direktorning yuragiga battar gulg‘ula tushib:

– Axir, nega kuydirgan kallaga o‘xshab tirjayasiz?! – deb so‘rabdi.

Qiziqchi artist haxolab kulib yuboribdi.

– Nega mening ustimdan kulyapsiz? – so‘rabdi direktor qaltirab.

– Odamning kulgisi qistagandan keyin kuladi-da, kulgini bo‘g‘ib bo‘larmidi? – deb javob beribdi qiziqchi artist.

## 熊の心配

もみ林のある山々は夏はとても混んでいました。真夏には多くの人々がこの山に来ていました。海拔 1800 メートルのところにヒオニール (pioner) 用山小屋は位置しており、子どもたちの声や、音楽も遠くまで聞こえていました。

秋が来るにしたがって、山々や森は静かになっていきました。日々がたつに連れて牛や羊などの動物が田舎に帰りました。ヒオニール用山小屋の警備員、ホリクさんは秋と冬の間とてもさびしく暮らしていました。ホリクさんはさびしくなるたびに、山を降りて、田舎に行って、そこで時々妻と泊まります。しかしそんな時に山小屋にあるもの全部が目の前に浮かんできて、心配して、眠気がなくなってしまう。彼は朝になるやいなや、かばんに食べ物や飲み物を詰め込みます。それから青いロバに乗って、山小屋に急いでいきます。

山のほうから冷たい寒風が吹いてきます。山小屋は山の一番高いところに建てられて、ここには冬が早く来るので雪がたくさん降ります。師走の間水が流れなくなり、氷ってしまいます。

もちろんそんな時に山で暮らすのはとっても難しくなります。ホリクさんの 15 歳の孫アスカは時々ホリクさんの妻が作ってくれたプロフを熱いうちに持ってきてくれます。ホリクさんは山小屋に小さな家を建てて、そこに住んでいます。アスカは休みのたびに山小屋に来ておじいさんと一緒に泊まっています。

冬が終わり、三月の下旬のある夜、ホリクさんは孫と寝ているときに外で変な音を聞き、眠気がふきとんでしまいました。ホリクさんは泥棒が来たのかなと思って心配しました。部屋が暗いので小銃を見つけられませんでした。ですが電気をつけて、孫を起こしました。

ホリクさんは小銃を持って服を着て外に出ました。夜は月夜で、ホリクさんは小銃を握って、山小屋の調理場へ行きました。行く途中アスカルは雪に足跡を見てしまいました。

—おじいさん、見て。—と言いました。

ホリクさんは、それを見て、小さい声で：

—良く見えない、何の足音かなあ、見てみてよ、—と言いました。

—誰かが足音をつけたらしいです、—とアスカル答えた。

—さあ、こんなに寒いのに！—と信じられないようにホリクさんは言いました。

そのとき調理場のそばに並べていた机を誰かが 30 メートルいどうさせました。

—誰がベランダにいるのでしょうか、見て来てください—と孫に囁きました

—人じゃない！—とアスカルは慄いて答えました。

アスカルは巨大な足で立っている熊を見て驚きました。熊が破れた机や箱の中からお菓子を発見していました。冬に 40 日間ずっと寝ている熊が三月になって起きることをホリクさんは思い出しました。熊は食べ物を見つけられないので、山小屋に来たのだという思いました。

その間熊がまた一つの机を投げてしまいました。ホリクさんはこれを見て腹が立ちました。だってホリクさんは全部壊れた物に対して責任があるからです。彼はくまに：

—ちくしょうめが！—と怒鳴りました。

熊はベランダのほうから出ました。熊が怒っている顔をして、戦うような態度をとりました、当時ホリクさんは“もし銃を撃ったら熊がけがをする、クマが怒って孫と私を殺す恐れが

あります”と考えました。ホリクさんは熊をこわがせるために上に撃った。

静かな山は急に大騒ぎになりました。熊がホリクさんを威嚇するような顔をしました。熊は逃げる際に大声を出しました。白い熊はとても怖いのですからホリクさんは孫と部屋に入ってドアを閉めました。

部屋の電気をつけつつ寝つつ、部屋に誰も入らないようにしておきました。朝起きて、外に出てみたら壊れたバケツを見つけました。

—なぜバケツが壊れたかなあ！！—と思いました。

—怒らせたかもしれない！—とって山の方に見ました。

孫：おじいさん熊はまた帰ってこないでしょうね？

おじいさん：昼間に来ないが、もしおなかがすいたら、また来るでしょう。小銃で撃ちましたよね。

孫：そうですよ、でも熊も何かを食べないといけないのですよ。

予想どおりに熊が次の夜にまた来ました。山小屋にはいろいろな食べてはいけない、つまり痛んでしまったものを入れるごみ箱があり、熊が今回そのごみ箱にあるものを食べに来ました。これは夜の12時のことでホリクさんは寝ていました。しかしごみ箱の壊れた音を聞き彼は起きてしまいました。朝になって箱を見に行ったら、熱い林や鉄があっちこちに散らばっていました。ホリクさんは去年からあってそれが痛んでいることに今気がついた。

孫：熊はどうやって腐ったものを食べるの？

おじいさん：食欲があるから何でも食べるよ。

アスカルはもういちどあっちこちにあるものをみて：

—とてもおなかがすいていたようですね！

おじいさん：さあ、昨日バケツを壊されました、今日ごみ箱、そのように続くとすると、山小屋は破壊されてしまいます。それを社長に言わないといけないなあ。

山小屋立てた会社は町に位置していました。ホリクさんは翌日に会社に行き、社長と会いました。

金色の眼鏡をかけている社長は、彼の話聞いて、信じられないように顔をして：

—山小屋…熊！！？—おじいさん、もしかして悪い夢を見たんじゃないでしょうか？

ホリクさんは：まし信じられないなら、僕と来てください

社長：そうしたいが、見ての通り仕事一杯あるので行くにも行けない。

ホリクさんは：じゃ、仕事の後に来てください。

社長が山小屋についた時には夜になっていました。山小屋には歩いて熊を見てすぐに車に乗り込みました。

社長は運転者に：エンジン掛けなさい。明日漁師を呼んできて撃ちましょう。

運転者：しかし市長から許可をもらわなければなりません。今は猟をするのは禁止されているのですから

社長：許可をもらうよ。

ホリクさんは明日は町に行くことにして、田舎に帰りました。彼は田舎についたとき孫が待っていました。

孫：熊を撃ちましたか？

ホリクさんは：それは明日ですよ！

孫：おじいさん、打たないで下さい、お願いします。

ホリクさんは：どうして？

孫：先生の話によると、クマ科おなかがすいたからこそ、山小屋に来たんです、私たちは環境団体の参加者なので。

ホリクさんは：その団体は壊れた窓を直してくれますか？

孫：おじいさん、熊を撃たないで下さい、私たちはみんな熊にえさをやりましょう。

翌日ホリクさんは会社に来たら、社長は：

—市町から許可をもらえなかった、市長は自身で熊飼ってくださいと言いました。

ホリクさんは：誰かがえさをあげますか？代金をだれが払いますか？社長：そうですね。しかし僕にも余裕のあるお金なんてないですよ、払わないよ。

そのときホリクさんは孫の話思い出した。

—孫の友達に頼んでみて、えさを集めてもらうかなあ！！

これで社長のことを大好きになりました。このあとホリクさんは田舎に帰って、孫を呼んで：

—熊を撃たないことになりました。

孫は喜んで：熊をみんなで飼いましょう。

みんなでいろいろな食べ物や、肉などのものを持ってきました。ホリクさんは集まったえさを持って山小屋に行きました。

えさを熊が来るほうにおいて、夜には眠らず、ホリクさんは待ち続けました。しかし熊が来なかった、朝見に行ったら、えさは最後まで食べられていた。

ホリクさんは：いいですよ！熊がもう二度来ないよ！

ユヌスフ・ゴイプジョン訳

*Yunusov G'oipton tarjimasi*

## AYIQ TASHVISHI

Archazor tog'lar yozda juda gavjum edi. Saraton issig'ida ko'p odamlar tog'da salqinlab dam olishga kelardi. Dengiz sathidan ming sakkiz yuz metr balandlikdagi pionerlar lagerida bolalarning sho'x tovushlari yangrar, muzika ohanglari uzoq uzoqlarga eshitilardi.

Kuz kirdi-yu, tog'lar jimib, xuvillab qoldi. Kunlar sovigandan keyin mol-hollar ham pastga tushib ketdi. Pionerlar lagerining qorovuli Xoliq buva kuz va qish davomida tog'da yolg'iz qolib juda zerikadi. To'p bo'lib o'sgan qalin zirklar panasida uning ko'k eshagi pichan kavshab turibdi. Xoliq buva yolg'izlikdan siqilganda eshagini minadi-yu, tog'ning etagida uch-to'rt chaqirim pastdagi qishlog'iga tushib ketadi. Ba'zi kechalari kampirining oldida tunaydi. Lekin lagerning tog' shamolida hilpirab turgan bayroqchalari, shiyponlarga kiritib qo'yilgan stol-stullari, oshxona to'la idish-tovoqlari, buxgalter «hammasi muncha ming so'm turadi» deb uqdirib qo'ygan narsalari boboning ko'z oldidan o'taveradi. Shuncha ko'p anjom sig'adigan, yozda yuzlab bolalar shovqin-suron qilib dam oladigan lager hozir butunlay kimsasiz, jimjit. Bordi-yu, birorta yomon odam borib, stol-stullardan eng yaxshilarini olib ketsa-chi? yoki eshik-derazalardan bitta-ikkitasini ko'chirib ketsa Xoliq buva qandog qiladi? Axir u lagerdan nimaiki yo'qolsa hammasi uchun davlat oldida javob beradigan qorovul-ku!

Buni o'ylagan sari Xoliq buvaning havtotiri oshadi, uyqusi uchib ketadi. U tong otar-otmas o'rnidan turadi-yu, hurjuniga uch-to'rt kunlik oziq-ovqat soladi. So'ng ko'k eshagini xalalab, tog'dagi lagerga qarab shoshiladi.

Tog' tomondan sovuq izg'irin esadi. Lager tog'ning baland joyiga qurilgan. Bu yerga qish erta tushadi, qor juda ko'p yog'adi. Dekabr oylariga borib jilg'alardagi suvlar tungib, oqmay qoladi, buloqlarning atrofini qalin muz qoplaydi.

Albatta, bunday paytlarda tog'da yolg'iz o'tirish yana ham qiyin. Xoliq buvaning o'n besh yashar nevarasi Asqar ba'zi kunlari bobosini ko'rgani keladi. Buvisi dasturxonga o'rab-chirmab berib yuborgan palovni sovutmasdan yetkazib boradi.

Xoliq buva lagerning darvozasiga yaqin joydagi bir uychaga pechka qurib, issiqqina yotoqxona qilib olgan. Tog'da o'tin ko'p. Sim karavot va ko'rpa-tushak ham yetarli. Kanikul paytlarida Asqar bobosi bilan shu xonada tunab ham qoladi.

Qish chiqib, mart oyi oxirlab qolgan kunlarning biri edi. Kechasi Xoliq buva nevarasi bilan endi uyquga ketgan paytda tashqarida bir narsa sharaq etib singanday bo'ldi. Xoliq buva cho'chib ko'zini ochdi. Oshxonada tomonda bo'sh chelakning ag'anagani eshitildi. Xoliq buva «o'g'ri keldiyov!» deb sakrab o'rnidan turdi. Miltiq o'qdoni bilan devorga ilib qo'yilgan edi. Bobo qorong'ida paypaslanib miltiqni topolmadi, so'ng elektr chiroqni yozdi. Asqar ham uyg'onib, o'rnidan sakrab turdi.

Xoliq buva bir stvollar eski ov miltig'ini shosha-pisha o'qladi, po'stinini yelkasiga tashladi, etigini paytavasiz kiydi. Asqar ham kiyinib, bobosining ketidan tashqariga chiqdi.

Kecha oydin edi. Xoliq buva miltiqni oldinga qaratib ushlaganicha lager oshxonasi tomon yurdi. Nariroq borganda Asqar qordagi yirik-yirik izlarni ko'rib qoldi.

Bobo, qarang! – deb shivirladi u.

Xoliq buva engashib qaradi, ovozini pasaytirib:

Ko'zim o'tmayapti, – dedi. – Qara-chi, nimaning izi?

– Birov qordan yalangaoyoq yurib o'tganga o'xshaydi, – deb shipshidi Asqar.

Be-a! Shunday sovuqda-ya! – dedi Xoliq buva ishonmay.

Shu payt oshxonaning yonidagi shiyponga taxlab qo'yilgan tumbochkalardan birini kimdir shunday kuch bilan otdiki, tumbochka o'ttiz metrga nariga uchib borib, qorga shaqillab tushdi va eshigi sinib, parchalanib ketdi.

Xoliq buva o'zini devor panasiga oldi. Asqar uning pinjiga suqildi.

Qara-chi, shiyponda odam bormi? – shipshidi Xoliq buva.

Odam emas! – qalt-qalt titrab dedi Asqar.

U orqa oyoqlarida tikka turgan bahaybat katta ayiqni ko'rib qo'rqib ketgan edi. Ayiq tumbochkalarning ichida bolalardan qolgan qand-qurs borligini hididan sezgan bo'lsa kerak. Uning qisirlatib qand chaynagani eshitildi.

Qishda qirq kun surunkasiga uxlaydigan ayiq mart oyiga kelib uyg'onishi Xoliq buvaning esiga tushdi. Ayiq qalin qorning tagidan ovqat topib yeyolmay och qolgani va kimsasiz lagerga ozuqa izlab kelgani xayolidan o'tdi.

Shu payt ayiq tumbochkalardan yana birini ulotirib yubordi. Tumbochka buloq suvi toshib to'ng'igan yiltiroq muz ustiga kelib tushdi-yu, dabdalasi chiqdi. Xoliq buva buni kurib, g'azabi qaynab ketdi. Axir u singan tumbochka uchun boshliqlar oldida javob berishi kerak. U ayiqqa qarab:

– Uying kuygur maymoq! Ket bu yerdan! – deb qichqirdi.

Ayiq shiypon tagidan oldinga chiqdi. Boshini egib, kichkina quloqlarini dikkaytirib, Xoliq buvaga hamla qiladiganday tahdidli tusga kirdi. Xoliq buva miltiqni unga to‘g‘riladi. «Otsam, bir o‘q bilan yiqilmaydi, yarador bo‘lsa, jini qo‘zib, Asqar ikkovimizni o‘ldirib ketadi», degan o‘y ko‘ngliga keldi. Xoliq buva miltiqning uchini yuqoriga ko‘tardi-yu, po‘pisa uchun ayiqning tepasidan oshirib o‘q uzdi.

Jimjit tog‘lar birdan gumburlab ketdi. Qorli yonbag‘irlardan aksadolar qaytib, bir o‘q ovozi go‘yo yigirma-o‘ttizta bo‘lib eshitildi. Ayiq orqasiga burilib qochdi. Lekin nariroqqa borganda bahaybat tovush bilan bo‘kira boshladi. Bu bo‘kirishni eshitib, Xoliq buvaning eti junjikib ketdi. Och ayiq dahshatli bo‘ladi. Bobo Asqarni qo‘lidan ushlab, qorovulxonaga qochib kirdi-yu, eshikni ichidan bekitib oldi.

Parpirab yonayotgan – yuz shamlik elektr chiroq ularning ko‘nglidagi vahimani xiyol bosganday bo‘ldi.

Bunday chiroq yonib turgan uyga yirtqich bostirib kirolmaydiganday tuyulardi.

Xoliq buva bilan Asqar kechasi chiroqni o‘chirmay uxlashdi. Ertalab oftob chiqqanda turib qarashsa, kecha ayiq sindirgan tumbochkadan nariroqda bitta bo‘sh chelak pachaqlanib yotibdi.

– Uying kuygur-ey, buni nega pachaqlabdi? – dedi Xoliq buva chelakka achinib.

– Achchig‘i kelgandir-da, – dedi Asqar va qorli o‘rmonga qo‘rqapisa qarab qo‘ydi. – Bobo, u endi qaytib kelmasmikin?

– Kunduz bekinib yotadi, kelmaydi. Lekin och bo‘lsa kechasi yana kelishi bor.

– Miltiq otganingizda qo‘rqib qochdi-ku.

– Qochgani rost... Lekin nafs ham yomon narsa-da. Maymoq qishi bilan uxlab yotib juda och qolganga o‘xshaydi. Aksiga olib, tog‘da hali qor qalin... Kechasi ko‘ramiz-da.

Chindan ham, ayiq kechasi yana keldi. Lagerning narigi chetida ovqat qoldiqlari solinadigan va yerga o‘yib o‘rnatilgan kattakon taxta quti bor edi. Xoliq buva yarim tunda o‘sha taxtalarining qarsillab singanidan uyg‘onib ketdi. So‘ng miltiqni ikki qayta o‘qlab, osmonga qaratib otdi. Lekin sarqit solingan qutilarga yaqin bormadi. Tong otgandan keyin borib qarashsa, qalin taxtalar singan, og‘ir temir qopqoqlar ko‘chirib tashlangan, bilakday yo‘g‘onlikdagi temirlar mayishgan.

Bulturdan qolgan ovqat sarqitlari axlatga aralashtirib, tit-pit qilingan. Muzday tog' havosida badbo'y hid dimoqqa gupillab urilardi. Asqar bobosiga taajjub bilan tikildi.

– Ayiq chirigan go'sht-po'shtlarni qanday yeydi?

– Me'dasi zo'r bo'lgandan keyin yeydi-da. Ayiq o'zi toza go'sht-ni ham archaning tagiga ko'mib, sasitib yeydi. Odati shunaqa.

Asqar uyum-uyum bo'lib yotgan axlatlarga yana bir qaradi.

– Bechora juda och ekan-da, a, bobo? – dedi ayiqqa rahmi kelib.

– He, bechora bo'lmay uyi kuysin! Kecha chelakni pachaqlab, tumbochkalarni sindirgan edi. Bugun bu qutilarni vayron qilibdi. Qo'yib bersa, ertaga butun lagerni valangar qiladi. O'q otgan bilan qo'rq-masa... Men buni boshliqlarga borib aytaman. O'zlari bir chorasini topishmasa, mening boshim baloga qoladi.

Lagerni ko'rgan katta tashkilot shaharda edi. Xoliq buva o'sha kuni shaharga tushib bordi va o'ziga moyana to'laydigan korxonaning direktoriga butun voqeani aytib berdi.

Oltin gardishli ko'zoynak taqqan direktor Xoliq buvaning hikoyasi ishonmay;

– Lagerda... ayiq? – dedi. – Otajon, balki... yomon tush ko'rgan-dirsiz?

– E, menga ishonmasangiz, o'zingiz yuring!

– Shundan shunga-ya? Ko'rib turibsiz, hozir ish juda ko'p.

– Bo'lmasa ishdan keyin boring.

Xoliq buva «bormasangiz bo'lmaydi!» deb oyoq tirab turib oldi. Direktor kechqurun ishdan keyin Xoliq buvani mashinasiga solib, tog'dagi lagerga chiqib kelguncha qorong'i tushib qoldi.

Mashinaning chirog'i o'ngib ketgan bayroqchalarga tushdi. Ular sovuqda ma'yus hilpirab turibdi. «Xush kelibsiz» degan katta yozuvning pastki qismi qorga botib qolgan. O'sha yozuvdan sal narida kechagi ayiq yana timiskilanib ovqat qidirmoqda edi.

Oynavand ayvondagi stolning tortmasida kimdir bir-ikki burda shirin suharini unutib koldirgan ekan. Ayiq shuning hidini olib ayvonga kirgan edi. Lekin stol tortmasini qanday ochishni bilmay, uni quchoqlab ko'tardi-yu, oynavand devorga eltib urdi. Romdagi oynalar sinib to'kilib tushdi, stol ag'anab ketdi va suhari turgan tortmaning bir cheti ochildi. Ayiqqa shu kerak edi. U darrov tumshug'ini tortmaga tiqdi.



Direktor «qorongʻida buni koʻrmasa ham, oynalar singanini va agʻanagan stolning shovqinini eshitdi-yu, sarosimalanib:

– Miltiq qani, miltiq? – dedi Xoliq buvaga.

– Miltigʻim yaramaydi. Bu uying kuygurga beshotar miltiq kerak!

Direktor ayvondan chiqib kelayotgan ayiqni koʻrdi-yu, kayfi uchib, mashinasiga qarab shoshildi. Darrov ichkariga kirib, eshikni yopdi.

– Motorni yondiring! – dedi shoferga. Narigi eshikni Xoliq buva ochdi: – Tezroq chiqing! Yaxshi miltiq bilan bitta mergan topib bera-man. Bu yirtqichni otish kerak.

– Lekin rayijrokom ruxsat bermasa otib boʻlmaydi, – dedi shofer. – Ayniqsa hozir, bahor paytida togʻda ov qilishni kattiq taqiqlab qoʻyishgan.

– Ruxsat olamiz! – dedi direktor bu gapga parvo qilmay.

Xoliq buva shaharga ertalab boradigan boʻldi-yu, qishloqda mashinadan tushib qoldi.

Uyga borsa, Asqar uni kutib oʻtirgan ekan. Bolaning koʻzlari multirab:

– Ayiqni... otdilaringizmi? – dedi.

– Ertaga mergan kelib otadigan boʻldi. Direktor aytdi.

– Bobojon, ayiqni otdirmang! – deb iltimos qildi Asqar.

– Ha, nega?

– Oʻqituvchimiz aytdi. Togʻda ayiq oz qolgan emish. Biz... ana-qa... tabiatni muhofaza qiladigan jamiyatga aʼzo boʻlganmiz.

– Nima, sening oʻsha jamiyating singan derazalarni tuzatib bera-dimi? Uying kuygur ayiq butun derazalarni sindirdi-ya!

– Och ekanda, bobo. Oʻqituvchimiz aytdi. «Ovqat qidirib shunaqa qilgan», dedi. Ovqat berib, qornini toʻygʻazsak unday qilmaydi.

– Tavba! U qoʻymidiki, sen oldiga borib, yemish berasan! Yaqiniga yoʻlab koʻrgin-chi?! Oʻtgan kuni kechasi bir chaqirim joydan koʻrib, qalt-qalt titrab qolding-ku... Yoʻq, bu uying kuygurning jazosini mergan bersin!

Xoliq buva shu fikr bilan ertasi kuni shaharga tushib ketdi.

Direktorning kabinetiga kirsam, u odam koʻzoynagini qoʻliga olib, qovoqlarini uqalab oʻylanib oʻtiribdi.

– Ota, ish chatoq! – dedi direktor. – Rayijrokom ayiqni otishga ruxsat bermadi.

– Lagerni vayron qilayotganini aytdingizmi?

– Aytdim. «Quturgan bo‘lishi mumkin» ham dedim. Lekin qishloqlaringizdan bir o‘qituvchi rayijrokomga telefon qilgan ekan. «Ayiq och qolib shunday qilgan» deпти. Bir yili qishda qor qalin yog‘ib, kakliklar ochdan o‘ladigan bo‘lganda odamlar toqqa don sepib, qutqarib qolishgan ekan-ku. Ijrokomdagi o‘rtoqlar shuni eslashdi. «Siz ham, iloji bo‘lsa, ayiqqa xurak topib bering», deyishdi.

– Yo tavba! Bir qilmagan ishimiz – ayiq boqishmide?

– Endi shuni ham qilamiz shekilli-da, otajon.

– Kim unga xo‘rak eltib beradi? Ancha-muncha xurakka to‘ymasa. O‘zi xo‘kizday bo‘lsa. Qor ketguncha necha kun boqiladi? Buning harajatini kim ko‘taradi?

– Ayiqning tashvishidan mening ham boshim qotdida, lekin... Indamay qo‘yib bersak, lagerdagi anjomlardan ayriyamiz. Bu bizga ayini boqqanimizdan ham qimmatroq tushadi... Lekin remont harajatlarning pulidan ajratay desam, bu ham qonunga xilof.

Xoliq buva nevarasi Asqarning ganlarini esladi.

– Ajab zamonlar bo‘lyapti-da! – deb bosh chayqab qo‘ydi. – Odamlar tog‘da yurgan ayiqning tashvishini ham tortadigan bo‘lyapti. Nevaram ham «otdirmang» deb chirqillab yuribdi... Maktab bolalariga aytsak, uylaridan qotgan non, u-bu yig‘ib kelmasmikin? Shunaqa bir jamiyatlari ham bormish-ku!

Bu fikr direktorga juda yoqib tushdi.

– Ha, rayijrokomga telefon qilgan o‘qituvchi ham yordam berishi mumkin. Siz borib ular bilan yaxshilab gaplashing. Agar bo‘lmasa, unda... ertaga o‘zim biror boshqa yo‘lini topaman.

Xoliq buva qishloqqa qaytib keldi-yu, Asqarni chaqirib oldi.

– Ayiqni otmaydigan bo‘lishdi!

– Ur-ra! – dedi Asqar quvonib. – Biz endi uni boqib olamiz!

– Nima bilan boqmoqchisan?

– Har bir bola uch-to‘rt bo‘lakdan qand olib chiqsa qancha bo‘ladi!

– Bo‘lmasa, o‘sha o‘qituvchingga borib ayt... O‘zi bosh bo‘lib ayiqqa xo‘rak yig‘sin.

– Bobo, agar biz yig‘sak, siz toqqa olib ketasiz-mi? – so‘radi Asqar.

Bu qishloqqa ayiqning fe'l-atvorini Xoliq buvachalik yaxshi biladigan odam yo'q edi. Asqar shu sababli bobosining bu ishga bosh qo'shishini juda-juda istardi.

Xoliq buva Asqarga o'ychan ko'z tikib kulimsiradi-yu: «Shu nevaramning ko'ngli juda kuyrak-da, – dedi ichida. – Men tog'da yolg'iz siqilib o'tirganimda ham doim bu borib habar oladi. Bo'lmasa, Xudoga shukur, Asqardan boshqa o'n oltita nevaram bor. Bu faqat menga shunday mehribon desam, hammaga rahmdil ekan-da. Och ayiqqa ham hammadan ortadi dayishyapti. Jonkuyar odam bolaligidan ma'lum bo'larkan-da».

Xoliq buva ko'nglidan o'tgan shu o'ylar ta'sirida Asqarga mexri tovlanib qaradi-da:

– Bo'pti, o'g'lim! – dedi. – Men ham o'sha... sen aytgan jamiyatga a'zo bo'la qolaman.

– Rahmat, bobojon! – deb Asqar uni bo'ynidan quchoqlab, sersoqol yuzidan undi. So'ng maktabiga qarab chopib ketdi.

Bolalar uchun yiqqan xo'rakka bir hurjunning ikki ko'zi to'ldi. Qotgan non, qand-qurslar orasida sasigan go'sht, xatto qurtlagan jiyda ham bor edi. Ayiq sasigan go'shtni yaxshi yeyishini eshitgan bolalar, «unday bo'lsa, qurtlagan jiydani ham yeydi», deyishib topganlarining hammasini hurjunga solib berishgan edi.

Ertasi kuni etalab Asqar bilan Xoliq buva bu hurjinni eshakka ortib, toqqa chiqishdi. Xoliq buva ayiqning kun chiqish tomondagi yonbag'ridan tushib kelishini bilardi. U bilan Asqar ayiqning izidan yurishib, lagerdan bir chaqirimcha nariga borishdi-da, hurjundagi xurakning bir qismini qattiq qor ustiga to'kib qo'yishdi. O'sha kuni Asqarlar kechasi lagerdagi qorovulxonada yotishdi. Ayiqdan darak bo'lmadi. Ertasi kuni kunduz yana ayiqning eski izidan yurib borishdi. Kecha xo'rak to'kib ketgan joylarini qarashsa, qand-qurs va qotgan nondan uvoq ham qolmapti. Hatto qurtlagan jiyda ham yo'q izlarga qaraganda, ayiq shu yerda qornini to'ydirgan-u, qaytib ketgan edi.

– E, Hayriyat! – dedi Xoliq buva.

Asqar hurjunda qolgan ozuqaning yana bir qismini haligi joyga sekin to'kib qo'ydi.

Shundan keyin ayiq lagerga kelmaydigan bo'lib ketdi.

うららかな天気が始まり、雪が溶け始めた頃だった。いつもと同じように、この時期にコルホーズはシルダリヤ川沿いのヤッシ野原でほろを作って移動する。野原と村の距離はあまり遠くない。十ヴェルスターぐらいの距離だ。私はここにポッチャホンおじさんと毎日ではなくても、狩に行った時に必ず来ている。今、春だ。もちろん、この時期にシルダリヤ川があふれて、近くにある池や川につながる。ガチョウやカモが飛んできて、池の周辺は鳥のざわめきに包まれる。

今日もおじさんと一緒に馬に乗って、狩りに向かっている。おじさんは2つの銃を持ち、私は1つの銃を持っていて、二人とも銃を肩に傾けて、話しながら向かっている。川原を抜けて、ヤッシの原雪で人に会った。一人は馬に、もう一人はロバに乗っている。近づいてからわかったが、馬に乗っているのはコルホーズの獣医、コチコルさんで、ロバに乗っているのはイソイ爺、牧人だった。

「アッサラーム・アレイクム」とポッチャホンおじさんは言った。

「ヴァアレイクム...」とイソイ爺は短めに言った、「君が来てよかった、よし、行こう！」

爺はそういって、私たちの前を進み始めた。おじさんは事情がわからなくて「どうしたの？」と聞いた。

コチコルさんは「あとに続いて」というような感じで、目配せした。何か起こったはずだと思いながら、おじさんと私は馬に乗り彼らに続いた。コチコルさんとおじさんは並んで進んでいき、イソイ爺は前を行っている。

「彼の馬の親子は狼に殺されたんだって」とコチコルさんは小声で言った。

「どうやって?!」

「今、行って見よう」

私はびっくりした。あの馬の親子はおととい野原で見たけど、元気そうだった。

イソイ爺はもう少し前に進んでから、右に曲がって、灌木のほうに行った。私たちが彼に追いつくまで、彼はロバから降りて、殺された馬の親子の前に立っていた。コチコルさんとおじさんも馬を降りて、手綱を私に渡した。血だらけになった馬の親子を見て、私たちの馬はおびえて、足踏みを始めた。馬の親子の腰と、腹の半分ぐらいはない。首と顔は狼が噛んだせいで紫色になってしまった。長時間反戦したみたい。目が開けっ放しで死んでしまった!...

イソイ爺はこれを見て、震えた:「もう結構だ。どうかしない」と!

「これはひとつの狼がやった事ではないと思う！」

「全部で四つだよ。一番強いのはコクヨルだ。もう何回も捕まえようとするのか。猟師はどこ見てるんだろう！」

この言葉はポッチャホンおじさんが気になったように額をかいた。コチコルさんハウ案にかけてあったナズナを開けて、中からガラス容器で黒色の液体を出した。容器の外に頭骨に二本の骨がついた画像がかいてあった。コチコルさんは普通の注射器より大きいものを使って、馬子のいくつかのところに注射してから、「これで、朝、結果を見よう。狼は今夜、また来るだろう。そのとき、馬子を食べれば結構だ。」とコチコルさんが手を綿で拭きながら、言った。

「食べないんだよ。濃く夜はそんな馬鹿じゃないんだ。銃があるところとか、薬入りのものとか、わながかけられたところなどに全く近づかない。」とイソイ爺が怒鳴った。

「それは、朝見よう!じゃ、行こう。明日この時間に集まろう!」とコチコルさんが言った。

馬とロバに乗ってうちに帰った。あの二人は野原に向かい、私たちは明日来ると言って、狩猟に行った...

...昨日決めた集合場所に私たちはちょっと早めに着いた。夕べ、雪が少し降ったようだ。灌木は雪で傾いている。白雪に足跡が見えた。足跡は犬のより少し大きい:狼のみたい。昨日馬子が横たわっていたところは雪にかぶられたみたいが、狼が来たときに馬子の死体を食べようとして、あっちこっちに運ん

だらしい。銃撃るほど離れた距離で二つの狼がなくなっていた。もう少し上がると、三つ目の狼が横たわっている…周辺を眺めていたとき、イソイ爺とコチコルさんが現れた。

「結果はどう？」

「三つの狼がなくなっている」

イソイ爺はその狼を確かめてから、「やっぱり、俺が言ったとおりだ。コクヨルはない。あの狼はずるいね。どうしよう？」

「探してやる。狼は地元から離れない。子供の死体もここにあるし。」

「今から探さない。わなとか、銃とか薬から近づかないなら、ひとつの方法を用いるしかない。猟犬を使おう。それなら、逃げられないんだ。マンズル君、村に戻って、オクシュンコル猟犬を連れてきてね！」

私は猟犬を連れてくるために村に戻った…

オクシュンコルを連れてきた時、太陽はもう朝よりもっとあがって、ポッチャホンおじさんは猟犬の鎖を私から取ってイソイ爺に渡した。馬に乗って、「さっき、教えたようにしよう。俺が指示したときに、猟犬を放してください」といって、イソイ爺に自分の2銃身を渡した。コチコルさんも馬に乗った。

「また2-3人ぐらい猟師がいたら、良かったかも」とイソイ爺が心配しながら言った。

「今のところその人数をどこから見つけられるのかい。心配しないで、我らもこれをできるんだよ。狼が見つければ、結構！」とコチコルさんは爺を安心させた。

「でも…じゃ、猟はうまくいくように。あの草むらのところも見てね。そこになかったら、たけのやぶも見とくれ！あそこに穴があるから。」

おじさんとコチコルさんは馬に乗って、深淵の方へ走っていった。イソイ爺と私は残った。私たちもいけたが、ロバに乗って狼を狩るなんていまだに聞いたことはないだろう。

騎手たちはあっという間にたけのやぶの方へ走っていった。私は全体を中心に耳を傾け、トンとした音に目を通す。春のうららかな天気を感じられる。新鮮の草も根を上げた。ロバはひ

とつところで食べない。ずっと食べている。オクシュンコルも何かをわかったように耳を傾け、騎手が行った所へ目を通して。時々下を出して、唇をなめる。

イソイ爺も深淵のほうを見ている。空に一羽の鳥が飛んでいるが、まるで滑っているように見える。周りにほかの鳥の音も聞こえる。そのときに、大声が聞こえ、びっくりした。オクシュンコル犬は大声が聞こえた方へ走ろうとして突進んだが、鎖を持っていたイソイ爺はその瞬間ロバから倒れてしまった。

そのとき、深淵の横から狼が現れて、私たちの所へ向かった。スピードが速い。ポッチャホン叔父とコチコルさんは遠きに失した。狼が近づいたとき、イソイ爺は大声を挙げ、狼を追い払った。私は恐怖のあまり、声が上げられなかった。狼は爺の声を聞いて、ヤッシ野原の方へ向かった。追跡者も帰ってきた。

「円形的片方から圧迫してよ！」

騎手はまた追い払っていった。二人の声は大勢のほどだった。野原や草むらや竹のやぶといった距離で追い払った。狼も騎手も私たちから離れた。「円形的に追跡すれば、良かったのに…」と爺は言った。

「円形的に追跡すれば、どうなるんですか？」

「そうすれば、あまり遠くに逃げられないんだ。どこ行っちゃったか私に見えない。貴方に見えるかな、ちょっと見てごらん」

「はい、見えます。追跡者の一人は狼の正面から出ました」

「それがいいね！」

「広がりに出ました」

「いいね。騎手は狼のどこから行っている？」

「右側からです。なぜですか？」

「後で言うよ」

狼はまた私たちのほうへ向かった。今回、狼を眺めた。まるでロバほど大きい。昔、狼について聴いたことがあるが、実際見たことがなかった。舌を出して、右側から圧迫して走って

いきていた。今回、私もイソイ爺と一緒に声をあげて、追い払った。狼のスピードは先より遅く、疲れたように見えた。また、先の方向から走っていった。オクシュンコルはびくびく震えたまま後ろに残った。

「おじいさん、オクシュンコルを放さないですか」

「疲れてからね。そのとき、オクシュンコルが勝つのに違いない。この野犬、コクヨルだ。あいつのせいでオクシュンコルを傷させたくない」とイソイ爺は言った。

狼は三回目回ったときポツチャホン持参は私たちに向かって、帽子を上にあげた。イソイ爺は鎖の片方を放した。その鎖は犬の首輪からシーツ途音を出して出手、爺の手に残った。オクシュンコルは屈めて、身を投げた。濃く夜のあとを継いで、後ろからかんだ。狼は後ろを向いてうなったが、また前に向かって走っていった。イソイ爺と私は狼の後から大声をあげて、圧迫した。

「今度、左側から追跡しよう！首は固まっちゃった」とロバに乗ってイソイ時事は避けた。

「皆、気をつけて！あの狼はずるいから、見逃さないように」とイソイ爺が言った。

「今回、逃げられないよ。オクシュンコルは後ろ足に傷つけたんだ」とコチコルさんが言った。

「今度、銃で倒そう、爺さん、銃をください」とポツチャホン叔父さんが言った。

イソイ爺は銃を取って叔父さんに渡した。鉄砲の住を安代にして、照準したとき、私は恐怖で目を閉じた。鉄砲は次々に2,3回撃たれた。狼は小声でうなって倒れた。目を開けたら、血だらけになって倒れていた。

そうして、ヤッシ野原の農業者を心配にしていた狼はなくなった。皆喜んでいて。イソイ爺はコクヨルの皮を切るためナイフを出した...

ミルザハリロフ・ファッフル訳  
*Mirzahalilov Farrux tarjimasi*

## KO'KYOL

Ko'klam nafasi ufurib, qatqaloq qorlar eriy boshlagan payt. Har yilgidek, bu paytda, kolxozimiz cho'ponlari Sirdaryo bo'yidagi Yassi yayloviga o'tov tiqib ko'chib chiqishadi. Yaylov bilan qishlog'imiz orasi unchalik olis emas. Juda nari borganda o'n chaqirim kelsa keladi, kelmasa yo'q. Men bu joylarga Pochchaxon amakim bilan kuniga bo'lmasa ham, kunora ovga chiqib turaman. Ko'klam! Albatta, bu paytda, Sirdaryoning suvi toshib yon-beridagi to'qayzorlarga, ko'l-maklarga chiqadi. O'rdak, g'ozlar, g'aq-g'aqlashib bu joylarni qushlar bozoriga aylantirib yuborishadi.

Bugun ham amakim ikkalamiz ikki otda, yo'ldamiz. Amakimning yelkasida o'n oltinchi qo'shog'iz, mening yelkamda yigirmanchi bir-og'iz miltiq suhbatlashib ketyapmiz, Buriyar soyidan o'tib, Yassi yaylovga boraverishda oldimizdan ikki kishi chiqdi: biri eshakda, ikkinchisi otliq. Yaqinlashganda tanidim, ot mingani – kolxozimiz veterinari qo'chqor aka, eshakdagisi – bosh cho'pon Isoy bobo ekan.

– Assalomu alaykum, – dedi Pochchaxon amakim cho'zib.

– Vaalyoykum... – dedi Isoy bobo qiska qilib. – Yaxshi kelding: uka, qani, yur!

Bobo shunday dedi-da, eshagini «xix-xix»lab oldinga o'tib ketdi. Amakim hayron bo'lib so'radi:

– Nima gap?

Qo'chqor aka «yuravering» deganday ung ko'zini qisib qo'ydi. Bir gap bo'lsa kerak, deb amakim ikkalamiz otlarimizning boshini orqaga burdik. Qo'chqor aka, amakim va men yonma-yon ketib boryapmiz, Isoy bobo ancha oldinda.

– Samaniga bo'ri chopibdi, – dedi Qo'chqor aka asta.

– Qanday qilib?!

– Hozir ko'ramiz.

Men angrayib qolgan edim. Samanni o'tgan kuni o'tov oldida ko'rgan edim. G'ijinglab turuvdi.

Isoy bobo sal yurgandan so'ng eshagining boshini o'ngga burib, butalar orasiga kirib ketdi. Bizlar yetib borgunimizcha, u kishi eshakdan tushib; nobud bo'lgan saman jasadi yonida qaqqayib turar edi. Qo'chqor aka bilan Pochchaxon amakim ham sakrab tushib otlarning jilovlarini menga tutqazib qo'yishdi. Saman toyning qip-qizil qonga

belanib yotgan jasadini ko'rib, otlar xurs-xurs qilib hurkishar, oyoqlari bilan yer tepkilab pishqirishar edi. Toyning orqa soni, qorning yarmisi yo'q. Bechoraning lab-lunji, o'mrovlari, bo'yinlariga bo'rilarning tishlari botaverib momataloq bo'lib ketibdi. Chamasi ko'p olishgan ko'rinadi. Ko'zlari ochilganicha qotib qolibdi bechora!..

Isoy bobo bu holni ko'rib, dag'-dag' titrar edi:

– Yo'q, bunga ortiqcha chidab bo'lmaydi. Chorasini ko'rish kerak!

– Bu bitta bo'rining ishi emasga o'xshaydi-yov.

– E, to'rtta. Eng zo'ri Ko'kyol, – dedi Isoy bobo bo'g'ilib. – Qo'lga tushirolmay dog'daman. Qani ovchilar, qani, miltig'i bor azamatlar!

Bu gap Pochchaxon amakinga sal tegib ketdi shekilli, quloqchinini peshonasiga surib, yelkasini qashidi. Qo'chqor aka inda-may, egarining qoshiga osig'lig' xaltasini olib, cho'qqayib o'tirib yecha boshladi. Undan bir shisha idish olib yerga qo'ydi. Ichida qo-ramtir suyuqlik. Shishaning sirtiga yopishtirilgan oq qog'oz odamning bosh suyagi, uning tagiga ikkita ilik suyagining ayqashib turgan surati solingan. Keyin Qo'chqor aka men ko'rib yurgandan ikki-uch marta kattaroq bir haligi doridan to'ldirib oldida, saman toy jasadining uch-to'rt joyiga ukol qildi, so'ng qaddini rostlab:

– Ana, endi ertalab ko'ramiz, – dedi Qo'chqor aka, qo'llarini paxta bilan artar ekan. – Bo'ri bu yerga kechasi tag'in keladi. Yesa, bas, qotadi.

– E-e, yeb bo'pti. Ko'kyol deydilar uni! – dedi Isoy bobo kuyib-pishib. – Bu ablah juda sezgir. Miltiq bor joyga yo'lamaydi. Dori hidini oladi. Qopqonga chap beradi...

– Ko'ramiz, – dedi Qo'chqor aka bamaylixtir. – Qani ketdik. Ertaga shu paytda kelamiz.

Ot va eshaklarimizga minib otlandik. Ular yaylovga, bizlar ertaga kelishga va'da berib, ovga ketdik...

...Kechagi va'dalashgan joyimizga Pochchaxon amakim ikkovimiz ertaroq yetib keldik. Kechasi yerga bir qarichcha qor tushgan. Bo'talarning shox-shabbalari qordan egilib turibdi. Momiq qor usti qim-qiyg'os ov izi... Ana, uch-to'rttacha itnikidan kattaroq iz: bo'riniki bo'lsa kerak. Kechagi toy jasadi yotgan joyga kelsak, g'alati voqeaning ustidan chiqib qoldik: samanning jasadi qor tagida qolibdi. Ustida bo'rilar rosa ot o'yini qilgan ko'rinadi, jasad atrofidagi qorlar



payhon bo‘lib ketibdi. Toy bechorani tortqilashaverib tilka-pora qilib yuborishibdi. O‘n metrcha narida ikkita bo‘ri birining ustiga biri mingashib, shamday qotib qolibdi. Yana nariroq yurgan edik, bir bo‘taning tagida uchinchisi mukka tushib yotardi... Shularni ko‘rib yurgayimizda Isoy bobo bilan Qo‘chqor aka ham kelib qoldi.

– Nima bo‘pti?

– Uchtasi gumdon...

Isoy bobo aylanib, uchala bo‘rini ko‘rib keldi-da:

– Ana, aytmadikmi? – dedi boshini sarak-sarak qilib. – Ko‘kyol yo‘q. U makkor u yerda ham ayyorlik qilibdi. Endi nima qildik?

– Payiga tushamiz. U bo‘rilarni tashlab uzoqda ketolmaydi. Nega deganingizda o‘sgan-o‘ngan joyi, – dedi Qo‘chqor aka. Buning ustiga bolalarining jasadi shu yerda.

– Shu bugunoq iziga tushish kerak, – dedi Pochchaxon amakim. – Qopqonga chap bersa, miltiq bor joyga yo‘lamasa, dorining hidini olsa, buning yo‘li bor. Iziga tozi solamiz. Uni tozi eplaydi. Qutulib bo‘pti. Mansur, sen qishloqqa borib Oqshunqorni olib kel!

Men Oqshunqorni olib kelish uchun qishloqqa jo‘nadim...

Oqshunqorni olib kelganimda quyosh ikki terak bo‘yi ko‘tarilib qolgan edi. Pochchaxon amakim tozining bo‘yibog‘ini qo‘limdan olib, Isoy boboga tutqazdi:

– Gap haligiday, oqsoqol, – dedi Pochchaxon amakim. U shunday dedi-da, yelkasidagi qo‘shog‘iz miltig‘ini Isoy boboga berdi. Keyin otiga sakrab mindi. – Oqshunqorni mendan ishora bo‘lganda qo‘yib yuborasiz.

Qo‘chqor aka ham otiga chavdonlik bilan mindi.

– Xech bo‘lmasa, tag‘in bir-ikkita otliq yigit bo‘lganida edi, – dedi Isoy bobo tashvishlanib.

– Shunday ish qizg‘in paytda besh-oltita otliq yigitni qayoqdan topamiz. Havotir olmang, o‘zimiz ham boplab tashlaymiz, oqsoqol, – dedi Qo‘chqor aka boboga tasalli berib. – Avval topilsin.

– Har holda... Mayliku ishlarig o‘ngidan kelsin, – dedi Isoy bobo qo‘llari bilan yuzlarini silab. – Xuv anavi jingilzor orasiga ham bir kirib o‘tinglar... U yerda bo‘lmasa, jar ichidagi qamishzorga qaranglar. O‘sha joyda uyasi bor.

Pochchaxon amakim bilan Qo‘chqor aka otlarini yeldirib Bo‘rijar tomoniga ketishdi: qo‘llarida bir-bir cho‘qmor. Isoy bobo bilan men haligi joyda qoldik. Bizlar ham borsak bo‘laverar edi-ku, biroq, hech zamonda eshak bilan bo‘ri quvlabdi, degan gapni eshitganmisiz?

Otliqlar birpasda jingilzor ichiga sho'ng'ib ketishdi. Butun borlig'im quloqqa aylangan, tiq etgan tovushga alanglab qarayman. Ko'klamning salqin shabadasi g'ir-g'ir esib turibdi. Eski o'tlar tagidan yangi maysalar bo'y ko'rsatib qolgan. Eshaklarimiz bir joyda tek turishmaydi: engashib qurt-qurt yovshan chaynashadi. Oqshunqor ham huddi bir narsaning sharpasini sezayotganday quloqlarini ding qilib, otliqlar ketgan tomonga qarab-qarab kuyadi. Ahyon-ahyonda qip-qizil tilini chiqarib, lab-lunjini yalaydi, bellarini gujanak qilib kerishadi, gingshiydi, toqatsizlanib tipirchilaydi...

Isoy boboning ko'zi Bo'rijar tomonda. Osmoni falakda bir qora qush qanot qoqib uchib yuribdi, yo'q, uchib yurgani yo'q, go'yo bir tekisda suzib yuribdi. Qaerdadir bir so'fitor'g'ay vijir-vijir sayraydi. Shu mahal birdan qayt qaytlagan, qiyqirgan ovozlar quloqqa chalinib qoldi. Yuragim qinidan chiqib ketayozdi. Oqshunqor qiyqiriq chiqqan tomonga qarab bir silkingan edi, eshak ustida bamaylixotir o'tirgan Isoy bobo bexosdan uchib tushayozdi. Bobo darrov o'zini o'nqlab olib, tozining bo'yinbog'ini mahkam qo'liga o'rab ushladi. Oqshunqor bo'lsa hamon yer timab, g'ingshib, oldinga intilar edi.

Birdan Bo'rijarning yonginasidagi qalin jingilzordan bo'ri otilib chiqib, bizlar turgan tomonga kela boshladi. Qadami juda ildam. Qo'chqor aka bilan Pochchaxon amakim ancha orqada qolib ketibdi. Bo'ri shunday yonginamizga kelib qolganida, Isoy bobo birdan ovozining boricha hayt-haytlab baqira boshladi. Menda qichqirishga ham majol qolmagan edi. Hayriyat, bo'ri boboning tovushini eshitib, Yassi yayloviga qarab burildi. Orqada quvib kelayotganlar ham birpasda oldimizga yetib keldi.

– Aylantirib quvinglar! Bir tomonidan...

Otliqlar quvlab ketishdi. Ikkalasining ovozi xuddi o'n-o'n beshta odamning ovoziday bor. Butun jingilzorni, yaylovni boshlariga ko'tarishib quvlashar edi. Ha-xuv deguncha bo'ri ham, quvg'inchilar ham ancha uzoqlanish ketdi. «Aylantirib quvlash kerak edi-da!» – deb toqatsizlanar edi bobo.

– Aylantirib quvlasa nima bo'ladi, bobo?

– Shunda uzoqlashib, yo'l adashtirib ketolmaydi, – dedi bobo qo'llarini peshonasiga soyabon qilib. – Ko'zim qurg'ur utmay qoldi... Ko'rinadimi? Qaragin-chi?

– Xuv, ana, otliqlardan biri bo'ring ro'parasidan kesib chiqdi.

- Ha, barakalla, ish bundoq bo‘pti!
- Ochiqlikka qarab burildi...
- Yaxshi... Otlıqar bo‘rining qaysi tomonida?
- O‘ng tomonida. Nima edi, bobo?
- Keyin aytaman.

Bo‘ri aylanib tag‘in bizlar turgan tomonga kelib qoldi. Bu gal sal o‘zimni tutib, uni yaqından tomosha qildim. Ko‘kyol deganlaricha bor ekan. O‘zi ham naq kattaligi eshakday, juda bahaybat ekan. Bo‘rining ta‘rifini ilgarilari juda kun eshitganman-u, biroq o‘zini yaqından hech ham ko‘rmagan edim. Ana, oldimizga yaqinlashib qoldi. Tillari osilib, o‘ng tomonidan quvib kelayotgan otliqlarga bo‘ynini burib qara-gancha qochib kelar edi. Bu gal Isoy boboga men ham qo‘shilishib, ovozim bo-ri-cha qaytqaytlab baqirdim. Bo‘rining chopishi ilgarigidek yengil emas-day tuyuldi menga. Nazarimda, charchab qolgan. Tag‘in aylanib boyagi yo‘ldan ketdi. Oqshunqor tipirchilagan-cha tag‘in qarab qolaverdi.

– Qo‘yib yubormaysizmi, bobo?

– Obdan charchasin, keyin, – dedi Bobo iyagini qashib. – Oqshunqorning ishi shunda yengil bo‘ladi. Bu it emganni Ko‘kyol deydi-ya! Tozini mayib qilib qo‘yishi mumkin.

Bo‘ri uchinchi bor aylanib kelishida Pochchaxon amakim bizlarga qarab qashog‘ini ko‘tardi. Isoy bobo bo‘yinbog‘ning bir tomonini bo‘shatib yubordi. Buyinbog‘ tozining bo‘ynidagi mis halqadan «shir-r» etib chiqdi-yu, – boboning qo‘lida qoldi. Oqshunqor ikki bukilib oldinga tashlandi. U hash-pash deguncha Kukyolga yetib borib, orqasidan bir yulqib qoldi. Bo‘ri orqasiga bir qarab, irilladi-yu, yana hech narsa bo‘lmagandek, chopishda davom etdi. Isoy bobo bilan men ham eshaklarimizni niqtab uning ketidan baqirib borar edik.

– Endi chap tomoniga o‘tinglar! Bo‘yni qarishib qoldi, – deb qichqirar edi bobo yo‘l-yo‘lakay eshagini battar tihtab.

– Ehtiyot bo‘linglar, qochib ketmasin! Bu la‘nati juda ayyor-da!

– Qochib bo‘pti! Oqshunqor orqa oyog‘ining paylarini qirqib yubordi.

– Endi buning jazosini miltiq bersin. Qani, oqsokol: miltig‘ni bering-chi?

Isoy bobo miltiqni olib Pochchaxon amakimga berdi. U miltiqning tepkisini orqasiga qaytarib, nishonga olganda, men beixtiyor ko‘zlarimni yumdim. Birdan qarsillab ketma-ket o‘q uzildi. Bo‘ri

qisqagina irilladi-yu, ovozi o'chdi. Ko'zimni ochganimda, Ko'kyol jingil tagida qonga belangan qo'yi chalqanchasiga yotar edi...

Shunday qilib, Yassi yaylovidagi cho'ponlarni tashvishga solgan yirtqichning umri tugadi. Hammaning yuzida kulgi o'ynardi. Isoy bobo Ko'kyolning terisini shilib olish uchun pichog'ini yalang'ochlay boshladi...

## 子ロバの成長

人間の子どもが成長すると、結婚して家を築きます。そしてその家族に子どもが生まれ、その子どもたちの数も増えていきます。自分の子どもだからこそ自分の金で養い、成長させていきたいと思います。

申し訳ありませんが、皆様、読者たちに一つ質問をしたいと思います。

「子ロバが成長すると、どうなりますか」

あつ、どうして眉間に皺をよせて、髪を掻きむしていますか。本当にこの質問に答えられませんか。

「質問をもう一度繰り返してください」と言っていますか。

では、もう一度言います。

「子ロバが成長すると、どうなりますか」

いいえ、正しい答えが出てきませんでした。

では、皆さんが答えを見付けるまでに、次の笑い話を聞いてください。

地区の保健所の前所長 Bashirjon Zaynishev についてみんな、次のように説明されます。「見かけはおとなしく見えますが、本当にはとても腹黒い人なのです」。

つまり、Bashirjon Zaynishev は地区の保健所の所長になるや否や悪事を働くようになりました。彼は子牛はともかくとして、生後十日間ぐらいの子牛までも殺して肉を食べるようになった。このことで調査官の Qiyomiddin Muslimov が常に彼のことを手伝っていました。彼らは裏金のやり取りを Vafo Attor という老人の不具の子ロバを保険にかけることから始めました。その後、他の色々なことに対しても裏金への食指が伸びていきました。

Vafo 老人と言葉を尽くして本当は死んでいない子牛を死んでいるとして国会に知らせて保険金をもらっていました。保険所から出された裏金を Vafo と山分けしました。彼らは三年間のうちに Vafo Attor の死んでしまったことにされて国会から 5000 スムくらいの裏金を出してもらいました。とても恐ろしいことにあの不具の子ロバ 3 年間の内に 3 回死んで、3 回生き返しました。死ぬたびに国会から 16 スム出してもらいました。

地震!!!

去年の春に起こった自然災害によって多数の家が落ちてしまいましたし、多数の家が壊れました。もしビルが壊れたら修理することはできますが、心が壊れたら直すことはできません。Bashirjon Zaynishev は大勢の地区にある保健所で働く人たちの心に傷をつけました。

明らかに、地震のせいで被害を受けた人々に国会から援助金を送られます。家が被害を受けた人たちを援助するために我が地区に 2000 万スムの援助金を送られました。地区保健所はその場においても地震の援助金を横領しようという行為も見られます。例えば、Bashirjon Zayniyev の自分は何も壊れていないのに家が被害を受けているとして 520 スム義母のとても古い家がなくなったとして 300 スム、叔父さんまで援助金をもらいました。このような横領の援助金は地区保健所のほかの人たちに出されました。この人たちだけではなくて、Vafo Attor も 380 スムの援助金出してもらって、その日にすぐ地区保健所の所長は闇金の半分を返してもらいました。

このように、3 年間のうちに地区保健所には 13 万 3 千スムの金は裏金として横領されました。

Bashirjon Zaynishev も、彼の悪友たちも今、法廷にかけられました。彼に常に手伝ってあげる国会の悪友たちも今回ばかりは、何もできませんでした。

つまり地区保健所のせいで多数の生きている子牛は死んだことなり、きちんとしている一戸建ての多くは破壊されたことにされました。一番面白いことに、Vafo Attor の不遇の子ロバは 3 年間で 3 回死んで、後で生き返されました。では、子

ロバが成長すると、どうなりますか。また答えが出てきません  
でした。

「子ロバが成長すると、ロバになります」

メフモノフ・ファルフジョン訳  
*Mexmonov Farruhjon tarjimasi*

## XO'TIKNING BALOG'ATI

Odam bolasi balog'atga yetsa, uy-joy qiladi, bola-chaqa orttiradi. Pushtikamaridan bo'lgan farzandlarni halol non bilan boqqisi, el orasida izzat-obro' orttirgisi keladi.

O'rinsiz tavqos uchun xurmatli o'quvchilardan ming karra uzr so'rab, qo'yidagi savolni bermoqchimiz: «Xo'tik balog'atga yetsa nima bo'ladi?»

Ha, nega peshonangizni tirishtirib, chakkangizni qashlaysiz? Nahotki shuni ham bilmasangiz? «Savolni takrorlang» dedingizmi? Xo'p.

«Xo'tik balog'atga yetsa nima bo'ladi?»

Yo'q, topolmadingiz. Mayli, savolga javob o'ylaguncha, quyidagi hangomaga quloq tuting, shoyad topqirligingizga bir oz nafi tegsa.

Rayon sug'urta idorasining sobiq boshlig'i Bashirjon Zay-nishevning ta'rifini keltiradiganlar mana bunday to'qib-bichishadi: «U ko'rinishdan o'ta sodda, halimdek muloyim, juda uyatchan yigit. Aslida-chi? Aslida, olashaqshaqning ostidan tuxumini, tannoz kelin-chakning ko'zidan surmasini urishga qodir. O'rin kelsa, ochiqdan buzoqni bo'ksasi bilan turtib, sigirni uzala tushib emishga ham tay-yor...»

Xullas, Bashirjon Zaynishev rayon sug'urta idorasiga boshliq bo'lib keldi-yu bosar-tusarini bilmay qoldi. Buzoqning haqiga sherik bo'lish u yoqda tursin, hatto chillashir buzoqning o'zini so'yib, go'shtini yeyishga odatlandi. Bu borada unga inspektor Diyomiddin Muslimov rahnamolik qilib turdi.

Ular harom pul ishlashni Vafo attor ismli chayqovchi cholning nogiron xo'tigni sug'urta qilishdan boshlashdi. Keyin-keyin, ularning nafsigacha chiqqan yuqumli chipqon bolalab ketdi. Vafo attor bilan til biriktirib, uning o'laksa buzoqlari «harom o'ldi»ga chiqarildi. Aslida

bu buzoqlar semirtirilib suyilgan va go'shti xufyona pullangan. Sug'urta idorasidan uyushtirilgan yordam Vafo attor bilan «arra» qilingan. Qisqasi: uch yil davomida Vafo attorning olti buzog'i «harom o'ldi»ga chiqarilib, unga 5 ming so'mga yaqin yordam puli yozilgan. Bu ham yetmagandek, o'sha «nogiron xo'tikcha» uch yil davomida uch marta o'lib, uch marta qayta tirilgan va har o'limi evaziga 16 so'mdan yordam puli keltirilgan...

Zilzila!!!

O'tgan yil bahorda yuz bergan bu tabiiy ofat tufayli ko'p xonadonlar boshpanasiz qoldi, ayrim oilalarning turar joylari darz ketdi. Bino darz ketsa, tuzatsa, qayta qursa bo'larkan. Ayting, ayting, vijdon darz ketmasin ekan. Bashirjon Zaynishev boshliq rayon sug'urta idorasida ishlovchi ayrim xodimlarning vijdoni darz ketdi. Ma'lumki, zilzila tufayli zarar ko'rganlarga partiya va hukumatimiz o'sha onning o'zidayoq yordam qo'lini cho'zdi. Uy-joyi vayron bo'lgan xonadonlarga yordam berish madsadida birgina bizning rayonimiz sug'urta idorasiga 2 million so'm ajratilgan edi. Ana shu mablag'ni zarar ko'rganlarga topshirish uchun hamma yeng shimarib ishga kiritishdi. Sug'urta idorasida esa, bu borada dam zilziladan qulagan binodek ancha qing'ir-qiyshiq ishlar qilindi. Jumladan, Bashirjon Zaynishevning o'zi zig'irdek ham shikast yemagan hovlisi uchun 520 so'm, qaynonasi Sevar Shoniyozovaning eski, chaldevor hovlisi uchun 300 so'm, qishloqdagi tog'alarining hech qanday zarar ko'rmagan hovlilari uchun ham yordam puli yozdirgan. Bu xil nojo'ya yordamdan Q. Muslimov, K. Do'ltayeva hamda sug'urta idorasining boshqa xodimlari va ularning avlod-ajdodlari ham quruq qolmadilar. Hatto, harom luqmaning doimiy oxuri – Vafo attor ham zilzila tufayli yordamdan benasib qolmadi. Unga birinchilar qatori 380 so'm yozilib, o'sha kunning o'zidayoq yarmi qaytarib olindi. Bu haqda Vafo attorning o'zi ham: «Man bir besavod odamman, «yordam» deb pul yozdilar, oldim, «Yarmisini qaytarib ber», dedilar. Qiyomxonga 190 so'mni qaytarib berdim», deya ko'rsatma beradi.

Shunday qilib, uch yil davomida rayon sug'urta idorasida 133 ming so'mga yaqin mablag' aholiga qonunsiz to'langan yoki talon-taroj qilingan.

Bashirjon Zaynishev ham, uning hamtovoqlari ham qonun oldida javob beradilar. Bu gal uni qutqarib qolish uchun homiylarning qo'llari ham qisqalik qilsa kerak.

Reviziya davom etmoqda.

Endi bir gap: sug'urta idorasidagilarning yordami bilan qanchadan-qancha o'laksa buzoqlar «harom o'ldi»ga, qanchadan-qancha bus-butun binolar «yiqildi»ga chiqarildi, qanchadan-qancha ekinzorlarni «garmsel» urib ketdi, meva daraxtlari «qurib, hosilini to'kdi» va shuning evaziga davlat tomonidan necha ming so'mlab yordam puli berildi. Xatto Vafo atorning nogiron xo'tigi ham uch yil davomida sug'urta idorasidagilarning yordami bilan (uch marta o'lgan bo'lsa-da!) balog'atga yetib qoldi.

Xo'sh, Xo'tik balog'atga yetib nima bo'ldi? Yana topa olmadingizmi? E, barakalla sizga! Xo'tik balog'atga yetsa, nima bo'ladi?

Eshak bo'ladi-da!

## 緑のニワ

最初にこれを言わなければなりません。私達の住んでいる町の人たちは、とても親切で優しい人たちです。これは昔からの文化のおかげです。私たちはお年寄りや目上の人に対して、いつも深くお辞儀をしたりしており、それに慣れています。実はこれ自体に悪いことはありません。自分より年上の人、また先輩や上司を尊敬しなければなりません。しかし、この尊敬に対して、相手がもっと威張ってしまって、相手からも尊敬が返ってこなかったとしたら、それはとても悲しいことです。そのため、もうこの文化、習慣は古くなってしまい、人々はお互いに冷たくなったほうがいいのではないかと考えてしまいます。でも、このことは命をかけても言ってもいいことですが、それは私達の持っている良い文化によるものではありません。ともかくも、私のような人はどこにでもいるわけではありません。また私が言いたいのは、威張っている独裁的な市長のような人は、どこにでもいるのです。つまり「緑のニワ」のようなことは実は多いのです。この事件が起きたようなオクドヴォンのような山岳地帯も、私たちの国においては実に多いのです。

私は運転していました。私たちはオクドヴォンを通らなくてはなりませんでした。しかしオクドヴォンの山道には、独裁的な市長の暮らす田舎がありました。昔はあそこに行くときは、



行くときも帰るときも山道を通らないで、他の道を通って行っていました。なぜならそこは静かで、道もきれいで、特に独裁的な市長がないからです。今回はとても急いでいました。授業があるので、12時には大学についていなくてはなりません。それでうっかりして、また春なので子どもたちが色んな自然を見ながら行こうと言うので、はいはい、山道の道が近いね！、じゃあそちらから行こうね、と言って、それで町から出発していきました。

山のふもとでケバブを作っているお店があります。そこで車から降りて、2本ずつケバブを食べ1杯ずつお茶を飲んでから、また走り続けました。山道を通っていました。周りはとてもきれいで、魅力的でした。いろいろな木の花が咲いていました。世界中の全てのウグイスがそこに集まっているように感じるほど、鳥たちがきれいに鳴いていました。周りの木のそれぞれの枝でウグイスがとまって、鳴いていました。小川もありました。そのような魅力的な自然を見ながら、とてもいい気分です。走っていました。車の速さは普通でした。時速50-60キロで走っていました。私は走りながら、心の中で一つの心配事を抱えていました。皆さんにはそれは分からないでしょう。一つの曲がり角で、綺麗に咲いているりんごの木々の間から一つの緑のニワという車が出てきて、私達の前をゆっくり走っていました。見てみるとそれは彼の車でした。有名な車です。独裁的な市長です。とは言っても、彼について話をしてみましょう。彼が誰なのか、と言え、彼はその田舎の町内会長を沢山取りまとめている人です。あなたたちが今想像しているような人です。そのような人たちはお互いに似ています。色んな方法を使って、その地位に登り詰めた人です。あとで国のもっと偉い人を喜ばせるために、綿花とか小麦粉の年間収穫量のプランを増やして、そうして国の偉い人たちの気を引いて、自分の市長の座を確固たるものにしました。そしてもっと偉い人たちを自分の支援者のようにして、今では田舎で何でも好き放題にできるようになりました。彼らの心は黒いです。田舎の人々に対して横柄な態度をとるようになりました。私達のような普通の大学の先生は、

彼にとってコオロギのようなものです。彼が指ではじいたら私たちは死んでしまいます。ところでこの人の悪い影響は大学にまで届いていました。私達の可哀相な学長は、実にいい人です。市長の名前を聞いたら彼は震え上がってしまうのです。その独裁的な市長の田舎の子どもや親戚がその大学で勉強していたら、学長は彼らに一番最初に媚を売らないといけないのです。学長はこのことでとても悩んでいました。

緑のニワが私達の前に出て来て、走るスピードも更にゆっくりになりつつありました。それは本当に彼の緑のニワでした。車の横からアンテナが出ていました。車の中には無線があって、それで話していました。車は新品でしたが、横から割り込んできたとき、車の一つの後ろのガラスは土で汚れているのが見えました。とてもゆっくり走っていました。私達も更にスピードを落としました。どうしようか。横を通って行ったほうがいいだろうか、と心の中で考えていました。彼はもし私が横を通ったら、私を大学から免職してしまうかもしれない、と思いました。他の人たちはかつてうっかり横を通り過ぎてしまい、あとで大変苦勞をしました。実は私の考えでは、このような独裁者のような人はどこの国でもいつの時代でもいました。また、彼らはお互いにとてもよく似ています。でも私達の社会で彼らのような人が生まれてくるのは・・・例外的で、もし思い浮かべるとしたら真っ先に彼が浮かんできます。私達もニワの車の車輪にお辞儀をするようにゆっくりと後ろを走っていました。突然私の息子がわがままを言って、「お父さんなんで僕達急いでいるのに何で横を通らないの、急いでいるでしょう」、と言いました。息子は市長がいない場所で私が自由に走るのに慣れていたので。周りの魅力的な自然は、息子に更に勇気を与えていました。そのせいで息子は何度も訴えていました。私は、「はい、はい、今から横を通るよ」、と言っていました。あとで妻も文句を言い始めました。「あなたどうしたの？何でこんなにゆっくり走っているの？道は広いでしょう？前の車の横を通って行ったほうがいいんじゃないの？」と言いました。私は理由を言えなくて、心の中で困っていました。大学にもっと早

く着かないといけなかったのです。このままだと絶対に遅刻する、という時間でした。とても困っていて、時々あのニワがすごくゆっくり走って、あなたが先に行きなさい、と言っているように見えました。いいえ、私は通れない、怖い、と思いました。前のニワが止まったら、私も止まります。そのままずっと走っていました。周りの魅力的な自然ももう私達の目には入っていませんでした。両側から息子と妻がずっと文句を言っていました。小さい娘も妻が言っていることを繰り返していました。まるで冗談のようです。正直に言えば、すごく怖くて、そのニワの後ろを1時間半近く走っていました。少し前のニワがスピードを出したら、私も出していました。ニワがゆっくりと走ったら私もゆっくりと走っていました。止まったら、私も止まっていました。みんな車の中でとても困っていました。息子はもう泣き始めていました。妻はもう怒って私と話してはいませんでした。娘は眉をひそめていました。私自身はと言えば？私もとても困り果てていました。このように怖がりながらゆっくり走っていたので。大学の授業ももう間に合わない時間になってしまいました。山道を越えたあとでまた大学まで2時間走らなくてはなりません。12時近くになってきて、私の手が震えて、車もとても暑くなってしまいました。山道を登りきるまでに、あと2、3キロというところでした。ニワは突然右に曲がって、飛行機のエンジンを積んでいるように、峠からすごいスピードで飛ぶように走って行き、見えなくなりました。びっくりしました。私はすごく安心して、心の中で「神様ありがとう」、と言いました。そして思わず手をたたきました。そしてスピードを出しました。山道を登りきりました。少し行くと検問所があります。そこを見ると一人の警察が検問所の門を閉めて、私達のほうに向かってライトを振って、停車の合図を送ってきました。私達は止まりました。少し前に喜んでいた心は、またみるみる曇っていきました。走っている時に何か違反をしたかどうかと思い返しました。警察も独裁市長の下で働く人でした。その独裁市長は、無線でその警察に何かを言ったのだろうか、と思いました。もしそのように何かを言われていたとし

たら、免許証を取られてしまうので、恐怖を感じていました。私はもう二度と人生の中でこの道を通りたくない、と思いました。車の中から免許証とか書類を取って警察の前に出ました。

「こんにちは」、と彼は言いました。警察は敬礼して挨拶しました。書類や免許証を見せたら、「それはいいですね、上司はあなたのことをとても礼儀正しい人だ、と言いました」。彼は心の中で、通らなくてよかった、妻や子どもが言ったように通り過ぎなくてよかった、と思いました。彼らの考え方はそのようなものですね。本当に全部が無事に解決して、問題にならなかったのだから、安心して走り続けました。ちょっとあとで妻も話しかけてきました。息子も泣くのをやめて普通の状態になりました。娘もしかめつつらから普通の表情に戻りました。でも、大学の授業には行けなかったのだから、あとでそれは問題になってしまいました。二日後で、電話が鳴りました。はい、と応えたら、早く来て下さい、ヴィルニュースという町に、と言われました。その町でウズベクの文化について講義をしてください、と言われました。私達の大学とあちらの大学はお互いの先生を派遣して講義をさせて、お互いの文化を学んでいました。

その講義に行くためにまた車で走り続けました。そして、またもう一つの山道から行くことにしました。何故かと言うと、大学に早く行かないと行けなかったし、また以前市長を喜ばせたので前のように困らないと思ったからです。またその市長は、いつもこの山道を走ると言うわけではないでしょう。私は交通ルールを守って山道に上がってきました。見てみたら、警察の検問所はしまっていました。警察もいませんでした。よかった、警察を見るといつも気分が悪くなるから、今日はいなくてよかった、と思いました。道が綺麗に舗装されていたので、スピードを出して進んでいきました。それでも怖くて、もしどこかから緑のニワが出てきたらどうしよう、と考えてしまいます。

走り続けていると、周りは静かで春の盛りです。またウグイスが鳴っていました。道の横に石で作られたいくつかの家がありました。その田舎を通ったら、ケバブを作っているお店がありました。その田舎に近づいた途端、あの警察が目に入りま

した。警察は私に合図を送り、私は停車しました。免許証と車の書類を持って車から出ました。「こんにちは」と言って、警察のもとへ行きました。「どうしてこんなにスピードを出してきたんだ」と、敬礼もせずに彼は尋ねてきました。彼は以前の警察官ではなくて、私を知らない人のようでした。「いえ、スピードはそんなに出していませんよ。メーターで見てください」と言いました。警察は「私は見たぞ、スピード違反は罰金3ススムだ」と言いました。「はい、はい」と私は言ってお金を払いました。「市長は元気でいらっしゃいますか」と私は聞きました。彼は少し怒っている顔をして、私に「市長は出張に出かけた」と言いました。「どこに」と私は尋ねました。「行くべきところに行ったんだ。党から除籍になって、彼の仕事からも解雇されたんだよ」と言いました。「え、不思議ですね、本当ですか」と聞きました。「あなたもこれからスピードを出さないで、安全運転をするように」と言われました。

私は車に乗って、また走り続けました。何故か笑いたい気分になったけど、自分に「お前はバカだなあ」と言いました。本当にこのようなことがあるのでしょうか、市長が解雇になるなんて、ありえないことだ。どうしてあの時、自分は怖がっていたんだろう、奥さんや子どもたちの前で大きな恥をかいたじゃないか、すごく怖がって、みんなを困らせたなあ。スピードを出して、横を通ってしまってもよかったなあ、なんで私はそうしなかったんだろう、と自分に尋ねました。その人は党から解雇されて、刑務所に入れられたんだぞ。もし信じられないなら、皆さんが知っている独裁市長を思い出してみてください。みんなそういう人たちは大体同じ運命でしょう。最後は刑務所に入ってしまうに違いない。

そのように自分自身に語りかけていた時、不思議なことが起こりました。ケバブのお店を通り過ぎたところで、曲がり角に来て、曲がった瞬間、横から緑のニワがすごいスピードで走りだしてきました。そしてまたゆっくり走り続けました。すごく怖くなってしまい、自分でも知らないうちにブレーキをかけて、窓ガラスに頭をぶつけてしまいました。まずい、あの警察

にだまされた、と考えました。また自分の車のスピードを落として、緑のニワの後ろからゆっくりと走りました。前の勇気はどこに言ってしまったんだろう、と自分に問いかけました。前の車がスピードを出したら私もスピードをだして、ゆっくりと走ったらまた私もスピードを落としました。私の心臓をネコの爪が引っかいているように感じていました。そのように走っていたとき、前のニワが突然止まりました。車のドアを開けて、一人のロシア人の若い男の人が窓から顔を出して後ろを見てきました。私は「はい」と言いました。その車に近づいて、車の側の窓をおろして、その男の人はロシア語で「なんでお前さんは俺の後ろから来ているんだ」と言いました。私の頭は動かなくなっていました。ロシア語で「すみません、すみません」と言って、車をちょっと眺めたら、かなり古い車でした。私はまたその車の横を走って走りました。

また自分自身を笑い飛ばしました。私はウサギの心臓を持っているように、感じていました。「怖がっている人にとっては、小さな虫でも竜のように見える」とはこのことでしょうか。このことわざは私のためのもののように考えました。もう少し男らしくならないとなあ、お前も一人前の人間だろう、あの独裁者の市長もお前と同じ人間だろう、そのように考えて走り続けてきたとき、町の中心に着きました。もう一つのことを、包み隠さず言うとすれば、私は今でも町の中心とか、山道とか、田舎の道とかで緑のニワを見かけたら、心臓がドキドキしてすごく怖がってしまいます。どうしてそうなるのでしょうか？自分でも良く分かりません。それについて、私は考えないといけないのでしよう。

クオシモフ・ハサン訳  
*Qosimov Xasan tarjimasi*

## YASHIL «NIVA»

Avvalo, shuni aytishim kerakki, biz tomonning odamlari ancha serandisha keladi. Buning tarixiy ildizlari bor: biz kattalarga – xususan, yoshi ulug‘laru lavozimli shaxslarga ta‘zim qilib o‘rganganmiz. Bir jixatdan qarasangiz – buning yomon tomoni yo‘q: o‘zingdan kattani yoki arbob shaxsni hurmat qilish kerak-da.

Ammo lekin ana shu hurmating oyoq osti bo‘lsa – alam qiladi.

Keyin, e, attang, shu fazilatimiz eskirmadimikan, sal bepardaroq bo‘lsak bo‘lmasmikan, deb o‘ylab qolasan.

Biroq, ont ichib aytaman, gap bunda emas.

Kontsa kontsov, shaxsan menga o‘xshaydigan odam hamma yerda bor. Va men tilga olmoqchi bo‘lgan (sdaqai tilga olish ketsin) «diktator amaldor» ham boshqa oblastlarimizdan topiladi. Pirovardi, yashil «Niva»ning ham urug‘i serob. Qolaversa, o‘sha voqea o‘tgan joy – Oqdovonga o‘xshash dovonlar ham respublikamizda ko‘p.

Xullas, X... ga borayotib edik – yurtga, shahrimizga. Mana shu qizil «Jiguli»damiz: xotanim, o‘g‘lim, qizim.

O‘zim ruldaman.

Yo‘limiz Oqdovondan o‘tishi kerak.

Dovon esa, haligiday bir «diktator»ning sovxoziga qaraydi.

Ilgarilari bu yoqqa tushsa ham, qaytishda ham dovonni chetlab, cho‘l orqali ketardik: u yoq tinch, yo‘l tekis, eng muhimi – «diktator» yo‘q.

Bu gal juda shoshib turgandik: soat 12 da institutda bo‘lishim kerak: darsim bor. So‘ngra ne bir xayol bilan: «Bahor-ku! Bolalar ham bir yayrasin, tomosha qilsin», deb o‘ylagandim.

Ha-ha, dovonning yo‘li yaqin!

Xullas, shahardan chiqdik.

Tog‘ etagida kabob pishiradigan bitta kafe bor. O‘sha yerda to‘xtab, ikki sixdan kabob yedik. Bir piyoladan choy ichdik. Keyin yana yo‘lga tushdik.

Yo‘l deng, tog‘ bag‘irlab ketadi.

Hammayoq yashnagan. Do‘lanalar oppoq gullagan. Na‘matakalar ham rosa ochilgan. Butun dunyoning bulbuli shu yerlarga yig‘ilib kelganday: har shoxda chag‘-chag‘laydi.

Etakda soy bor, narigi betlarda – qor.

Shunday qilib, atrofni tomoshalab, juda xushnud kayfiyatda ketayotib edik. Mashinaning tezligi o‘rtacha – soatiga ellik-oltmish kilometr.

Ketyapmiz-u, ko'nglimning ostida bir vahima bor: «Diktator» uchrab qolmasmikan?»

Siz uni bilmaysiz-da...

Bir burilishdan o'tayotib edik, shunday qiyg'os gullagan olmalar ichidagi bitta yashil «Niva» lop etib chiqdi-yu, oldimizga tushib, sekin keta boshladi.

Qarasam, xuddi o'shaning mashinasi! Mashhur mashina!.. «Diktator direktor» deyapman-u, jindak kelishib olaylik. U kim? O'sha raykom sekretarlarini almashtirib yurganlardan. O'zingiz bilgan o'shanaqa odamni tasavvur qilavering. Ularning bari bir-biriga o'xshash. Amallab mansabga chiqib olgan. Keyin davlat planlarini pripismripis bilan oshirib bajarib, geroy bo'lgan. Keyin yuqori mahkamalardan «aka» topgan, xullas, o'zlariga xon – o'zlariga bek bo'lgan kishilar. Ammo yuraklari qora, odamlarni oyoq uchida ko'rsatadi.

Bizga o'xshagan odam – institutning oddiy o'qituvchisi – ular uchun bir chigirtka: chertsu uchib ketamiz.

Darvoqe, bu odamning zulmi institutga ham yetib borgan, rektorimiz – bechora bir yaxshi odam, – uning nomini eshitsu zirillar edi: uning qishlog'idan yoki qarindoshlaridan bironta bola o'qiyotgan bo'lsa, avvalo o'shaning ko'nglini olish payida, siqilib-o'rtanib yuradi.

Dokladlarda aytilganday juda bosh-boshdoqlik vaqtlari edi-da.

Shunday qilib, yashil «Niva» yo'lga tushib oldi-da, juda sekinlab keta boshladi. Ko'rib turibman: o'shaning mashinasi. Yon-verida antennalar chiqarilgan, demak, ichida radiyosi ham bor. Mashinaning o'zi deng, yap-yangi. Lekin yonbag'ridan chiqib keldi-ku, orqa oynasi loy edi, shuning uchun ichkarida necha kishi o'tirganini ko'rolmadim.

Juda imillab ketyapti.

Biz ham tezlikni kamaytirdik. Nima qilay? O'tib ketaymi? Be, o'sha kuni institutdan dumimni tugdiradi: bunaqa voqealar bo'lganida, ayrimlar ehtiyotsizlik qilib o'tib ketib, baloga yo'liqqanlar.

O'zi, men sizga aytsam, bundaqa o'ziga xon – o'ziga beklar ilgari hamma jamiyatlarda bo'lgan va, qizig'i shundaki, ular bari bir-biriga o'xshagan. Biroq, bizning jamiyatimizda ularning paydo bo'lishi... istisno holdirki, bu kishini juda o'ylatadi...

Biz ham «Niva»ning oyog'iga qarab ketyapmiz.

Bir mahal o'g'lim injiqlik qila boshladi: «Ada o'taylik. O'tib ketaylik!» narigi tekis yo'lda yurishimga o'rgangan-da. Bu yerdagi bahor man-

zaralari uni yana ko'taradi. «Xo'p, – deyman. – Hozir o'tamiz», deyman. Keyin xotinimiz ham harhasha qila boshladi: «Nima bo'ldi sizga? - Munday imillab qoldingiz? Yo'l keng-ku, abgon qila qoling, adasi».

Mening dardim ichimda: institutga tezroq yetib olishim kerak. Bu yurishda, xudo biladi...

Xullas, ketyapmiz. Tavba, deyman. Goho «Niva» to'xtab-to'xtab qoladi. Go'yo «o't, o'taver», deganday. O'tib bo'pman: men ham to'xtatib qolaman.

Ketaverdik, ketaverdik.

Tabiatdan zavq olishning ham rasvosi chiqdi. O'g'il harhasha qiladi, xotin ming'irlyaydi. Qizaloq ham onasining gapini takrorlay boshlaydi.

Ana komediya.

He, gapning qisqasini aytsam, bir yarim yoki ikki soatlar uning orqasidan ergashib yurdim: sal tezlasa tezlayman, sekinlasa-sekinlataman, to'xtasa-to'xtab qolaman.

Barimiz bo'lganimizcha bo'ldik: o'g'il yig'lay boshladi, xotin biz bilan gaplashmay qo'ydi, qizaloq xo'mraygan. O'zim-chi? Menga zaril keptimi shu yurish?

Institutdagi dars ham barbod bo'ldi: dovondan oshgandan keyin ham kamida ikki soat yurishimiz kerak.

Soat o'n ikkiga yaqinlashganda, qo'llarim qaltirab, mashinayam qizib ketib, dovonga chiqishmizga bir kilometr qolgan edi, – «Niva» birdan burilib, chap tarafga o'tdi-da, shunday tik qirga jing'illab chiqib ketdi. Xayol qildim: samolyotning motori o'rnatilgan. Qirdan oshib g'oyib bo'ldi.

Xudoga shukur qilib bolalarni ushlab qo'yib, tezlikni oshirdim. Dovonga chiqdik.

Shunday chetda GAI posti bor. Qarasam, bir inspektor eshikni yopib kelayapti. Ola tayog'ini shunday cho'zdi. To'xtadim. Xursand bo'lgan chog'da yana yurak urishini ko'ring. «Yo'lda biron nojo'ya harakat qildimmi?» deb o'ylayman. Inspektor ham – «diktator»ga qarashli odam-da! Ratsiya orqali bir nima degan bo'lsa, pravaning o'n joyidan teshadi. Bu yo'lni bir umr orzu qilmaydigan bo'laman.

Hujjatlarni olib chiqdim.

– Assalom alaykum!

Serjant chest berdi-da:

– Bularni joyiga sop qo‘ying. Xo‘jayin «juda odobli bola ekan» dedilar, – dedi.

Ana!

Biz bolakay odob yuzasidan u kishini yo‘lda qoldirib o‘tib ketmagan ekanmiz!

Ularning, psixologiyasi-da.

Ha, undan qutulganimga ming bor shukur qilib, yo‘lda davom etdik. Hademay xotinning ham chehrasi ochildi, o‘g‘ilchamiz ham otasini taniganday bo‘ldi, qizaloq ham yig‘idan to‘xtadi. Lekin bizning ishimiz rasvo bo‘lgan edi: dars sriv bo‘ldi.

Oradan ikki kun o‘tgan edi deng, bu yoqdan telefon bo‘lib qoldi. Ha? Tezda yetib keling, Vilnyusga jo‘naysiz, o‘zbek san‘ati tarixidan leksiya o‘qib kelasiz.

Bizning institut bilan ularning instituti orasida shunday – domlarni ayirbosh qilish, bir-birining san‘ati haqida leksiya o‘qish bor edi.

Yana yo‘lga tushdik. Yana dovon orqali o‘tadigan bo‘ldim. Birinchidan vaqtlı yetib borishim kerak. Ikkinchidan, biz xo‘jayinga hiyla yoqib qolgan «odobli bola»miz. Bu gal o‘tgan galgidek qiynalmasmiz. Keyin, «xo‘jayin» har kuni shu yo‘ldan qaytnay-vermas...

Pravilaga amal qilib, dovonga chiqib keldim. Tarasam, GAI posti berk. Inspektor yo‘q. Ha, seni ko‘rganimdan ko‘rmaganim ma‘qul, deb mashinani haydadim.

Nishob yo‘l. Anchagina tezlik bilan tushib ketayapman, lekin butun vujudim ko‘z-quloq: tag‘in bir burilishdan chiib qolsa, bilasizku, unday odam yeb turgan taomini ham unutadi...

Tushib ketayapman. Tinchlik. Bahor avjida. Yana bul-bullar sayrab yotishibdi.

Yo‘lda imoratlari toshdan yasalgan kichkina bir qishloq bor edi, undan o‘tgach, kabob nishi qiladigan kafe keladi. Shu qishloqda yetdim deganda, inspektorni ko‘rib qoldim. U meni ancha narida ekanimda qurgan shekilli, tayog‘ini ko‘tarib turibdi.

Mashina to‘xtatdim. Har ehtimolga hujjatlarni olib chiqdim. Inspektor o‘rnidan jilmadi.

– Assalom alaykum! – deb oldiga bordim.

– Nega tez kelyapsiz? – dedi u. Chest berish qayoq-da! Meni tanimaganday.



– Yo‘g‘-e, ana spidometrni ko‘ring, dedim. Ko‘rib turibman. Za privishenie skorost! Uch so‘m, – dedi. – Xo‘p-xo‘p.

Pulni to‘lab:

– Xo‘jayin yaxshi yuriptilarmi? – dedim.

U aftimga ensasi qotgandek qarab turdi-da:

– Xo‘jayin ke-yetdi, – dedi.

– Qayoqqa?

– Ketadigan joyga... Tushundingmi? Kecha partiyadan o‘chirildi. Bugun, ishdan olindi..

– E, qiziq ish bo‘pti-ku?

– Siz ham yo‘lingizdan qolmang, «odobli bola».

Shu gap menga ta‘sir etib ketdi deng: xuddi o‘sha kuni odobli ekanim uchun dakki berganday edi.

– O‘zlarियam odob masalasida kaminadan qolishmas ekanlar, – dedim.

U bir nima deb po‘ng‘illadi.

Men mashinani minib jo‘nadim, yo‘lda kelayapman. Kulaman deng: «O‘l, – deyman o‘zimga. Shunday bo‘lar ekanku? Nega o‘sha kuni muncha qo‘rqding? Xotining, bolalaring oldida sharmanda bo‘lish? Qancha asabing ketdi? Vang‘illatib o‘tib ketmaysanmi, nomard!» deyman.

Bu odamning partiyadan uchgani, ishdan olinib, qamalganini eshitgandirsiz? Eshitmagan bo‘lsangiz, o‘zingiz bilgan shunday «dik-tator»ni eslang: ularning ham boshiga shunday kun tushdi-ku? Balli... O‘zi bu gal jamiyatimiz uchun piyoda hal edi-da. Ammo bundan keyin ham o‘ylatadigan hol...

Endi bu yog‘ini eshiting! O‘zimni so‘kib, nomarddan-nomardga solib, tabiiy ravishda endi o‘zimni mard chog‘lab ketayotsam, ishonasizmi, kafedan o‘tgan joydagi burilishdan shunday qayrilgan edim, shunday chap tarafdin – suv sizib oqayotgan qir oralig‘idan bitta... yashil «niva» g‘uv etib tushdi-da, yo‘lning cheti, bilan sekin keta boshladi.

Shunday tormoz beribmanki, boshim lobovoyga urildi. Xayol ketgan ekan-da.

«Xudo urdi, inspektor meni aldagan ekan», deb o‘yladim. Yana «jiguli»mni sekin haydab, u bilan izma-iz keta boshladim. Boyagi mardlik qayoqqa ketdi deng?

Tezroq yursa – tezlashaman, sekinlasa – sekin. Qadamiga qarab, ichimni mushuk tatalab, «Yana kechikadigan bo‘ldim-da!» deb borayotib edim, «Niva» birdan to‘xtadi-da, eshigi ochilib, bitta rus bolasi boshini chiqardi.

– Ha? – dedim. Mashinamni sal ilgari haydab, u tomonning oyrasini tushirdim.

– Chyo ti nas presleduesh? – deydi.

Qotib qoldim.

– Izvinite, izvinite, – deb mashinasiga zehn solsam, ancha eski mashina.

O‘tib ketdim. Yana kulaman: «O‘l sen vahimachi! – deyman. – Qo‘rqqanga qo‘shaloq ko‘rinadi, degani shu ekan-da... Dadil bo‘l-e! Odamsan-ku? Anavi «diktator»lar paydo bo‘lishidan oldin ham bor eding-ku? Ota-bobongni esla...»

Ana shunday, qilib, yo‘lda davom etdik. Shaharga kirib keldik.

Lekin bir narsani yashirmay aytaman, hali-hamon shahar ko‘charlidami, ovloq joylardami – yashil «Niva»ni ko‘rsam, yuragim orqamga tortib ketadi.

Nega bunday? Aqlim yetmaydi. Balki buyam o‘ylab ko‘radigan holdir. To‘g‘rimi?

## 息子

「どいて、どいて！（注1）ノハットポルヴオンに道をどいて！」手押し車のそばにいた綿花を計っている子供たちは叫び声に振り向いた。女たちの一人が叫んだ「わあ、助けてあげて」「さあ、走って」と男二人がそっちに向かって走った。

（注2）ウチュオヨクリはかりで綿を計っていたレジ係りニションボユもノートを丸めてポケットに入れて、助けてやろうと思った。綿花畑の高さは腰までであった。綿を入れるエタクはとても大きくニションボユが入ることが出来るくらいの大きさだった。帽子をさかさまに被っていたサリムは「自分が動く（注3）ヒルモン」と走りよった。

「どいて！誰かをひいちゃうぞ！どいて、どいて！」レジ係りニションボユは一足先に行つて<オヨクリヒルモン>を背負った。背をまげて荷物を負っていたアワズは背を伸ばした。

背の低いアワズは綿花畑より一尺しか高くなかった。手の大きさをくらの顔は疲れて、髪は埃で汚れて、額から汗がダラダラ流れていた。傷だらけでまみれの指で額を撫で回した。そして疲れた目でレジ係りをにらみつけた。

「自分で運べるよ、おやじ。」 「ばかやる」とレジ係りはサリムを睨らんで言った。

「ヤギのようにねまわるだけで、自分では助けられないのか、足が折れるから助けられないのか、このとんちき！」

それを聞いてサリムは助ける気持ちができなくなり、のらりくらりとして「誰がこんな大きな荷物を運べと言ったのだい？裏切りものみたいだね」

レジ係りニシヨンボユは綿花いっぱいのエタクをはかりの上に置いた。そしてアワズににっこりと微笑んだ。「とっても力があるね！30キロ以上だぞ、すごいぞ、どうやって背負ったんだい？」ほめられたアワズは少し気恥ずかしくなって、きょろきょろと周りを見回した。「綿花を（注4）ウワットに置いて、自分が溝に下りて背負ったんだ...」と周りの誰かさげんだ。「いつもそうだ。」ともう一人が加えた。

「それは新聞に出たがりたからだ！」と言ってサリムはくすくすと笑った。「二度とこんなことするな、おおい子供！体に悪いぞ」とアワズを優しく叱った。「ここから取ってください、30キロを...」「30キロないぞ」とアワズは文句を言った。

レジ係りニシヨンボユは気にせず、手押し車のそばにいた（注5）テルパックの人にエタクを渡そうとした。アワズは急いで言った。「ちょっと待って、少しずつ分けて運ばない？」「30キロと言ったぞ、30キロだ、他に何が必要なんだ！」「いやっ、違う！」とアワズはきつく言って振り返った。それからアワズは友達のエタクを取って、地面に広げた。そうしたら友達が怒った。「30キロなんてわめかないでくれ、レジ係りが30キロだと言ったぞ！」「他人の綿花は要らないよ！」するとそれを見てニシヨンボユは「変な話だな、ううん、おやじには似ていないな、親父はとてものずるいの、子供はずるくない、正直だ」と言った。綿花を移っているアワズは顔

を上げてニションボユをにらんだ。「おれの親父に関係ないだろ！親父は悪いことはしなかった、お前たちが告げ口したんじゃないか！」それを聞いてニションボユの顔は笑った目から怒った目変わった。アワズに何かを言いかけて、何かのどに詰まったように見えた。「おい皆、突っ立ってないで・・おれたちは見せ物じゃないぞ、よそへ行け。」やじ馬は少し遠おざかった。アワズはエタクを一つづつ秤にかけた。

(注1－ウズベクの文学では力の強い主人公、ここでたとえている)

(注2－三つの足があるはかり)

(注3－皆が摘んできた綿花を預ける所)

(注4－綿花を置けることが出来る土)

(注5－男たちが寒い時被る帽子)

「13！12！6！渡してくれ！」アワズとコゲルはエタクに乗せた。目をいからしていたニションボユは座りながらメモをつけ、テルパックの人を怒鳴った。「綿花はきれいか、確かめろ！もし一つでも木の枝が入っていたら、記録をキャンセルしてしまうぞ。」手押し車のそばにいた人々は、威張るなど言う目で彼を見た。アワズはエタクを取って、綿花畑に戻って行った。

「息子のアワズもあの秘密知っていたのか！」とニションボユの胸がどきどきした。それから、立ち上がって、綿花を踏み潰して、落日の方向へ歩いて行った。茫然自失としていたがアワズの声は聞こえた。それは「親父は悪者ではない、悪いのはお前たちだ」「私が嘘をついたのを知ってるのか？あのがき！」ニションボユは綿花を採取する人たちからは見えないように安心して座った。まだ頭の中で声が響いていた。「嘘をついていたのはお前たち！」

彼は怒って土を叩いた。「お前は何を知っているんだ、このガキ！自分はやりたくなかったんだ。上の命令は絶対。長いものには巻かれる。そういう時代だった・・・」

秋の終わりに近づいていた。畑にはもう何も残っていなかった。でもノルマの半分しか集まっていなかった。二人が溝に沿って歩いていた、土誇りを上げた。(注6)ガジックが二人

の前で急停止した。コルホズ長は車から飛び降りた。千匹羊を飼っているお金持ちのように威張って挨拶は言わず、代わりに悪口を言った。「前にノルマをこなすと言ったけれども、まだ半分しか取れていない。3日後にレポートを出さなければならん、聞いているのか、レポートだぞ！」

その年は綿の種が洪水で何回も流されて、多くの畑が枯れてしまった。また毎年の農薬の使いすぎで土が疲弊していた。それをひげ組長アフマッドの責任にして、責任のがれをしようとコルホズ長はアフマッドをきつく睨らんだ。「綿花だけでなく木の屑を入れても、ノルマは達成しないぞ。あるもの全部を摘んでいるのか」とひげのアフマッドの顔をつぶした。「どこでもいいから摘んで来い！どこでもいいぞ、探して来い、ノルマ達成が一番大切だ！」ひげのアフマッドは目そらしてしまった。彼は上司の命令には逆らえないので、ボスに従って「はい」と言う。でも出来なかったらとてもいやな気持ちになる。二人の腕を引っ張って車から離れた。目をぎらぎらさせて「ここだけの話だぞ」と言った。無視できないような強い調子で「明後日までにレポートを出せ」とも言った。その二人は目をぱちくりさせてボスを見た。「驚くな」とコルホズ長は冷たく言って「他の連中には黙っている。バレないからオッケーだ」

「どうしよう」と言う目でアフマッドはニションボユを見た。ニションボユは目を外らした。「これはずるいしやばいぞ！」とは言わなかった、言えなかった。言うつもりもなかった。ほかの連中とは友だったけれども、結局敵になってしまった。

ニションボユは思った「俺には関係ないよ、お前たちコルホズ長と組長のせいだから、俺は関係ないぞ」と。「あの時逃げなければよかった、あの時本当の気持ちを強く言えばよかったな」と後悔した。「俺たちは悪者になってしまった。コルホズ長を呪ってやる。家が焼けてしまえ。命令したのにコルホズ長は俺たちに責任を押し付けて逃げちゃった。簡単に逃げる事が出来るのと思っているのか、何が起きても漏らすなよ。」「必ず罰に当たるが、どうして善人にやらせたんだ、なんてひどい。死んだら悪人と言う名前しか残らない、皆が悪人だと思ってしまう。」

ニシヨンボユは綿花の木を引き抜いた。木をめちゃめちゃにして、怒って投げ捨てた。ぐちゃぐちゃになった手を地面に押し付けて泥まみれにした。地面に手を押し付けながら、遠い所にいるアワズを目で探しました。そして見つけた。後悔しながらアワズに近づいた。

(注6-50-60年前とても人気があった車の一つ)

ニシヨンボユは痩せ細って骨ばかりの肩のアワズを哀れんで見た。昔はとても元気で活発な男の子だったけれども、今ではお父さんの悪いうわさで陰気な子になってしまった。お父さんの小さな罪が大きな山のように小さな子にのしかかったのだ。ある時、綿花畑の中で塑像のように固まってしまった。いつも立ったまま寝てしまったように見えることもあった。時々ぱっと目を開けてきょろきょろ見回した。悔しさを消すため仕事を一生懸命頑張った。アワズは彼を見て、意に反して微笑んだ。割れた唇で小声で言った。「おじさん、1トン以上です、もうすぐ2トンになります、ごまかさないでね。」おしのように黙ってニシヨンボユは目をそらした。顔を上げることが出来なかった。なぜかと言うと信頼していたアワズにうそを言ったからだ。上からの命令に従わざるを得なかったのだ。もし本当のことを言ったら、子供の望みを壊してしまうからだ。アワズが来て、質問されたらどう答えようかと悩んでいた。

「父は綿花をたくさん買いましたか?」「あの、あまり多くなかった。」「本当のことを言ってください、本当のこと」「本当のことか、本当は2トンぐらい。」

「お前、もっと気楽に考えなさい。もうすぐアフマッドはひげをいじりながら帰ってくる。」「もし2トン綿花を集めてあげたら、許してくれる?」「あ、何?許すよ、じゃなかったら、自分がお父さんのところへ行って連れてきてあげるよ、お前は一生懸命働きなさい。」「集める、もちろん集める。朝早くから働き始めて、授業の後も働ければ、2,3エタックを一杯にすることは難しくない。2トンぐらいはこの子にも簡単なことだ。友だちは1トン以下でもアワズは1トン以上集めるよ。もう1トン集めたら丁度2トンになる。2トン集めて自分の所

に来てお父さんを連れて来て言われたらどうしよう?」固くなった綿花のからで指が傷いた。葉を落とすためにまいた農薬で、目から涙が出てきました。顔を下に向けて綿花を摘んで顔は上げなかった。荒っぽく綿花を摘んでいた後ろのサリムに、女たちも同じように笑っていました。他のグループのお手伝いが歌を歌い始めました。でも小さな声なのであまり良く聞こえなかったけれども・・・。アワズはまるで自分とは関係がないように顔を上げないで働いていた。「早くお父さんのための綿花2トンならないか、1日30キロずつ35日で1トンになる、もし、1日50キロずつ20日で...」と思った。

今はちょうど綿花のシーズンだから、エタクは必要だ、時間はその時間だ。腰が痛くなったら横になると思った。アワズは腰を伸ばして、またつみ始めた。「私は二人分をつまなければならぬ、早くお父さんが帰ってくるように。。多分お母さんがなきくれて病気になるかもしれない。サリムのような人々は私たちを馬鹿にすることが出来ない。背中が痛くてもエタクが一杯になるまで頑張るぞ。あの気まではほんのわずかだ。あそこまでやったら休もう。気持ちのいいばしょでらくになろう」。アワズはその木に達して、エタクを首から外して、尻をついた。腰を伸ばそう下けれども、とても痛くて頭をぼおっとした。席でうとうとした。腰の痛さが楽になって、青空を仰ぎ見た。すると、お父さんの声が聞こえてきた。「アワズ、大人になったね、もうお母さんを怒らせないで」もう一度目を閉じたらお父さんの顔が見えた。まるで誰かに押さえ込まれているようなお父さんが見えた。その回りをお母さんが何をしましよるかとお父さんに聞いていた。「私たちはだまされてとても不幸になったね、お父さん、誰がこんな風刺をしたんだい?」「おい、それをいうな」「いやだよ、低い屋根に登って、みんなに聞こえるように話してやる、どうしてとめるだい、あなたはコルホーズ長のようにたくさん家を持っているのかい?ピカピカしている車をもっているのかい?私たち人間はともかく、ねずみでさえ住んでいないじゃないか、この2年牛舎には屋根もないじゃないか。畑仕事しかしてこなかったんだから...もし

かしたら私に隠れてお金をためているんじゃないかい！」「そう怒るなよ、俺は馬鹿だから。こんなことになるなんてしかなかったよ！」「あなたはめくらじゃないよ、あなたはしゃべれるんだよ！あの時舌が動かなかったかい？誰かに脅されていたのかい？誰に脅されたの？面と向かってコルホーズ長に言いなさいよ、『みんなにしらせてしまうぞ』と」「ばれたらコルホーズ長はもっと大変だ、とてもかわいそうなんだ」「私はコルホーズ長を呪ってやる、死んでしまえば、楽になるだろうから、だれがコルホーズ長にそないよ、だから政府をごまかして、メダルをもらって金持ちの生活ができると思ったんだ、コルホーズ長がそそのかして俺に悪いことをやらせたと言いに話さない！」「皆に話すけれども、自分自身はどうしたらいいの？皆が私が綿花のやみ商人だと」「綿花を買って、自分では使わないでノルマの中に入れて出します。ニシヨンボユもやったんだよ、だけれどもニシヨンボユは何もなかったよ。」「私は罪をおった。ニシヨンボユは足にすがって俺に頼んだ。『二人とも罪を負ったら大変だ。俺には6人の子供がいるんだよ』と」「あんたは独身じゃないよ、4人も子供がいてさあ、彼ら達があんたをそそのかして責任を押し付けたんだよ。お母さんはワンワンと泣き始めた。そういう思いがアワズの目に涙をためさせた。あふれた涙がお父さんとお母さんの姿を隠してしまった。涙が頬をつたって砂の上に落ちた。

「お前たちがごまかした...」とアワズが叫んでニシヨンボユにつかみかからんばかりに近づいてくるようにニシヨンボユは想像した。黄ばんだ帽子をかぶって、灰色の綿の上着を着たひげ親父が数歩離れたところに立っていた。その親父は目を向いてニシヨンボユを見た。「あ、信じられない！アフマッドですか！」とニシヨンボユはのけぞった。友達と親しげにニシヨンボユは近づいた。周りには誰もいなかった。レジ係りニシヨンボユは腕で立ち上がった。「アフマッドなんてはいと言って罪を認めたんない？卑怯な、裏切り者となぜ俺のことを言わなかったんない？足にすがり付いて、俺には6人の子供がいる、俺の罪を黙っていてくれ、と頼んだから黙っていたのかい、彼

を哀れんだからかい？俺に？俺はいい人じゃない、俺は悪人だよ。コルホーズ長がアフマッドになすり付けた時俺が善人だったら、そうじゃなあいといたけれども、走破しなかった。俺は裏切り者だ！あなたを悪人にしてしまった、じじゅんがローヤーでしんでしまったほうがよかったのに。アフマッド、皆が私をレプラ（ハンセン病）と同じように嫌っている。人は近づいてこない。しっかりアワズを見ることは出来ない。アワズが嫌がるから...」毎日50キロつんだら、早く終わる、それからお母さんから褒められる。「一任前になったね、お父さんはいないけれども、お父さんと同じように私を守ってくれる、嬉しいね」と母は思うに違いない。「お母さん、いつもしくしくと泣かないでね、お父さんのところへ行ってつれて帰りましょう」母と子二人は着飾って出かけた。お父さんはどうやって迎えるのか、全然会っていないからお父さんはどんな気持ちになるかな...」アワズの目の前にまたお父さんのニコニコしている顔が現れた。「お父ちゃん、お父ちゃん」手足の力が抜けて座り込んでしまった。エタックの綿花を顔につけて、ワーんワーんと泣いた。「早く2トン積んでお父さんのところに飛んで行けたらな...」アワズはお父さんの首に手を巻きつけていたいひげにほうづりして「お父ちゃん、お父ちゃん帰るよ」と言ったら...

「お父ちゃん、僕から離れないで、お父ちゃん行かないで」「アワズよー、息子よー」アフマッド組長を紐でいわれて鬼が黒い森にひきづって行った。彼たちの後ろから走っていったアワズは石につまづいて、転んだ。「お父ちゃん...」それからアワズは夢から目が覚めた。すっと立って窓のそばに行った。まだ雨はやんではいなかった、黄ばんだ木の葉が濡れていた。

「2日間やみそうもない」と忌々しげにアワズは言った。たった1時間でもやんだら嬉しいのに、10キロ残してしまったね！」と悔やんだ。アワズはそのまま立って、素早く着始めた。早朝からいた牛子やからその時母親が出てきた「何で、こんなにたくさん雨が降るんだろう。空のどこかが破れてしまったかね！」と言いながら濡れたスカーフを脱いだ。「どこへ行くのかい？」とアワズに聞いた。アワズは混乱した。今まで自分のプ

ランをお母さんに隠してきたから。プランが出来上がったらきつとお母さんを喜ばせられるだろうと思った。だから嘘をついてしまった。「コジムから本を借りて来ます」「夢で本を見たんだね。雨が小降りになるまで待ちなさい、本は逃げやしないよ!」「すぐ帰ってくるから、許してください...」お母さんはしょうがない子ねとため息をついた。「道草を食わずに早く帰ってきなさい、お父さんのちゃんちゃんこを着てください」「エタックがあるよ」お母さんは何も言わなかった。アワズは綿花を入れるエタックを頭にしておいた。道はぐちゃぐちゃしていた。綿花畑には犬一匹もいなかった。綿花の木ははだかになるのを嫌がって綿花をばなそうとはしなかった。アワズは綿花の入り所に向かった。ブーツはひざまで汚れてしまった。他の列を見て、濡れた所を探した。あまりはたらくたくなかったけれども目標の木を決めた。「綿花は濡れて、氷のように冷たかった。濡れた綿花は重い、重ければ重いほどいいと自分に言い聞かせた。10キロなんてたいしたことない」とアワズはつみ始めた。同じリズムで雨が降り続いた。虫の羽ばたきが響いた。すぐにアワズの着物は濡れてしまった。体が濡れて肩が震えて、顎ががちがち震えだした。上までぶぶ濡れになってブーツが重くなり始めた。はりついた泥を木にこすり付けて、また摘み始めた。エタックもだんだん重くなった。綿花は20キロ以上になったかと思ったけれどもほかの場所の探すことにした。アワズは綿花畑の端に行ってエタックを外して、ブーツを溝で洗った。水がとても冷たかった。歯ががちがちした。まるで、目の前に沼があって、沈んでしまうそうだった。雨に当たらないように綿花を木の下で広げて、また摘みに行った。でも、どんなに頑張っても指は凍り付いていった。殻から綿花を積み出す力もなかった。雨が降り続いていた...アワズはつかり果てて綿花畑から外に出た。広げた綿花をエタックに入れて、滑りながら小屋に運んだ。大きな小屋には誰に誰もいなかった。その小屋にはひざの高さまで綿花が広げられていた。厚いちゃんちゃんこを着ていた三人の男たちが端で横になってしゃべっていた。「雨が心を暗くした」といってニシヨンボユはちゃんちゃんこ

を体に巻きつけた。「10日間は雨が降らないでほしい。その後は石が降ってもいいけれどね!」とトラクターの運転手が言った。ニシヨンボユは嫌な顔をして欠伸した。「これからはこんな天気が続いていやになるな」「俺たちいつ嫌じゃなかったんだい!」と加わった小屋のガードマン。春はいつもごうや、ひょうが降って真夏で鍬で土を掘るのは大変だ。あきはこんなふうで休むことも出来ない。「今週は雨が降らなかつたらよかったのにな」と言いながら運転手はアワズに気がついた。「おい、あの子供を見てみろ!」とアワズを指差した。泥から出てきたのか!だれのこどもだ?」「アフマッドの子供だ!」と子供を知っていたガードマンはびっくりして言った。ニシヨンボユの顔色が変わった。「アワズ!」ととっさに立ち上がった。「どこから来たんだ?」アワズはその男たちからちょっと手前で立ち止まった。上着から泥が滴った。「こんな天気の中で何してなんだ?」と大声でニシヨンボユは聞いた。「肩の上にあるのは何だ?」寒さで震えながらめ、め、綿花と答えた。「エー!綿花か?」とニシヨンボユは驚いた。「どこで摘んだんだ?」。それを聞いていた運転手は隣に目で聞いた。「綿花をどこから持ってきた?」「いいえ、僕は摘んできました」「なに?」と言って運転手は立ち上がった。「どんな悪いやつがお前に積んで来いと言ったんだい?子供の綿花はコルホーズのノルマにはほとんど関係ないぞ。肩から下ろせ!」アワズは運転手に採られるんじゃないかと思って後ろに下がってきた。そしてニシヨンボユを見た。ニシヨンボユは自分の秘密がばれると感じて運転手に耳打ちをした。それを聞いて運転手は気分が収まった。「かわいそうな子だね」と誰はアワズを見つめて、ニシヨンボユに言った。運転手は凍りついたニシヨンボユに言った。「量ってやってくれ!」と。「はい、はい」とニシヨンボユは答えてアワズに近づいた。でも、アワズに悪いことをしたと感じてまた気分が悪くなった。3日前アワズから10キロ足りない、親父、と言われたことを思い出したら...そしてニシヨンボユは一つの悪い考えがひらめいた。子供の肩の綿花10キロないはずだ、10キロより少ないだろうと。アワズは寒くてごほんごほん



とせきをした。「早くエタックを肩から下ろせ！」と強い声で運転手は言った。そして本当に怒った。ニシヨンボユは優しくなって、「いいよ、いいよ、そこに置きなさい。10キロあれば10キロと記録してあげるよ」とにこにこした。「お前は悪いやつ！」と運転手は彼を怒鳴った。それから運転手は子供のところに行って肩から綿花を撮って、地面に広げてしまった。「お前は正直だから、この嘘つきの話を信じてはだめだぞ」アワズはそれを聞いて驚いた。「これはどんな意味か」という目でニシヨンボユを見た。「親父、この話は本当？僕をだましたの？」「いや、違う」と子供の話を中断した。「おいおい、まだ100キロたりないぞ、いや200キロたりないぞ」それを聞いたアワズは震えが止まった。「どうしてそんなこと言うの？ちょうど2トンだよ！」ニシヨンボユはきょろきょろして誰だ助けてくれないかと周りを見回した。「悪人、ケダモノ！」と言って運転手は彼を殴るふりをした。「お前が子のこのお父さんをいなくなさせたんだ、この子にどんな罪があるの？この子をびっ子にさせたいのか？」。黙っていたニシヨンボユはおこしを爆発させた。「俺を殴りたいのか、俺のどこでも殴れ！」と胸を出した。「どうして殴らないのだ！」それを見て運転手は彼手でおいはらって、行ってしまった。ニシヨンボユ子供のようにアワズに「ごめんね、ごめんね」と謝った。「悪いことしたね、ごめんね、おじさんのことを殴って、殴って！」「けだもの！」と言ってアワズには嘘を疲れたことを全部わかった。「お父ちゃんに言いつけてやる、お父ちゃん、お父ちゃん！」と言って大泣きしながら誰もいないところへ雨の中を走って言った...

カプロヴァ・グルミラ訳  
*Kabulova Gulmira tarjimasi*



## O'G'IL

*Besabab oyoqqa tikan kirmas.*  
Xalq maqoli.

– Po'sht! No'xatpolvonga yo'l bo'shatinglar! Po'sht!!!

Telejka yonida uymalashib paxta o'lchatayotgan bolalar ovoz kelgan tomonga qaradilar. Qizlarning biri «Vuy! Chopinglar, ko'tarishvoringlar!» deb yubordi. Bolalardan ikkitasi shu tomonga uchishdi. Uch oyoqli torozida paxta tortayotgan Nishonboy tabelchi ham daftarini cho'ntagiga buklab solib, yordamga intildi.

Bel baravar g'o'za shoxlari uchida paxta to'la katta etak go'yo o'zi yurib kelayotgandek edi. Shapkasini teskari kiyib olgan Salim darov «o'zi yurar xirmon»ni g'ir aylanib, dik-dik sakrardi:

– Qochinglar! Bosib ketadi! Po'-o'sht!..

Nishonboy tabelchi ildamroq borib, «oyoqish xirmon»ni yelkasi-ga dast ko'tarib oldi. Yuk tagida bukilib kelayotgan Avaz qaddini rostladi: bo'yi g'o'zapoyadan atigi bir qarich baland! Shapaloqday yuzi bug'riqqan, sochlari changga belangan, peshonasidan reza-reza ter quyilardi. U yorilgan barmoqlari bilan bilagidagi qontalash izlarni avaylab siladi. Ich-ichiga botgan horg'in ko'zlar Nishonboy tabelchiga noxush tikildi:

– O'zim ko'tarardim-u, amaki...

– Tentak! – Nishonboy tabelchi Salim darozga yomon o'qraydi. – Echkiga o'xshab dikonglagancha jo'rangga qarashvorsang, beling sinadimi, xumpar!

Hafsalasi pir bo'lgan Salim to'ng'illadi:

– Birov o'nta shuncha ko'tar debdimi...

– G'irt bema'ni bola ekansan! – dedi Nishonboy tabelchi paxta to'la etakni toroziga ilib. Keyin Avazga qarab jilmaydi. – Ob-bo shovvoz-yey! O'ttiz kilodanam ko'p-ku, buning! Qoyil-e! Qanday orqalading?

Avaz gunohkorona iljayib, yer ostidan bolalarga qaradi.

– Paxtani uvatga qo'ygan-da, o'zi ariqqa tushib ko'targan, – chuvilladi to'dadan kimdir. – Bu doim shunaqa qiladi.

– Gazetaga chiqmoqchi, gazetaga! – xiringladi Salim daroz.

– Bunaqa qilma ikkinchi. Mayib bo'p qolasan-ku, bolam. – Avazni koyigan bo'ldi Nishonboy tabelchi. – OI, o'ttiz kilo.

Uncha chiqmaydi, – e'tiroz bildirdi Avaz.

Nishonboy tabelchi parvo ham qilmay, etakni telejkadagi telpakli kishiga uzatmoqchi edi. Avaz shoshilib:

– To'xtab turing, bo'lib tortamiz, – dedi.

– O'ttiz kilo dedimmi, o'ttiz-da, tag'in nima kerak senga!

– Yo'q! – dedi Avaz qat'iy va ortiga o'girildi. – Qodir fartug'ingni berib tur.

Avaz o'rtog'ining fartug'ini olib, yerga to'shadi.

Qodirning jahli chiqdi.

– G'ajirlik qilma, o'ttiz kilo deyapti-ku, Nishonboy aka!

– Birovning paxtasi kerakmas menga!

Nishonboy tabelchi avval o'ngaysizlandi, keyin ishshayib, istehzo bilan: – Otasiga o'xshamaydi bu. Qip-qizil haqiqatparast, – dedi.

Paxtani bir etakdan ikkinchisiga solayotgan Avaz yoshini ilkis ko'tarib, Nishonboy tabelchiga jahl bilan qaradi.

– Otamni qo'shmang! U kishini sizlar aldagansizlar, sizlar!..

Nishonboy tabelchining kulib turgan ko'zlari olayib ketdi. Avazga nimadir demoqchi bo'ldi-yu, tomog'iga bir narsa taqilganday alanini ichiga yutdi.

– Qoqqan qoziqday baqrayib turishini qara bularning! Maymun o'ynatyapmanmi senlarga! Jo'na dalaga hammang!

Tomoshatalab bolalar sekin tarqala boshladilar.

Avaz etaklarini birin-ketin taroziga ildi.

– O'n uch! O'n ikki! Ol, uzat!

Avaz bilan Qodir etaklarni telejkaga uzatishdi. Qovog'i osilib ketgan Nishonboy tabelchi cho'nqayib o'tirgancha, daftariga bir nimalarni yozarkan, telpakli kishiga o'shqirdi:

– Paxtasi tozami o'zi, qara-chi. Agar bitta has bo'lsayam hammasini o'chirib tashlayman!

Telejkadagi odam, endi kuching shunga yetdimi, deganday tabelchiga ijirg'anib qaradi.

Avaz etagini olib, paykal oralab ketdi.

Nishonboy tabelchining ichiga o't tushganday, nafasi bo'g'ziga tiqilib, og'ir-og'ir entikdi. So'ngra o'mnidan turdi-da, g'o'zalarni bosib-yanchib, kunbotar tomon ketaverdi. Shu topda uning ko'ziga hech narsa ko'rinmas, qulog'i ostida faqat bir hayqiriq aks-sado berardi.

«Sizlar aldagansizlar, sizlar!..»

«Men aldaganmishman! Tirrancha!»

Nishonboy tabelchi terimchilar ko'zidan ancha uzoqlashgach, uvatga behol cho'kdi.

«... aldagansizlar! Sizlar!»

Nishonboy alam bilan zax yerga bir musht urdi.

«Sen nimani bilarding, bola! Atayin qipmanmi men? Ixtiyor o'zimdagi ekanmi? Zamona-zo'rniki, kattalarning aytgani-aytgan, degani-degan edi u paytlar...»

... Kuz adoqlab qolgan, paxtazor ship-shiydam, plan esa hali yarim belda.

Ikkovi ariq yoqalab borishayotgandi. Bir «Gazik» changitib kelib, ularning ro'parasida taqqa to'xtadi. Kolxoz raisi mashinadan irg'ib tushdi.

– Ming kuyli boyday kerilib yurishini qara bularni! dedi – u salom-alik o'rniga qo'rslik bilan.

– To'ydan burun nog'ora qoqishga ustasanlar-a! O'lcha o'lchaga kelganda surma ichgan xo'rozday daming chiqmaydi bittangniyam. Men uch kundan keyin raport berishim kerak, eshityapsanmi, raport! – Rais hammasiga – sel tufayli chigit qayta-qayta ekilgani-yu, qanchqa maydondagi g'o'za saratonda qovjirab qolganigayam, har yil dori sepilaverib, yerning jonida jon qolmaganigayam yolg'iz shu odam – borigadir Ahmad mo'ylov aybdordek, ko'zlarini chaqchaytirib, qo'lini unga paxsa qildi. – G'o'zyapoyani qo'shib topshirgandayam planing to'lmaydi-ku, bu turishda, a?

– Borini bitta qo'ymay olyapmiz, rais aka, – dedi Ahmad mo'ylov ezilib. – Lekin...

– Bor-yo'g'i bilan ishim yo'q! Yerdan topasanmi, osmondami – plan kerak menga, plan!

Ahmad mo'ylov chetga qaradi. Boshliqlarga gap qaytarish odati yo'q edi uning. Kattalar nima desa «xo'p» derdi-yu, keyin yog'ochni o'z ichidagi qurt yeydi, deganday, ich etini yeb yuraverardi.

Rais ikkovining tirsagidan olib, mashinadan nariroqda yetakladi.

– Gap shu yerda – uchchovimizning o'rtamizda qolsin, – dedi u past lekin inkor etib bo'lmaydigan ohangda. -- Indini raport berasizlar.

Ular yalt etib, baravariga raisga qarashdi.

– Yuraklaring yorilmasin, – dedi rais sovuqqonlik bilan, – punktdagilarga aytib qo'yanman. Hammasi mixday bo'ladi.

Ahmad «nima qildik» deganday unga – Nishon boyga termildi. Nishonboy ko‘zlarini olib qochdi. «Bu g‘irromlik! Oxiri voy bo‘ladi», demadi. Deyolmadi. Degisi kelmadi. Do‘st bo‘la turib dushinanning yo‘lini tutdi. «Menga nima, – dedi ichida, – javobgar senlar biring rais, biring brigadir. Biz kichkina odam». Eh... o‘sha payt o‘zini chetga tortmaganda, dilidagimi yashirmaganda, ikkovi oyoq tirab olganda... Uying kuyg‘ur rais. Qilg‘ilini qildi-yu, imonini sotdi. Bo‘yniga olmadi. Topding-a, nomard! Hamirdan qil sug‘urganday osongina qutulib ketaman, deb o‘ylagansan-da. Ahmoq oyog‘idan ilinar, mo‘tambir tovonidan. Jazangniku tortayapsan, bir begunohga jabr qilganing nimasi? Bu dunyo o‘tar-ketar, yuzi qoralar qolar. Mening ikki betim damdora bo‘ldi oldingda, Axmad...

Nishonboy tabelchi o‘tirgan joyida uzalib, hom ko‘sakni yulib oldi. Majaqlab ezg‘iladi-da, jahl bilan otib yubordi. Shilimshiq barmoqlarini nam tuproqqa ishqadi. Ishqay turib, xayolan olisdagi terimchilar orasidan Avazni qidirdi. Topdi. Yuragi betlamayroq yaqiniga bordi. Suyaklari turtib chiqqan oriq yelkalarga, g‘o‘za shoxlari tilgan ozg‘in qo‘llarga achinib qarab qoldi. Qanday sho‘h olov bola edi-ya! Yerga ursa osmonga sapchirdi. Otasi haqidagi mish-mishlar sindirdi uni, otasining tirnoqday gunohi tog‘ bo‘lib bosdi bola bechorani. U ba‘zan paykal o‘rtasida haykalday qotib qoladi. Tik oyoqda uxlab qoldimi, deb o‘ylaysan kishi. So‘ng favqulodda uyg‘onib ketgandek atrofga alanglaganini, alamini itdan olmoqchiday, terimga zo‘r berganini ko‘rganingda yuraklaring ezilib ketadi.

Avaz unga qarab, zo‘rg‘a iljayadi. Po‘rsildoq boylab yorilgan lablar olista pichirlaydi: «Bir tonnadan oshirdim, amaki, hademay ikki tonna bo‘ladi. Aldamaysiz-a?

Nishonboy jim, Nishonboy soqov. Nigohini olib qochadi. Qarolmaydi javdiragan bu qora ko‘zlarga. Qanday qarasin, qanday? Kap-katta odam chigitday bolani aldab o‘tirgan bo‘lsa-yu... Aldamay bo‘lmasdi-da, axir. Majbur edi, majbur. Rostini aytasang bolaning umidlari oynaday chil-chil sinardi-da. Oldingga kelib, sengayam o‘sha savollarni bersin-chi, qani, nima derkansan?

«Ko‘p paxta sotvolganmida otam?»

«Haligi – unchamas».

«Rostini ayting, rostini?»

«Rostimi, rosti... shu ikki tonnacha... Sen ko‘pam hafa bo‘la-verma, o‘g‘lim, Ahmad jo‘ram hademay mo‘ylovini burab qaytib keladi».

«O'sha ikki tonnani terib bersam, otamni qo'yvorishadimi?»

«A?.. Labbay... Qo'yvoradi, nimaga qo'yvormasakan, qo'ymasa, o'zim borib opkelaman. Sen g'ayrat qilib teraver».

Teradi! Ko'rasan, albatta teradi bu bola. Saharlab dalaga chiqadigan, dars mahaligacha ikki-uch etakni to'ldirib, darsdan keyin ko'r shomga hovur paykaldan chiqmaydigan bolaga ikki tonna nima bo'пти! Jo'ralariniki bir tonnaga yetguncha, uniki bir tonnadan oshdi. Yana bir tonna tersa... Teradi! Roppa-rosa ikki tonna qiladi-da, oldingga keladi: «Mana, aytganingizday bo'ldi. Otamni olib keling endi». Shunda nima deyman, nima deyman-a?..

Qovjiragan chanoqlar barmoqlariga tikanday qadaladi. Bargni to'kish uchun sepilgan dori isidan dimog'i achishib, ko'zi yoshlanadi. G'o'za shoxlari qo'llarini, yuzlarini mushukday timdalaydi. Avaz boshini ko'tarmaydi. Orqaroqda cho'qilab-cho'qilab paxta terayotgan Salim daroz allanimalar deb hirlinglaydi, qizlar unga qo'shilib hihirlashadi. Ahyon-ahyonda o'qariqning narigi tomonidan hasharchi-larning uzuq-yuluq xirgoyisi quloqqa chalinadi. Avaz go'yo dunyodan behabarday egatdan boshini ko'tarmaydi. O'zicha qachon otasining paxtasi ikki tonna bo'lishini hisob-kitob qiladi. O'ttiz kilodan tersa o'ttiz besh kunda. Agar ellikdan... yigirma kunda! Hozir paxta ko'pirib ochilib yotgan payt. Hademay egatlar ola-quroq bo'lib qoladi. Vaqt – shu vaqt.

«Belning chimillab og'rishini. Hadeb og'riyversam, chidolmay yotib qoladi, deb o'ylaydi-da. Ko'ramiz, qani, kim yotib qolarkan?»

Avaz umganini hiyol ko'tarib, belini bir oz uqaladi-da, engashib, yana teraverdi. «Biz ikki kishi uchun terishimiz kerak, ikki kishi uchun bilding? Otamni tezroq opkelishimiz kerak. Bo'lmasa onam yig'layverib kasal 63t qoladi. Salim darozga o'xshaganlar bizni bo'lar-bo'lmasga kalaka qilavermaydi keyin. Seni qara-yu, ming og'riganing bilan, biribir etagim to'lmaguncha dam yo'q. Yaxshisi chida, jo'ra, hech bo'lmasa huv anavi g'o'zagacha chidab tur, keyin dam olamiz. Jo'yaga cho'zilib yotaman, mazza qilasan». Avaz o'sha – guj-guj chanoqlarni ko'tarolmay egilib qolgan g'o'zaga yetgach, cho'kkaladi, bo'yniga sim arqonday botayotgan etak bog'ichlarini yechdi. Qaddini rostlamoqchi bo'lganda beli chunonam zirqirab og'ridiki, ko'zlari tinib, gandraklagancho o'tirib qoldi. Oyoqlarini uzatib, jo'yakka ohista cho'zildi. Tagida qolgan hazonlar shitirlab ezildi. Bel og'rigi pasaygach, ko'm-ko'k osmonga tikilib, roxatlanib yotdi. Shu payt qulog'i ostida otasining ovozi eshitildi.

«O'g'lim, endi katta yigit bo'p qolding. Qaytib kelgunimcha enangni hafa qilib qo'ymagin, xo'pmi?»

Bola xo'rsinib, ko'zlarini yumgan edi, yana otasi ko'rindi: xuddi birov yelkasidan bosayotganday supa labida g'ussaga botib o'tiribdi. Otasi tevaragida izillab aylanayotgan ayol-onasi.

«Peshonam shunchalar sho'rmdidi. Endi nima qilaman!»

«Baraka topkur, bo'ldi qil, bo'ldi...»

«Bo'lmaydi! Tomga chiqib, qishloqni boshimga ko'taraman. Nimaga bo'ldi qilarkanman! Xo'sh?! Siz raisga o'xshab qo'sha-qo'sha hovli sopsizmi, yaraqlatib moshin minibsizmi. Uyingizni ahvoliga bir qarang, odam tugul ko'rsichqon ham turmaydi bu choldevorda. Ikki yildan beri bitta og'ilning ustini yopolmaysiz, dalam-dalam, deb yoki menga bildirmay ko'mib qo'ygan tillangiz bormi, a?!...»

«Yaramga juvoldiz urmagin, baraka topkur. Ko'r ekanman, kar ekanman, uchiga chiqqan ahmoq ekanman. Nima qilay bu so'qir ko'zlar kech ochilgan bo'lsa!»

«Kardirsiz, ko'rdirsiz, soqovmasdirlsiz axir! Tilingizga tirsak chiqmagandir? Nimaga indamaysiz? Nimadan qo'rqasiz? Kimdan qo'rqasiz? Shartta-shartta basharasiga aytib, sharmanda-yu, sharmisor qilib tashlamaysizmi o'sha kazzobni!»

«Raisgayam oson tutma. Uning boshiga tegadigan tosh menikidan o'n barobar, yuz barobar katta. Odamni ichi achiydi bechoraga».

«Bechora bo'lmay suyagi lahadda chirisin iloyim! Birov majbur qiptimi uni? Hukumatning ko'zi yo'q, uni aldab, orden taqib, gurillab yuraveraman, deb o'ylagan-da, uying quyg'ur. Meni yo'ldan urgan o'sha qirdqes bo'ladi, demaysizmi so'raganlarga».

«So'raganlarga-ku, aytarman-a, lekin, mana bu yerga nima deyman, mana bu yerga!»

Otasi ko'kragiga gurs-gurs urdi.

«Buning so'rovidan qochib qaerga boraman. Paxtafurushligimni butun el biladi-ku!»

«Sotvolgan bo'lsangiz, uyingizga opkepsizmi. Ombordan olib, omborga bergansiz-da. Ana, Nishonboy oshnangiz yuribdi-ku, hech nima bilmaganday taralla-bedod qilib. Doimo yoningizda edilar-ku. Endi u kishi musichayu bezor bo'p qoptilarmi?»

«Men bo'ynimga oldim gunohini. Oyog'imni quchoqlab, yotib yig'ladi. Ikkovimiz ham juvonmarg bo'lmaylik, deb olti bolasini o'rtaga qo'ydi».

«Siz so‘qqaboshsizda, a?! Oila yo‘q sizda. To‘rt bolangiz osmondan tushgan. Yo‘ldan urishga urib... qirilib ketkurlar...»

Onasi yengini yuziga bosgancha xo‘ngrab yubordi...

Avazning ko‘z oldini oppoq qalqachalar qopladi. Halqalar quyushib, otasi bilan onasini ko‘mib yubordi. Kipriklari orasidan sizib chiqqan yosh chakkasida uzun iz qoldirib, tuproqqa tōmdi.

«Sizlar aldagansizlar! Sizlar!!!» Avaz kela solib yoqasidan oladiganday, Nishonboy tabelchi sapchib turib ketdi. Boshiga uvadasi chiqib ketgan sariq telpak, engiga kulrang paxtalik kiygan mo‘ylovli kishi besh-olti qadamcha narida unga baqrayib qarab turardi.

– Yo, tavba! Ahmadmisan?! – Nishonboy tabelchi cho‘chib o‘zini orqaga oldi. – Ahmad, jo‘rajonim... – tislani bōrib, g‘o‘zapoyalar ustiga o‘tirib qoldi. – Ahmad... Ahmad!..

Atrofdā hech kim yo‘q edi. Nishonboy tabelchi tirsaklariga tayanib, qaddini rostladi. «Ahmad... nega unday qilding, Ahmad?.. Nega indamay bo‘yninga olding, yo‘q demading? Qo‘rqoq, xoin deb tupurmaysanmi?! Oyog‘ingga yiqilib, olti bolamni o‘rtaga qo‘yib yolvorganimga rahming keldimi? Menga-ya! Men... men odammanmi o‘zi? Odam bo‘lsam, bo‘yningga ayb taqashganda tilimni tishlab, ishqilib otimni aytib qo‘ymasin-da, deb yuragimni hovuchlab o‘tirarmidim. Ahmad?.. Munofiqman, men, munofiq! Qamalib yotganim, o‘lганim yaxshi edi bu kunimdan, Ahmad... El biladi kimligimni, maxovga duch kelganday jirkanadi mendan. Birovga botinib qarolmayman. Xatto shu Avazingni ko‘ziga tik qarashdan qo‘rqaman, Ahmad!...»

«Har kuni ellikdan tersam... Tezroq ikki tonna bo‘la qolsaydi, onamdan suyunchi olardim. Eshitib, rosa quvonardi onajonim. Yigit bo‘p qolgan bolamdan o‘rgilayin, otasining yo‘ligini bildirmayotgan polvonimdan aylanayin... Yig‘layvermang hadeb, yuring endi, otamni olib kelaylik...»

Ikkovi bashang kiyinib yo‘lga tushardi. Otasi qanday kutib olar-kin-a? Ko‘rishmaganlarigayam, eh-he, qancha bo‘ldi.

Bolaning ko‘z oldida yana otasi, otasining kulib turgan chehrasi paydo bo‘ldi. «Ota, otajonim...» Oyoq-qo‘li bo‘shashib, o‘tirib qoldi. Etigidagi paxtaga yuzini bosib, unsiz o‘ksib-o‘ksib yig‘ladi...

Eh!..qani endi shu payt tergani ikki tonna bo‘la qolsa-yu, otasining yoniga qushday uchsa. Bo‘yniga osilib, tikonday soqol bosgan yuzlariga yuzini suykab: «Ketdik, ota endi hecham unaqa qilmaylik, ota», – desa.

«Ota, ketmang, otajon!»

«Avazjon, bolam!..»

Ahmad brigadirmi arqonlab olgan shoxdor devlar uni gapirgani qo‘ymay qop-qorong‘i changalzorga sudrab ketdi. Ularning orqasidan chopib borayotgan Avaz qoqilib, butazorga yuztuban yiqildi.

«Ota»!

Avaz cho‘chib uyg‘onib ketdi. Irg‘ab turib deraza yoniga bordi. Yomg‘ir hanuz tinmagan, sarg‘imtir yaproqlari jiqqa ho‘l olcha suna pastida mungayib turardi. «Ikki kundan beri tinmaydi-ya, – alam bilan pichirladi Avaz. – Bir soatgina yog‘may tursa nima qilarkin? O‘n kilo, bor-yo‘g‘i o‘n kilogina qoluvdi-ya!..»

Avaz shu alpozda birpas serrayib turdi-da, keyin chaqqon kiyina boshladi. Shu payt azondan molxonada kuymanib yurgan onasi kirib keldi.

– Nima balo, osmon ulgurning tagi teshilib ketdimi deyman! – dedi u shalabbo ro‘molini yecha turib.

– Ha, senga yo‘l bo‘lsin? – so‘radi keyin otlanib turgan Avazdan.

Bola duduqlanib qoldi. U shu choqqacha rejalarini onasidan yashirib kelardi. Bor gapni to‘satdan aytib, oyijonini bir sevintirmoqchi edi. Shuning uchun ham yolg‘onladi.

– Qosimdan kitobimni opkemoqchiydim.

– Nima, kitobni tush ko‘rib chiqdingmi? Choy-poyingni ich, yomg‘ir sal selgisin. Kitob qochib ketarkanmi?

– G‘izillab borib kelaman. Xo‘p deya qoling...

Ona xo‘rsindi.

– Mayli, faqat tez qayt. Ko‘chada sanqib yurma. Otangni chononini yopinib ol!

– Fartugim bor-ku.

Ona indamadi. Avaz paxta teradigan etakni yoninib, ko‘chaga chiqdi.

Yo‘llar, ajriqli so‘qmoqlar, juyaklar bilch-bilch loy. Dalada qimirlagan jonzot yo‘q. Yalang‘och g‘o‘zapoyalar ertangi izg‘irinda junjikayotganday, yarim yumuq ko‘saklarda mo‘ralab turgan oq tolalar issiq xonasini tark etishdan qo‘rqayotganday...

Avaz paxtasi mo‘lroq joyni ko‘zlab, jo‘yakka kirdi. Etigi to‘pig‘igacha loyga botib ketdi. Oyog‘ini loydan zo‘rg‘a sug‘urib, yonidagi egatga qaradi. U yerda ham suv ko‘llab turardi. Avvaz ishga kirishishga jur‘at qilolmay, g‘o‘zapoya uchida osilib qolgan momiqni



betlamay oldi. Paxta ho‘l, muzday edi. «Ho‘l paxta og‘ir bo‘ladi, o‘ziga dalda berdi u, – o‘n kilo ham gap bo‘ptimi!» Shu zayl Avaz terishga tushib ketdi.

Yomg‘ir bir maromda yog‘ar, paxtazordan xuddi pilla quri dadashovurga kirgan paytdagidek shitir-shitir ovoz eshitilardi. Hayal o‘tmay bolaning ustboshi jiqqa ho‘l bo‘ldi. Nam badaniga o‘tib, yelkari sovqotdi, lablari, butun vujudi qaltiray boshladi. Buning ustiga etigi ham tobora og‘irlashib borar, oyog‘ining har poyiga bir pudlik tosh bog‘laganday zo‘rga-zo‘rga ko‘tarib bosardi. U etigiga yopishgan loyini tez-tez g‘o‘zapoyaga artib, yana ishga zo‘r berardi. Etagidagi yukning salmog‘i dam sekin-sekin og‘irlashib boraverdi. Nazarida tergani yigirma kilodan ham oshib ketgandek tuyular, lekin chamalab ko‘rgach, ko‘ngli to‘lmay, to‘rt tomonga alanglardi.

Avaz egat adog‘iga chiqqach, etagini yechib, ko‘lmakda etigini yuvdi. Suv shu qadar sovuq ediki tishi taqillab qoldi. Paxtazorga kirishga yuragi bezillar: go‘yo qarshisida bildillagan botqoqlik turibdi-yu, qadam bossa yutib yuboradiganday...

Avaz paxtasini yomg‘irdan panaroqda-daraxt ostiga to‘kib, yana terishga tushdi. Ammo, qancha tirishmasin barmoqlari ixtiyoriga bo‘ysunmas, chanoqda osilib turgan paxtani shunqoq olib, etakka tashlashga ham qurbi yetmay, qaltirardi.

Yomg‘ir hamon quyardi...

Avaz ortiq chidolmay, paxtazordan chiqdi. To‘kkan paxtasini etakka solib, so‘qmoqqa sirpana-toyg‘ona shiyponga qarab jo‘nadi.

Katta paykal etagidagi shiyponda hech kim ko‘rinmaydi. Shiyponga tutash uzun ayvon sahniga tizza bo‘yi paxta yoyib tashlangan. Qalin chopon kiygan uch kishi turdagi xirmonda yonboshlagan quyi suhbatlashmoqda.

– Sabil qolg‘ur, yomg‘ir odamni butkul ezib tashladiku, – dedi Nishonboy tabelchi choponiga burkanib.

Padariga ming la‘nat! – asabiylashdi Suvon traktorchi. – Bir hafta, o‘n kun chidab ber, menga desa keyin tosh yog‘maydimi!

Nishonboy tabelchi qo‘nishib esnadi:

– Xa-a, endi buyog‘i qiyin bo‘ladi, cho‘ziladi.

– E-e! Sen bilan menga qaysi-qachon oson bo‘luvdi! – suhbatga aralashdi halidan buyon miq etmay o‘tirgan shiypon qorovuli. – Har yili ko‘rgan kunimiz shu-da. Bahorda ana sel bosdi, mana qo‘l qo‘ydi deb,

osmonga qarayverib ko'zing teshiladi, saratonda quloqma-quloq ketmon ko'tarib yuguraverib tovoning qavaradi. Ko'zni, endi, gapirmasang ham bo'ladi-oyoqni uzatib bi-ir dam olayin deganingda ahvol bu!

Bu haftagina yog'may turganida-ku... – Suvon traktorining ko'zi shiypon yonidan chiqib kelayotgan bolaga tushib qoldi. – Anavini qaranglar! – dedi u hovliqib. – Loyxonadan chiqqanmi? Kimning bolasi bu?

– Ahmad brigadni o'g'li-ku! – dedi bolani tanigan qorovul hayratdan qotib.

Nishonboy tabelchi rangi uchib ketdi.

– Avaz? – dedi u beixtiyor o'rmidan turib ketib.

– Qayoqdan kep qolding?

Avaz ulardan uch-to'rt qadam narida to'xtab, burnini tortdi. Ust-boshidan chak-chak loyqa suv tomardi.

Shunday havoda nima qilib yuribsan? – ovozini balandlatdi Nishonboy tabelchi. – Yelkangdagi nima?

Avazning lablari arang qimirladi:

– Pax... paxta

– Paxta?... – tabelchining dami ichiga tushib ketdi.

– Qayoqdan olding paxtani?

Suvon traktorchi tuxpunmay yonidagilarga alangladi:

– Paxtani qayoqdan olding?

– Ter... terdim.

– Nim - ma?! – Suvon traktorchi irg'ib turib ketdi.

– Senga qaysi hayvon shu paytda paxta tergin, deb aytdi, a? Nima, kolxozning Kuni sen distalodda qarab qoptimi. Tashla yelkangdagini! Tashla deyapman senga!

Avaz paxtasini Suvon traktorchi tortib oladiganday bir qadam orqaga tisarilib, Nishonboy tabelchiga qarab javdiradi.

Nishonboy tabelchi go'yo sirini oldirib qo'yadigandek atrof-dagilarga olazarak ko'z tashladi-da, so'ngra egilib, Suvon traktorining qulog'iga shivirladi. Traktorchi ham birdan bo'shshib qoldi.

– Bechoragina bola-ya, e, attang, – dedi u Avazga ezgin boqib va to'satdan Nishonboy tabelchiga o'dag'aylab ketdi. – Yakka mixday nega qotib qolding, enagardi bolasi! Shunaqa degan ekansan o'lchab olmaysanmi paxtasini!

– A?.. Hozir, hozir... – Nishonboy tabelchi dovdirab bolaga yaqinlasharkan unga nima deyishni o‘ylab battar ezilardi. Axir bundan uch kun avval Avaz «Amaki, o‘n kilogina qoldi» degan edi-da. Nima deydi, nima deydi endi?! Tuykusda Nishonboy tabelchining ko‘nglida bir shumlik nish urdi.

– Buning o‘n kilo chshumaydiyov, dedi u bo‘ynini cho‘zib bolaning yelkasidagi yukka ko‘z tashlarkan, – kamga o‘xshaydi, kamov...

Avaz sovqotib, yo‘taldi:

– Xoy, xo‘kiz! Yukni ol, boladan! – tutoqib baqirdi Suvon traktorchi. – Otib yubor, oyog‘ining ostiga ot, nimaga baqrayasan, zangar!

Nishonboy tabelchi og‘ir-og‘ir yutindi, lekin boladan yukni olishga qo‘li bormay, siniq iljaydi:

– Bo‘pti-bo‘pti, ketsa bizdan ketar, – dedi u yig‘layotganday qaltiroq ovozda. – O‘n bo‘lsa – o‘n-da... Huv anov yerga oborib to‘kaqol...

– Odammas, mol, bu mol! – Suvon traktorchi uchib kelib boladan etakni yulib oldi-yu, undagi paxtani jahl bilan sochib yubordi. – Sen bola, nodon bo‘lmasang, odam ko‘rib ketganday kelib-kelib shu muttahamaning gapiga ishonasanmi? Bu ignaning teshigidan tuyani o‘tkazadigan shayton-ku!

Avaz ilkis xushyor tortdi. «Bu qanaqasi», deganday Nishonboy akaga savol nazari bilan tikildi.

– Amaki, shu gap to‘g‘rimi? Aldamaganmidingiz, meni?..

Yo‘q-yo‘q, ye shosha-pisha bolaning so‘zini bo‘ldi tabelchi. – Hali bor, hali kam. Yana yuz, yo‘q-yo‘q, ikki yuz yetmaydi, ikki yuz...

Avazning tishi taqillashidan, vujudi qaltirashdan to‘xtab qolganday bo‘ldi.

– Nega bunday deysiz? Ikki tonna, roppa-rosa ikki tonna bo‘ldi-ku!

Nishonboy tabelchi o‘zini qayoqqa olib qocharini, kimdan najot kutarini bilmay yonidagilarga iltijoli termildi.

Palid! Iflos! – qo‘llari mung bo‘lib tugulgan Suvon traktorchi xumi urmoqchiday tabelchiga xezlandi. – Otasining boshiga yetganlaring kammidi? Bu go‘dakning gunohi nima? Mayib qilmoqchimiding uni, a?!

Halidan beri hamma alamini ichiga yutib kelayotgan Nishonboy tabelchi ham portlab ketdi:

Ha, urmoqchimisan, ur, ur manovi yerimga! – u yoqasini yirib, jundor ko'kragini Suvon traktorchiga tutdi. – Ur! Nimaga qarab turibsan! Ha – aldanchiman, o'g'ri – kassobman! Yorib tashla ko'kragimni, ichim zardobga to'lib ketdi-ku, axir! – Suvon traktorchi qo'l siltab teskari o'girildi-da, nari ketdi. Nishonboy tabelchi Avaz tomon burilib, telbalarcha yalina boshladi. – Baraka topkur Avazjon, sen yuzingni burma, sen ur! Urmaysanmi, bolam, ur!

Yolg'onchi! – dedi kutilmagan nohaqlikdan yurak-bag'ri o'tranib ketgan Avaz. – Hammangiz aldanchisiz, aldanchi. Aytaman, hammangizni otamga aytaman! Ota, otajon! - Bola keskin burildi-yu, izillab yig'laganacha yomg'ir sim-sim yog'ayotgan kimsasiz dala bo'ylab yugurib ketdi...

## 列 (サフ)

まだ夜が明けないうちにライム爺の目が覚めた。彼は辺りを見回してから、外に出た。最近、ぐっすり寝込んだり、起きたり、家から出るのに遅れたりしていると、日の出もしていないころの静けさを侵して、誰かがすぐに呼んでくる：

「ピラフに行きましょう！」

これは爺の耳に—「列に加わってください！」というふう  
に聞こえる。

ライム爺はすると歩き始めの子供のようになってしまった。そういうふうによく歩き始めたこの世界は、またそのように終わるのを感じられ、毎日家の門から双柱まで一隣人のみんなが集合しているところまでの距離を歩くうちに、自分の各一步を聞きながら、意識には何かが明らかになってきたように思える。ときたまこの距離を人生の道程に、列の順番はというとその道程に押された印章になぞらえていた。

隣人が集まると、ライム爺は一人ずつ周りの人を見まわし、彼らを連れて行く。

爺は手を後ろにして歩く。もう少しばかり前には爺の後ろにグロム爺が歩いていて。彼は背が高く、肩幅も広い人だった。いつも“ベラモル”というたばこを吸っていて、たまに近くの人に話しかければ、誰かとケンカしたように静かに歩いてもいた。

グロム爺は人生において寝るとき布団を使わなかった。一昨日、近くの結婚式に行った。身体のどこかが痛いとも言わなかった。逆に、ライム爺が心配して体が痛んだ。「グロム。」一と言い、「遠くには歩けない気がするのだ、もし、わしが行けなかったら、隣人たちを導いて行ってきてな!」。するとグロム爺がニコニコしつつ、ふうふう言った：

「気がしなくなったも何もそれから十年ほど経っているだろう。」

「自分もショックだよ、グロム。」とライム爺が言った。「元気はなくさないほうがいいよな。」

結婚式の道にへと曲がるところで坂道が始まった。

「ここからは全然歩けないのだ。」とライム爺が言った。「つまづいてしまうような気がするのだ。」

グロム爺は彼の腕をとって、冗談で言った。「後ろには俺がいるから、安心して歩いてください!」

...その会話を思い出し、ライム爺の心が躍った。暗い道で一人で歩いて、今すぐつまづいてしまうような気がした。安心しきって歩くグロム爺がもういない。当の会話の翌日...彼は亡くなった。突然の別れはライム爺にショックを与えた。グロム爺は列の並びから離れていった...

ライム爺はもう 50 年ほどみんなと一緒にピラフに行っている。彼は、お父さんを前に座らせ「これから君も隣人たちの所に来るんだよ。私は一日元気のときもあれば、二日間病気にもなることもあるよ。誰かが来たら『ハーイ!』と言って出るのは君だからね。」といわれたのを覚えている。その頃お父さんの話を喜んだのを覚えている。今はというと誰かが「まだ若いですよ。」と言うと、口では「いやー。」と言うものの、内心嬉しくなったりするのだ。

隣人たちとピラフに行った時、最初の頃、みんなと挨拶してから列の後ろに付き添って歩いていた。何年間もそういうふうになってきた。2 軒離れた隣人の息子もピラフに出るようになり、ライムの後ろに並んだ。そのとき、ライムは自分が大人になったように感じた。年が経つにつれ、彼より後ろの列が伸

びてきた。それから、ライムがだいたい列の真ん中を歩くようになった。ライムは鼻が高くなるような人間ではないけれど、ピラフに行く人が増えているためか、尊敬されて来たためか、彼に道を譲る人がいるのには内心喜んでいた。

ライムが式などに行くようになった頃、オリフ爺が亡くなった。代わりにマフカム爺が列を導くようになった。彼は長生きし、100歳ぐらいまで生きていた、列は長くなれど減ることはなかった。急にマフカム爺とホウサン爺がなくなった。その時、お年寄りがこんなことを言ったことがある：「マフカム爺はホウサン爺を連れて行った。」その後、ライムのお父さんの前にロツク爺—彼は一つの足は板のようだった—それからミルジャリル爺、園丁—式場では彼に末っ子がピラフを食べさせていた、それは戦争時に彼が両手をなくしたからだった... ヴァホブ爺の後列を彼の父が導いていた。今は...ライム爺は後ろから続いてきている隣人たちのことを考えた。背の高い、低い人物...有名な、おしゃべりな、いやな人物...独り言には似つかない人物...列ではこういったものは関係ない。人の地位、資産は関係なく、彼らは社会のルールを守るのだ—各人物は列では自分の順番を持っていること；この順番は段々前に進む—後ろから真中へ、真ん中から前に、その後は...列から離れる。この事実から離れないのだ、誰もが、この列を前後に動かさないのだ。

ライム爺は列の後ろを人生の始まりに、列の前を人生の終わりに、それに、この列を人生に例える。

ライムの席が列の真ん中になったころには、頭に一つの変な案が浮かんだ。列を見回すとお互いに尊敬し合っている人がいても、自分が列の前か、二人か三人の前、最低一人の前に立ちたいといった人が結構いる。こんな人は自分でわかっていようが、わかるまいが、お年寄りの前に歩いている。結婚式場も、お葬式場も人のいっぱいいるところだ—知り合いがないのかこんな人たちには列の後ろから続いて歩くのは恥である。

列の不文律を守らず、ライム爺の前を歩いて歩いた人もいた。しかし、爺は起こらなかつた、腹も立たなかつた。それどころか人間味も、敬いも変わらなかつた。残念なことだが、元

の“ライムさん”はもういない。もう—ライム爺だ。列のお年寄りと言ってピラフに必ず呼ばれる。塹壕の向こう側に一若者がいて、反対側にライム爺—が一人いる。その時、ライム爺の頭に一つの案が浮かんだ：少しだけでも列の後ろに歩けば！... 「また何が欲しいのかい、ライムよ？」—と自分にそう言い聞かせてみた—マハツラ（自治体）のお年寄りで、尊敬されていれば、隣人たちが君を後ろに歩かせはしないだろう？

ライム爺は漠然とし始めた。いつも文句したときにグロム爺が叱っていた「ライム爺、どこの馬の骨なんだい？この世に生まれたのなら、楽しみなさいよ！努力しなさいよ！時間がたち、この世を離れるようになったら、何も言えず死んでしまおうだろうよ！」

グロムのこんなまずい冗談に怒ったが、あまり顔に出さないよう隠した。「ちよつとなあ。」と呼び、「このマハツラには昔からの習慣がある。今まで先に来た人は先に、後に来た人は後に死んでいった。隣人たちの中で一番年上なのは—わしだ。わかつたかい？もし、市が来たらわしに会わせなさい。もっと年上のがいるよと言いなさいな！」

グロム爺はそのようにはしなかつた...隣人たち、親せき、知り合い、皆が葬式に来ている。

「わしは少し手伝いに行くわい。」ライム爺は隣人たちにそう言って門の近くに置いてある椅子に座った。次々に来ている人々は列になり、グロム爺の家に入ったり、出たりした。

「結婚式であれ、葬式であれ、台所、仕事であれ—10人か2人集まったところには年上が先に、年下が後に歩く。これは社会の規則である。しかし...」ライム爺は杖に顎をあてがり、進む列の前、真ん中、後ろを眺めながら、いろいろな年齢の人を考える、彼らの中で年上の人を追い越して、もっと前に歩こうという人がいるのを見てはくすくすと笑っている。

Hali tong bo‘zarmay Rayim cholning uyquasi qochdi. U imillab - simillab kiyindi - da, ko‘chaga chiqdi. Shunday kunlarda g‘aflat bosib uxlab qolsa yoki uyg‘onsa va darvozadan chiqishga hayallasa, subdi sodiq sokinligini buzib, darrov chaqirishadi:

Oshga - a - a!..

Uning qulog‘iga bu - «safga - a - a!» degandek eshitaladi.

Rayim chol keyingi paytlarda tetapoya boladek atak - chechak yuradigan bo‘lib qoldi. Atak - chekchakdan boshlagan dunyo yana shu tarzda Yakunlanishini ich - ichidan his qilar, kunda - kunora darvozadan qo‘shaloq simyog‘ochgacha - qo‘shnilar to‘planadigan joygacha bo‘lgan masofani bosib o‘tar ekan, qizining har bir qadam tovushini diqqat bilan tinglar, shuurida nimadir oydinlashayotgandek edi. Ba‘zan bu masofani umrining o‘lchoviga, safdagi o‘rnini esa shu o‘lchovga bosilgan mudrga o‘xshatardi.

Qo‘shnilar to‘plangach, Rayim chol yonidagilarga birma - bir qaraydi, keyin yo‘l boshlaydi. Muysafidning peshyonasidagi ajindek ilang - bilang saf cho‘zilib yo‘lga tushadi.

Uy Rayim chol boisharadi. Ota beliga mador bo‘lsin uchun qo‘llarini orqasiga qilib yuradi. Yaqin - yaqingacha Rayim choldan so‘ng G‘ulom ota yurardi. U kelbatli, yatrindor edi. Og‘zidan «Belomor» arimas, papirosni tishlab olganча onda - sonda ganga qo‘shilmasa, aksari yonidagilardan arazlagandek jim boraverardi.

G‘ulom ota umrida ko‘rpa - to‘shak qilib yotmagan edi. Bir kun burun qo‘shni ko‘chaga to‘yga chiqishdi. Biror yerim og‘riyapti, deb nolimadi ham. Aksincha, Rayim chol zorlandi. «G‘ulom, dedi, - olis yurishga chog‘im kelmayapti, mabodo men chiqolmay qolsam, qo‘ni - qo‘shnilarga o‘zing bosh bo‘lib, borib kelaveringlar». Shunda G‘ulom ota miyigida kuldi, xiyol o‘tgach, to‘ngilladi: «Chog‘ingiz kelmay qolganiga ham o‘n yilcha bo‘ldi - yov?» «O‘zim ham hayronman, G‘ulom, - dedi Rayim chol siniq ovozda. - Nasibang qirqilmasin ekan...» Qo‘shni ko‘chaga muyulishda yo‘l keskin nishablashdi. «Shunaqa joydan hech yurolmayman, - dedi Rayim chol, - munkib ketayotganday bo‘laveraman». G‘ulom ota uning tirsagidan oldi, keyin hazillashdi: «Orqangizda men borman xotiringiz jam bo‘lsin. Tuningizning baridan tutib yuraman o‘zim».

Shu gapni eslab, Rayim cholning yuragi orziqib ketdi. Qorong'ilikda bir o'zi borayotgandek, hozir munkib yiqiladigandek tuyuldi. Baridan tutib yuradigan G'ulom ota esa yo'q. O'sha hazil - mutoyiba aralash suhbat bo'lgan kunning ertasiga... nasibasi uzuldi. Kutilmagan bu ayriliq Rayim cholni kalovlantirib qo'ydi. G'ulom ota safning adolatli tartibini buzib ketdi...

Rayim chol qariyb ellik yildan buyon el - yurt qatori oshga chiqadi. Esida, rahmatli otasi ro'parasiga o'tqazib: «O'g'lim, endi sen ham mahalla - kuyga aralash. Men bir kun sog' bo'lsam, ikki kun nosog'man. Eshigimizdan labbay deb chiqadigan erkak, - sensan», degan edi. O'shanda otasining gapidan ichi toshib ketgani hamon yodida. Bugun esa, bitta - yarimta hazildashib, hali yoshsiz, desa, «yo'g' - e» deb qo'yadiyu ichida sevinadi, ko'ngli ko'tariladi.

U dastlab oshga chiqqan kezlari keksayu yosh qo'ni - qo'shni bilan salomlashardi - da, ularga ergashar, ya'ni safning eng oxirida qo'l qovushtirib boraverardi. Biron yilgacha shunday bo'ldi. Ikki uy naridagi qo'shnining o'g'li ham oshga chiqa boshladi - yu, Rayim oxiridan ikkinchi bo'ldi. Shunda u birdan ulg'ayib qolgandek tuyuldi. Yillar o'tdi va uning ortidan saflanuvchilar soni yanada ko'paydi. Juda o'rtada bo'lmasa ham har holda, shunga yaqinroq joy endi uniki edi. O'zgalar izzatidan manmansirashi garchi tabiatiga yot bo'lsa - da, ba'zan oshga chiqadigan yoshlar ko'payayotganiga - odam uchun hurmat - ehtirom ham zarur ekan, degan xayolga boribmi - o'ziga yo'l bo'shatadiganlar seroblashayotganiga ich - ichidan mamnun bo'lib qo'yardi.

Rayim to'y - ma'rakalarga aralasha boshlagan kunlar Orif bobo bandalikni bajo keltirdi. Qatorni boshqarish Markam buvaga qoldi. U uzoq yashadi, chamasi, yuzni qoraladi, saf uzaysa uzaydiki, qisqarmadi. Birdan Markam buva, keyin Xusan tog'a omonatlarini topshirishdi. O'shanda kattalar, «Xusan tog'ani Markam buva tortib ketdi», deyishgan edi. So'ng, da - ya, otasidan ilgari Razzoq bobo - u yog'och oyog'ini dudillatib yurar edi - keyin Mirjalil bog'bon to'y - ma'rakalarda unga kenja o'g'li osh yedirar, chunki urushda har ikkala qo'lidan ajralgan edi... Vadob choldan keyin safni «yetaklash» uning otasiga qoldi. Endi esa... Rayim chol orqasida gurunglashib kelayotgan qo'shnilarni xayolan bir bir ko'z oldidan o'tkazdi. Daroz, o'rta bo'y, pakana... Savlatli, suhanboz, ko'rimsiz... Biri - biriga o'xshamaydi... Saf uchgun buning farqi yo'q. Nasl - nasabi, toparmon



- tutarmonligidan qat'iy nazar, ular hayotning eng odil taomiliga bo'ysunishadi - har kim yoshiga ko'ra o'z o'rnini oladi. Bu «o'rin» muttasil ilgari siljiydi - orqadan o'rtaga, o'rtadan oldinga, so'ngra... saf tark etiladi. Chekinishga yo'l yo'q, hech kim, hech qanday kuch bu taxlit siljishni na sekinlanggira va na ortga qaytara oladi!..

Rayim chol safning oxirini hayotning boshlanishiga, qatorning boshini umrning intihosiga, binobarin, safni hayotning o'ziga qiyoslaydi.

Rayimning «manzili» safning o'rtalariga siljib qolgan kezlar xayoliga g'alati bir fikr keldi. Razm solsa, aftidan, bir - biriga sertakalluf ko'ringan ayrim qo'shnilar orasida zimdan adovat ham bor, safda yoshiga qaramay ikki - uch, jilla ko'rsa bir kishidan avval turishga - safning oldinrog'ida bo'lishga intiluvchilar yo'q emas ekan. Undaylar goh parishonxotirlik qilib, goho ko'ra - bila turib o'zidan ko'ra yoshi ulug'rog'lar oldiga tushib ketaveradi. To'yxona ham, azaxona ham gavjum joy - tanish - notanish, do'st - dushman bor. Shularning ko'z o'ngida saf oxirida sudralib kelish unday kimsalar uchun uyat, taqir.

Saflanishning yozilmagan taomilini pisand qilmay, Rayimni ortda qoldirib ketganlar kam bo'ldi. Lekin u na churq etib og'iz ochdi, na gashi kelganini sezdi. Shunga qaramay na odamgarchilikdan, na obro' - izzatdan ayrildi. Esiz, «Rayim aka» bo'lgan davrlari o'tdi ketdi. Endi u - Rayim chol. Safimizning fayzisiz, deb uni oshga chiqmagan qo'yishmaydi. G'ulom ota esa safni o'pirib ketdi. Xosil bo'lgan «Handak»ning narigi tarafi mustahkam - yoshlar, bu tomonida esa Rayim chol - yolg'iz. Shu palla Rayim cholning xayoliga bir o'y keldi: loaqal bir mavsum safning oxirida yursa edi!.. «Ko'ngling yana nimalarni tusamaydi, Rayimboy?» - dedi o'ziga - o'zi. - Ko'chaning arzanda qariyasi bo'lsang, izzatingni joyiga qo'yib yurgan qo'ni - qo'shnilaring seni orqada qoldirisharmi - di?..»

Rayim cholning xayollari chalkashdi: bo'lar - bo'lmasga zorlanib, hastaligidan noliganida G'ulom otaning beozorgina jerkib tashlaganini esladi: «E - e, qanaqa odamsiz, Rayim aka! Dunyoga keldingizmi, miriqib yashayvering! Tirikchilikdan kochmang. Paymonamiz to'lib, qani, safar haltangni ko'tar, deb kelib qolsa, oldiga tushib jo'nayverasiz - da. Shuyam bosh qotiradigan narsa bo'ldi - yu...»

G'ulom otaning tap tortmay hazillashganidan Rayim chol qattiq muhtar bo'lsa - da, sir boy bermadi. «Menga qara, - dedi u, - ko'chamizning azaliy udumi bor. Shu vaqtgacha ham avval kelishi -

avval, keyin kelgan keyin ketgan dunyodan. Xozir hammangdan keksarog'ing - o'zim. Uqdingmi? Mabodo, oldiga solib ketadigan kelsa, menga ro'para kil. Yanayam qarirog'imiz bor, degin...»

Yo'q G'ulom ota unday qilmadi... Mana, qo'ni - qo'shnilar, qarindosh - urug'lar, yaqin - yiroqlar G'ulom otanikiga ko'ngil so'ragani kelishyapti.

- Men bir oz xizmatda bo'lay, - Rayim chol qo'shnilariga shunday deb darvoza yonidagi o'rindiqlardan biriga cho'kdi. Turnaqator tizilib birin - sirin kelayotgan saf - saf odamlar G'ulom otaning hovlisiga kirib chiqaverishdi. «To'yxonaga, azaxonaga, oshxonayu ishxonaga kirib - chiqishda - o'ntami - ikkitami odam to'plangap joyda ulug'lar - avval, yoshlar. - keyin yuradi. Odamgarchilikning taomili - shu. Lekin...» Rayim chol kassasiga iyagini tiraginicha o'tayotgan safnig oldi, o'rtasi va oxirini kuzatar, turfa xil yoshdagi odamlarni muqoyasa qilar, ular orasida yoshi ulug'rog'larni bosib o'tib, oldinroqdan joy olishga intilayotganlar kam borligini sezib, miyigada horg'in jilmayib qo'yar edi.

目次  
MUNDARIJA

I. Gulyamov. O‘zbek va Yaponiya adabiy aloqalarining yangi bosqichi.....	4
イザット・グリャモフ ウズベクと日本文学関係	
晩冬のチューリップ (アブドゥラヒモヴァ・ディヨラ訳).....	8
QOR QO‘YNIDA LOLA ( <i>A. Diyora tarjimasi</i> ) .....	14
私の泥棒ちゃん (メフモノフ・ファルフジョン訳).....	21
MENING O‘G‘RIGINA BOLAM ( <i>M. Farruhjon tarjimasi</i> ) .....	25
真っ白な雪 (ウゾコヴァ・ディラフルズ訳).....	29
OPPOQ QOR ( <i>U. Dilafruz tarjimasi</i> ) .....	32
微妙な課題 (クルバノヴァ・グルチェフラ訳).....	36
NOZIK MASALA ( <i>K. Gulchexra tarjimasi</i> ) .....	39
熊の心配 (ユヌスフ・ゴイプジョン訳).....	42
AYIQ TASHVISHI ( <i>Y. G‘oipjon tarjimasi</i> ) .....	47
コクヨル (ミルザハリロフ・ファッルフ訳).....	54
KO‘KYOL ( <i>M. Farrux tarjimasi</i> ) .....	59
子ロバの成長 (メフモノフ・ファルフジョン訳).....	64
XO‘TIKNING BALOG‘ATI ( <i>M. Farruhjon tarjimasi</i> ).....	66
緑のニワ (クオシモフ・ハサン訳).....	68
YASHIL «NIVA» ( <i>Q. Xasan tarjimasi</i> ).....	75
息子 (カプロヴァ・グルミラ訳) .....	80
O‘G‘IL ( <i>K. Gulmira tarjimasi</i> ).....	91
列 (サフ) (ミルザハリロフ・ファッルフ訳).....	102
SAF ( <i>M. Farrux tarjimasi</i> ).....	106

# O‘ZBEK HIKOYALARI ANTOLOGIYASI

(o‘zbek tilidan yapon tiliga tarjimalar)

## ウズベク短編小説集

(ウズベク語から日本語への翻訳)

**To'plovchi va nashrga tayyorlovchi:**  
*Gulyamov Izzatilla*

**Muharrirlar:**  
*Tursunova Nilufar*  
*Ishimura Ikumi*

**Taqrizchilar:**  
*Xalmurzaeva Nodira*  
*Xayrulla Xamidov*

Tex.muharrir: **M. Zarifov**

To'plam Toshkent davlat sharqshunoslik instituti Kengashining  
2014-yil 6-noyabr 3-sonli qarori bilan nashrga tavsiya etilgan

Bosishga ruxsat etildi 01.11.2014.  
Bichimi 60x84 1/16 Shartli 7,0 b.t. 75 nusxada bosildi. Buyurtma № 10

Toshkent davlat sharqshunoslik instituti,  
100197, Toshkent sh., Shahrizabz ko'chasi, 25-uy.

